

ネクスト・ステージ

初芝 広

僕の父親は仕事もほとんどせず、酒飲みでギャンブルと女好きで、更に酷く暴力的な、絵に描いたような駄目男だった。

酒が切れると母親が僕を殴り、すぐ買って来い、と怒鳴る。機嫌が最悪だと酒瓶も飛んでくる。呑んだら呑んだ出大人しくなるのかということそうでもなく、ちょっとしたことで苛々して、やはり怒鳴る。そして案に違わず物を投げる。散々暴れると、今度はふいっと出て行ってしまふ。何日も帰ってこないときもある。金がないくせに、どういうわけか愛人はいるのだ。

うちには当然の如く借金があり、母親が休みもなく働いてどうにか僕を育ててくれた。

家で母が笑う日はなかったし、僕の身体から痣や傷が消えることもまた、なかった。暴力と罵倒と泣き声と物の壊れる音が日常だった。

中学を出ると、僕は家計を助けるために、すぐに近所の工場で働き出した。本当は、昼間だけではなくて、夜もコンビニかどこかでアルバイトをしたかったけど、毎日夕方六時には家に帰るようにしていた。

その頃が父親の暴力の激しさのピークで、僕がいないと、パートから帰ったばかりの母親が酷く殴られたのだ。額をぱっくり割られて、骨が見えたこともあった。母の財布から金を抜き出して、外で待たせていた水商売風の派手な格好をした愛人と街へ消えて行くこともあり、それはどうにもならなかったけれど、僕が間に入ればどうにかお金を取られることだけは、だいたい三回に一回くらいは阻止できた。だからできるだけ父と母を二人きりにしないようになった。

僕がいれば母は殴られることだけではない。何故なら、一発で壁まで吹っ飛んでしまう母親より、多少の重みがあってなかなか倒れない僕の方が、あの男にとっては殴り心地がよかったからだ。

僕はできるだけ顔を庇い、胴体にはコルセットを巻いて毎日仕事に出た。帰って来るなりサンドバッグの代わりになった。そんな日々が二年も続き、ある日、父が倒れた。

肝臓癌だった。しかも、さすがは沈黙の臓器と言われるだけのことはあって、発見されたときにはすでにかなり進行していて、癌細胞はあちこちに転移していた。僕と母は診察室に呼ばれ、父の命は持ってあと三ヶ月くらいだろう、と医者に告げられた。

僕はへえ、と言った。ちょっとびっくりはしたけど、びっくり以外の感情がなかなか沸いてこなかった。従ってへえ、のあとに続く言葉もなく、仕方がないから口を閉じた。見ようによっては安心して言葉を失くしているようにも受け取られたかもしれない。母親は何だか細い、呼吸と悲鳴の間みたいな声を上げて静かに泣いていた。

僕の母は根っからのお人好しで情の深い人だったから、病室のベッドで棒切れみたいになって横たわっている父親の世話を献身的にこなした。今までのことは全部許すから早く元気になってください、とまで言った。

父親は、それに答える元気さえなくしていた。言葉も喋ることができず、声を発するのは、あちこち痛がって唸るときくらいだった。その度に母が背中を擦った。僕は、見ている以外にすることがなかった。そのうちあまり病院に行かなくなった。最初の頃は、あの暴力的な父が動けないのが信じられず、また母を殴るんじゃないかと危惧して付き添っていたのだ。一日中点滴ががれた身体を見て、手もろくに上がらないの確認すると、自然に足が遠ざかっていった。

ある日、母親から父の着替えを持ってくると頼まれたため、洗濯したばかりのパジャマやら下着やらを紙袋に詰めて久し振りに病院へ行った。病室を覗くと、そこには枯れ木と化した父親しかいなかった。二人きりになるのは嫌だったから、着替えを入れてすぐの棚の上に置くと、母親を捜して病院内をう

ろついた。やがて、主治医と話している母の姿を見つけた。廊下の隅で、小聲で、何やら深刻そうに顔を寄せ合っていた。

僕は咄嗟に近くの階段の陰に身を隠して、会話を盗み聞きした。別に隠れることなどなかったのかもしれないが、気軽に声をかけられそうな雰囲気でもなかった。かと言って、黙って立ち去ることもできなかった。好奇心が、僕の身体を物陰へと導いたのだ。

旦那さん、今夜を越えられないかもしれません、と医師は言った。覚悟をしておいてください、と。

母は両手で顔を覆って泣いた。

僕は静かに踵を返した。

嬉しくて仕方がなかった。

二人から充分に離れてから走り出し、階段を二段飛ばしで駆け上がった。喉の奥から笑い声が漏れてしまって、口元を必死で腕で隠すものだから、傍からは泣いているようにも見えたかもしれない。

母さんと僕がどれほど苦勞をしたと思っているんだ。あんな奴、さっさと死ねばいい。確かにそう思った。

だけど、これまでのことを考えると、すんなり死なせるのも癪だった。殴られて折れたままろくな治療もせずに放置しておいたせいで、僕の肋骨は曲がってがっていたし、母の額には殴られてできた傷跡が残っていた。

仕返しをしてやろう。

スリッパが、キュッと音を立てた。

父親は喋れないがこちらの言葉は理解できる。ただ、返事ができないだけだ。

僕は、あいつの耳元で言ってやるつもりだった。

ひとつ教えておいてやるよ。あんた、今夜死ぬみたいだよ——と。

もしかしたら、二三日は生き延びるかもしれない。母親の介護のお陰で、最初に告知されていた三ヶ月は持ち堪え、もうすぐ四ヶ月目も乗り越えようとしていたからだ。しぶといとしか言いようがない。

しかし、さすがにそれももう限界なのだろう。僅かなりミットを、精々怯えて過ごせばいいのだ。

僕は、九十歳を超えた老人ではないのか、と疑うほどの姿にまで衰えた父親の枕元に立った。点滴チューブの刺さった腕は指先で押したら簡単に折れてしまいそうで、僕はこんな奴に殴られたんだっけか、とちょっと疑った。瞼が僅かに開いていた。黙っているだけで、起きているようだった。

睫毛の間から覗く濁った瞳を見ていると、散々苦しめられた記憶が蘇り、呼吸が震えた。ようやくすべてが終わるのだ、といった安堵感もあり、悲しいやら嬉しいやら、不思議な心持ちになった。ずっと鼻から息を吸い、屈み込んで、耳元に顔を寄せた。命の消えかけて行く者の発する気配なのか、濁った沼の傍に腰を下ろしたときと同じような空気が僕を包んだ。

僕の行動を訝しんだのか、父親は、先程よりも大きく目を開いた。灰色に曇った瞳がぐりと動き、薄い頬が微かに波打った。腰を曲げた姿勢のまま目が合い、僕は戸惑った。入院してから、これほどまでに意思のある目つきを見たことがなかったからだ。

怒っているのでもない。疑問を投げかけるのでもない。冷めて、それでいて物言いたげな目だった。思わず身体を起こした。父親は、痩せて落ち窪んだ瞼の奥の眼球で僕をじっと見つめ、カサカサに乾いた唇をもごもごと動かした。

「ひとつ、教えといてやるよ」

僕は驚いた。それは、今まさに自分が言おうとしていたセリフだった。

「知ってるか。お前——」

何日も喋っていない人が出す声色ではなかった。明瞭で嗜虐的な口調だった。籠っていて聞き取り難いけ

ど、どうやらそれは、僕が耳鳴りを起こしているからのようだった。父親は頬に皺を作った。どうやら笑ったらしかった。

彼は、言った。

「お前、まだ生まれてもいないんだぞ」

——僕は、そういう記憶を持っている。

「なにそれ。誰の話よ」

路地を挟んだ向こうの壁に背中を付けている晏流院心深(あんりゅういんこころみ)は、息の少なめの、ほとんど響かない声で言った。僕らの間に伸びた薄暗い通路に絶えず気を配っていて、肩口にひとつで結んだ髪の毛の一本一本の先が逆立っているようにも感じた。敵を威嚇する猫の雰囲気もある。そういえば、彼女の真ん丸くて茶色がかった瞳は、毛足の長い高級な猫にも似ている。

「僕のことじゃないけど、僕の記憶の中にある僕の話」

早口で答えて、レザーの手袋をした手を握ったり開いたりした。両方の腰に差した∞エアガンの重みのせいで、僕の黒いパンツが少し下がって、下着がちょっと見えている。

エアガンといっても空気で弾を飛ばすあれじゃない。僕のは、空気そのものを圧縮して飛ばす。威力は拳銃ほどでもないが下手なBB弾よりは強い。原理は不明。これを僕にくれた心深が言うには、ドイツの発明マニアの老人が道楽で作ったとのことだ。酸素のあるところでもなら装填なしで撃ちっ放しにできるから、∞エアガンと名付けられたらしい。

「意味がわからないわ」

心深は笑ったらしかった。ちらりと彼女に視線を遣るが、路地の先ほどではないにせよ高いビルに囲まれたここも決して明るくはないから、表情はよく見えなかった。乾いた風が僕と心深の髪を揺らす。僕とサイズ違いのブラックジャケットに、ショートパンツとスニーカー姿の彼女は、薄暗い路地から僕に視線を移した。「時間じゃないの」

「待って」僕は腕時計に目を落とす。「あと十秒。九、八……」

「で、どういう意味よ」

心深が笑いながら邪魔をした。僕はそれを無視してカウントダウンを続ける。「ゼロ」

僕の上半身が路地に吸い込まれ、それに釣られるようにして足を踏み出すと同時に腰のエアガンを抜く。枷を失った下半身が弾む。心深は僕より先に、昼休みが終わりそうなOLさんみたいな足取りで小走りに進んでいた。きゅっと上がったお尻が可愛い。両方の拳には、いつの間にか、キュートなお尻にはいささか不似合いの、黒光りするメリケンサックが装着されている。彼女の身体の軽さを補うゴツい凶器だ。

「誰か、知らない人の思い出が、僕の中に入ったんだ」さっきの返事を、僕はする。

「人間は、自ら記憶を書き変えながら生きてるのよ」心深が言う。まだ声が笑っている。

「チカくん、父親の顔知らないって言ってなかったっけ」

確かに、物心つく前に既に父親は亡くなっていて、母親ひとりで僕を育ててくれたのだった。その母も僕が高校生のとときに他界しているから、今の僕には両親がいない。

「だから、僕が経験したことじゃないんだ」

路地は突当たりで二股に分かれていた。心深が迷わず右へ進む。少しだけ開けていて、雑草の生えた空間に出た。先に佇む汚いコンクリートの建造物に、下の方を滅茶苦茶に蹴られて所々ペンキのがれた緑色のドアが、むっつりと嵌っている。建物は二階建ての高さで、一応まだここは外なのだけれど、周囲を高い建物が囲んでいるせいでドアの周りは夕暮れ時くらい暗かった。

「いつからよ」

さくさくと草を踏む心深の身体が建物の影の中に入る。オーバーニーソックスとショートパンツの間の太腿と、髪を束ねているせいで半分だけ露わになった首筋だけが、白く光って見える。

「いつだろ……三ヶ月くらい前かな」

「疲れてるんじゃないの？」

「確かに、疲れてはいるけどね」

ドアノブを握った心深が舌打ちを漏らす。「鍵かかっている」

「開けてよ」

「急かすんじゃないわよ」

再び、舌を鳴らされた。

心深の指が、ドアノブの周りを撫でる。カラン、とノブが外れて彼女の手落ちる。まったく、凄い技だ。背後に投げ捨てられたドアノブの軌跡を追って、僕は今来たばかりの通路を振り返った。静まり返ったそこから新鮮な闇が溢れていて、空き地に届こうとする光をじんわりと染めている。視線を戻すと、大股で二歩くらい戻った草の上に、まるで何十年もそこにあったみたいな顔をして、銀色の丸いノブが転がっていた。その周りに錆びた螺子が数本と、ついでに蝶番も飛んできた。

「結局全部外しちゃったじゃない……どうやって入ったのかしら、こんな建て付けの悪いドア」

心深がぼやく。どうやらノブを外しただけでは上手く開けられなかったらしい。倒れそうなドアを、僕が支える。

「行くわよ」

いい？ いいわよね？ とくるりと丸い猫の目が訊く。

「うん」

僕はドアから手を放した。心深が靴底でそれを向こう側に蹴り倒す。轟音と共に埃や砂が舞い上がった。ずっと奥の方で何かが動いた音がした。目を凝らすと、コンクリートの廊下の突き当たりに木のドアがある。しかし、暗い。犬か何かが寝ていたとしても、気付かずに踏んでしまいそうだ。

中からは誰も飛び出しては来なかった。人間二人が身体を斜めにしてやっと擦れ違える狭い廊下で、できればこの場で一気に方を付けてしまいたかったらしい心深の、落胆の溜め息が響く。

「お先にどうぞ」

僕は道を開けてくれた心深の横を擦り抜けた。「どうも」

緑のドアを蹴倒してから二十秒ほど経っている。中の連中は、誰かが乗り込んできたことがわかったはずだ。薄暗がりの中で虹彩を調整した僕は、勢いを付けて薄い木のドアを蹴り開けた。心深に螺子を外してもらうまでもなく、このくらいなら簡単に突破できる。埃だか小麦粉だかわからない白い物で濛々とした室内に、噓せると格好悪いから息を止めて入る。

部屋の中央に大きな作業台が横切っていて、材木が至るところに落ちていた。正面の壁際にロッカーが二つ並んでいる。奥にもうひとつ部屋があって、間には何も仕切りがない。そちらに窓があるおかげで、明かりの点いていない部屋はさっきの空き地くらいには明るかった。

作業台の下とロッカーの中に人の気配を感じるが、奥の部屋はわからない。僕は天井に向かって右手を上げ、引き金を引いた。パン、と乾いた音がした。空気だからといって嘗めてはいけない。天井にはしっかりと凹みができていた。

「裕也(ゆうや)くんを迎えにきましたア」

僕がそう言うと、角材を振り上げた男が二人、何やら声を出しながら奥の部屋とロッカーの中からそれぞれ飛び出してきた。

目の前に立ちはだかった特に特徴のない男の手と足を迷わず撃つ。追い打ちをかけるように心深が、作業台に両手をついて両足を揃えて鳩尾を蹴って意識を奪う。その男が床に沈む前に僕は、左手に持ったエアガンの空気圧を親指で調整してから、もうひとつのエアガンを口に銜え、両手で構えて別の男めがけてぶち込む。衝撃で僕の両足が滑って少し後退する。男は身体全体を空気の塊で押されて、再びロッカーに収

まって動かなくなる。

作業台の下の気配を無視して、更に奥へ向かう。家具も何も置かれていないがらんとした小部屋に男がひとり潜んでいて、足下に積んであった白い粉の詰まった小袋をいくつも投げてくる。僕はその男がしている濃い色のサングラスが羨ましくなる。いくら細めていても目が痛い。エアガンで袋を撃ち落とす度に視界が白くなる。吸い込んではいけないにおいがする。肺を悪くしそうだ。素直にぶつけられた方がマシだったのか、と一瞬反省するがもう遅い。

手持ちの袋がなくなったようで、一旦攻撃が止んだ。サングラス男が新たな粉袋を探そうと壁際へ後退した隙に、そっと戻ってエアガンの柄で作業台をロックする。がさごと人間の這い出る音がある。奥からサングラスが、両手に土嚢くらいの大きさの、白いものがぱんぱんに詰まった袋を持ってきた。もうそれしか残ってなかったのか。そんなものが炸裂したらえらいことになる。この場にいる全員の身体の表も裏も真っ白けだ。ほとんど自爆じゃないのか。

「うおおおおお！」

サングラス野郎は土嚢を頭上高く持ち上げた。

「うわっ、ちょ、まっ」

僕が身体を捻って作業台に突っ伏して頭を抱えると、脇を走り抜けた心深の鉄拳が、男の腹を抉った。どすんと音がしたが真っ白な世界はそれ以上色を濃くしない。心深が粉袋を受け止めたのだ。僕の足下にはただ、男がコンクリートの上に崩れる無残な振動だけが伝わってきた。サングラスが碎ける音を待ったが聞こえなかった。けほん、と粉っぽい咳が出る。

「もういない。三人だけみたい」

粉袋を、赤ん坊を寝かせるみたいにサングラス男の腹の上にそっと横たえた心深が、ジャケットの袖で口を押さえながら、作業台の傍へと戻って来た。僕を見上げて目を細める。「佐々木さんは、逃げた？」と小声で訊いた。

「うん」

「よし。撤収」

僕らは、散らかった部屋と伸びた男たちをそのままに、外へと走った。

通路の途中で、半ズボン姿の男の子を抱えた小太りのおじさんが蹲っている。僕は立ち止っておじさんの頭部に向かってエアガンを構える。

「俺たちが悪かった。この子には酷いことはしていない」

おじさんが、ホールドアップしながら言う。僕はガンを突き付けたまま無言で見下ろした。子供が、不安そうな目つきで僕らを交互に見る。

「本当だ」おじさんが目を伏せる。

「お……おじちゃん、優しかったよ」と子供がおじさんを庇う。

「……出るよ」

僕は∞エアガンを腰のホルスターに収めながら促す。

おじさんは、子供に励まされながら、よろよろと立ち上がってついて来た。

「おじさん、大丈夫？」

おじさん——佐々木さんがあまりにふらついているから、心配になって僕は訊いた。「どっか、怪我してるの？」

「いいや」佐々木さんは男の子の肩をしっかりと抱いたまま、顔を顰めて首を振った。「足が……痺れただけだ」

「あっそ」

無駄に男前なトーンで答えた佐々木さんの手から子供を抱き上げ、僕はスピードを上げた。

「おい、落っこすなよ」

「ほら、急いで」心深が佐々木さんのお尻を叩く。

誰かの爪先が、行きに心深が外したドアノブを蹴飛ばした。あたりは淡く煙(けぶ)っていて、それが石灰のせいかな僅かな光に目が慣れていないからなのかわからなかった。ふと振り返ると、しんと静まり返ったビルの入口から煙か湯気みたいに白いものが漏れてきていて、僕は何故かスーパーマリオに出てくる、背中を向けると追いかけて来るオバケを思い出す。

「裕也くん、お腹空いてない？」

大人しく抱っこをされている子供に声をかけると、歩調に合わせて弾んだ返事が返ってきた。

「すいて、ないっ……そ、れよりっ、おしっこっ」

マジか。

僕はポケットから車のキーを出すと、後ろに向けて放った。

「わ！ なによ」

「車出して、この先のコンビニにつけて。僕この子トイレに連れて行くから」

「わかったわ」

細い路地を一列になって走り、広い通りに出た僕らは、左右に分かれて更に走った。心深と佐々木さんは追手に見つからないように素早く車に乗り込むために。僕は、裕也くんをトイレに間に合わせるために。

「お、お兄ちゃん」

「なに？」

「コアラのマーチ、買ってっ」

「いいよ」

いいけど、きみ、暢気だね。

特に興味もない雑誌コーナーの前に立ち、ぼんやりと外を見る。一応、ビルで一戦交えた男たちが追って来ないかも気にしているが、まだしばらく目を覚まさない確信もある。それよりも、裕也くんをお家に帰したら貰える報酬のことを考える。

ここ数年、不況だとか低収入だとかで貧富の差が益々顕著になってきた。貧乏人は手っ取り早くお金を得るために窃盗や強盗や誘拐を企てる。

犯罪にも流行りがあるのか、最近は専ら誘拐ブームだ。僕らもある意味、昨今の流行りに乗ったわけだ。

僕たちは、誘拐された子供を誘拐犯から誘拐して親元に帰す仕事をしている。

とある中流以上の生活を維持している家庭が、莫大でもない、そこそこお金を蓄えてあれば何とか支払える金額を要求され、警察に言えば子供を殺す、と脅される。お金を取られるのは嫌だけど、可愛い我が子を殺されては堪らない。日本の警察は優秀だ。犯人にバレずに上手いこと動いてくれるかもしれない——と一〇番を押しそうになった頃、一通の封書が届く。

中には、「馬鹿なことを考えるな。金さえ貰えれば子供は返す」と書かれた紙切れと、子供のものらしき髪の毛が少量入っている。両親ははっとする。決して払えない金額ではないのだ。しかも、この誘拐に於いて狙われる高額所得者たちは、ほとんどが真っ当な手段でお金を溜めていない。会社経営の偉いさん方は特に、従業員や得意先からちょこっとずつちよるまかしたお金を、大事に大事に抱え込んでいる場合が多い。子供のことも心配だけれど、警察に通報して、万が一痛い腹を探られたら事だ。保身と我が子の安全を天秤にかけ、送られてきた紙切れに再び目を通す。金さえ貰えれば子供は返すという一文に希望を託し、本格的に犯人に渡すお金の用意を始めたところで、僕らの出番だ。

僕らは日頃から、高級マンションや高級住宅街を中心に、ビラをポスティングしている。内容は、『警察に相談できない事件にお困りの際は是非我が社へ』となっている。初めて目にしたときはくだらない、こんな妖しい会社に連絡するくらいなら警察に通報するわ、と思っけていても、いざ自分の愛息愛娘が連れ去られて、警察には知らせるなど言われてしまうと、藁にも縋る思いで電話をかけてくる。

成功報酬は身代金の半分を提示する。元々払えない金額ではなかった上に更に半額になるのだから、相手も、これは幸い、とばかりに即契約の運びとなる。

事件自体を世間に対して大っぴらにするわけではないから、僕らは今日のように暴力的に解決することを躊躇わない。誘拐された子を取り返せさえすればいい。僕はともかくとして、心深は戦闘面でとても頼りになる人だから、今のところ、奪還率だけに限って言うなら百パーセントだ。正直ぼろ儲け。

さて、誘拐の誘拐を生業とする僕が、どうしてこうも犯人たちの行動に詳しいか。

それは、実は最初の誘拐からずっと、僕たちが関わっているからだ。

タイミングよく髪の毛入りの封書を届けるのも、誘拐される子の家に前以てビラを入れておくのも、そもそも誘拐自体を計画するのが僕らなのだ。

僕ら、とは、どんな手を使ってでも子供を取り返す特高部隊の僕と心深、そして犯人側に潜入するスパイ的役割を果たす佐々木さんの三人だ。

街の片隅で燻っている、遊ぶ金の欲しい奴らや、借金で首の回らなくなった人を探し出して、佐々木さんがまず上手い話がある、などと持ちかけ、前金として幾らか支払う。中には普段から引ったくりやスリなんかで生計を立てている連中もいるから、この話にはほぼ乗ってくる。

そうなれば、彼らが子供の家や学校の下見をしている間に、僕か心深がターゲット宅のポストにビラを入れる。そして、佐々木さんが犯人たちを誘導して予め決めておいたアジトへ誘い、子供の髪の毛と手紙を封筒に入れて親元に送らせる。少し待てば、僕らのところに悲痛極まりない雰囲気の影響があつて、あとは、今日のような立ち回りに傾れ込む。

犯人役はどうせ後ろ暗いことだらけの奴らばかりだから、暴力を振るわれ子供が取り返されても、こちらが通報されることはない。少なくともこれまでは大丈夫だった。

子供を取り返しに来たのは警察ではないよだということと、すべてが終わって佐々木さんがいなくなった状況などを鑑みて、そこで初めて自分たちが騙されていたことに気付くはずだ。

殴られたのは痛いけれど、前金として幾らか貰っているし、別に逮捕されるわけでもなさそうだし、といういろいろ考えた結果、釈然としないながらも諦めるしかない。彼らにとっては単に『誘拐が失敗しただけ』だ。僕たちは、一度使った奴らには二度と声をかけない。そのためにわざわざ、住処とは離れた場所から犯人役をスカウトしてきて、誘拐自体はまた別の場所で行う。一応、犯人役にも気を遣って、そんなにこそこそしなくてもいいようにはしているのだ。

僕らは大所帯になる気はないし、くだらない仲間割れや裏切りが怖い。更に、万一どこかのグループが警察に捕まってしまうても、これなら足が付き難いのだ。

犯人役から離脱した佐々木さんは『途中で改心したおじさん』という役割で、子供と一緒に連れて逃げる。そうすれば三百万円（今日は）がぽんと手に入る。コアラのマーチ？ いいよ。買ってあげるよ。といった感じだ。

すっきりとした顔でトイレから出て来た、来年小学一年生になるという小出（こいで）裕也くんと一緒に、お菓子和ジュースをレジに持って行く。お願いします、と財布を出すと、レジの女の子がぽかんと見上げてきた。

何か、しくじったのだろうか。そんなはずはないけど、見知らぬ人にこんな目で見られる理由に心当たりがない。内心で焦っていると、裕也くんが服の裾を引っ張ってきた。

「ん？ どうしたの」

「お兄ちゃん、真っ白けなんだよ」

真っ白？ とジャケットの肩口を見ると確かに白い。そういえばさっき、石灰らしきものの入った袋をいくつか撃ち落としたりしたっけ。髪に手をやるとレジ台に粉が舞って、店員さんにももの凄く睨まれてしまった。こういうときは言い訳をしないに限る。こんなコントみたいな姿、何を言ったって臭く聞こえるだけだ。

お釣りを高いところから手のひらに落とされた僕は、裕也くんの手を引いて、粉末を振り撒きながらむしる堂々とコンビニを出た。ええ粉被ってますけど、それがどうかしましたか？ といった顔で。

心深が回してくれた車の助手席には、ご丁寧にビニールシートが敷いてあった。運転席は青と白のストライプ柄のバスタオルで覆われている。

「トランクに入ってたのよ」

へえ、そう。

サンタクロースがソリごと入れるくらい大きな煙突のある家の前で、心深は車を止めた。レンガ造りで、二階の窓にステンドグラスが嵌ったこの家が、裕也くんの育った小出邸だ。

裕也くんのご両親は、今頃気を失いそうになりながら我が子の帰りを待っているはずだ。先日の電話のときの取り乱しようで、裕也くんが本当に愛されて育てられているのを知った。怪我がなく空腹でもなくそれほど怖がっていないのも、佐々木さんのおかげだ。元気な姿を見て、両親は安心するだろう。

「着いたよ。降りよう」

シートベルトを外してバックシートを振り返ると、コアラノマーチを片手に持った裕也くんは、瞳を潤ませて隣に座った小太りのおじさんを見つめていた。

「おじちゃんは、どうなっちゃうの？」

小太りで、最近禿げ上がってきた頭をハンチング帽で隠しているおじさんが、困惑顔で僕の方を見た。

「オジサンはケーサツよ」容赦のない心深の右ストレートが減り込む。

「おじちゃん、ゆるしてあげて。僕誰にも言わないから」

裕也くんはとうとう泣き出した。

仕事を始めて一年が経ち、佐々木さんは子供の扱いが上手くなったみたいだった。初めてストックホルム症候群を目の当たりにした。心深が、僕に肩を竦めて見せる。シナリオの制作は主に僕がしている。何とかしなさいよ、というわけだ。

「……わかったよ」と僕はつい、のび太くんもびっくりの安請け合いをしてしまう。

「このおじさんは、赦してあげようね」

「ほんと？」

「うん。ほんとだよ。だからもう泣かなくていいよ」

裕也くんがにっこりと笑った。

「よかったね！ おじちゃん」

「お、おおお……ありがとうございます改心致しますう……」

佐々木さんが、両手を合わせて念仏みたいに何度もお礼を言った。

裕也くんを換金して車に戻ると、案の定心深に説教された。

「なんで誘拐犯を赦すなんて言うのよ」

心深が怒るのももっともだ。裕也くんがもう少し大きくなったら、何かがおかしいと思うかもしれない。「子供だから嘘を吐いてくれたんだって思うよ、きっと。あのとき本当は警察に連れて行かれちゃったんだろうなって考えるさ」

「子供のために吐く嘘って、ずっと大人にならないとわからないものよ。ガキがそんな深読みするわけな

いじゃない。中学生くらいになって武勇伝語り出したらどうするのよ」

実は俺幼稚園のとき誘拐されてさ、しかもそのときの犯人赦してやってんだぜ〜、と生意気な口調で語る中坊を想像して、僕はちょっと腰のあたりがひやっとする。あの気で可愛かった裕也くんが『俺』と言うようになるかもしれないことがショックだ。そんなことない、裕也くんはそんなこと言わない、とぼんやりとうわごとのように呟く僕に心深が、あんた裕也くんの何を知ってるのよ、と少し引き気味で咎める。確かに。

「仕方ないじゃないか。僕だって、泣く子供には弱いんだ。とりあえずああやって治めるしかなかったんだよ。ねえ？ 佐々木さん。……………あれ、ちょっと、なに涙ぐんでるのさ」

佐々木さんはハンチングで顔を隠して涙を啜った。

「見るんじゃねえよ、尚親(なおちか)。…………クソッ、俺もガキのひとりくらいこさえとけばよかったぜ…………」

「ええ…………なに言ってんの…………」

何となく怒気を抜かれた僕たちは、一路、本物のアジトへと向かった。

心深が先にシャワーを浴び、佐々木さんがキッチンで軽い食事を作ってくれている間、僕はダイニングのテーブルで三百万円を三等分した。僕の分の一百万から三十万円を引いて封筒に入れる。それは脇にやり、残りは自分の前に無造作に置いた。あとの二つの束を、右の灰皿の中と左のビールの缶の上に置く。

油の弾けるいい音がしてきた頃、佐々木さんがキッチンから出て来た。ちらりと札束を見遣ったあと、おつかれさん、とクリームソーダをくれた。

「わ」グリーンのメロンソーダの上のアイスにテンションが上がる。「凄い。チョコレートアイスじゃないか」

誰が何と言おうと、たとえアイスの溶けたときの見栄えが悪かろうと、僕はこの組み合わせが好きなのだ。

ロングスプーンで、ソーダと混じってシャーベットみたいになった部分を削って食べていると、まだ髪が濡れたままの心深がやって来た。クロコダイルの革ケースに入れた煙草と重そうなジッポライターをテーブルに放り、灰皿の中を見て唇の端を上げる。

「目標達成？」僕が訊く。

「あと三回、同じギャラの仕事が入ればね」

心深は、お金の束を煙草ケースの下にしまった。

心深はドイツに城を買うつもりでいる。

詳しくは知らないけれど、誘拐の誘拐を始める前彼女はドイツにいて、身体ひとつで結構な金額を稼いでいたらしい。事情があってあちらにはいられなくなったため、日本に帰国したのだと言っていた。三年前のことだ。帰国後佐々木さんと組んで、偽占い師や偽賭博師やとにかくいわゆる裏稼業を展開していたところへ、僕が誘拐話を持ちかけて仲間になった、という経緯だ。

ドイツの件は本当かどうかはわからない。僕も二人に話していないこともあるし、佐々木さんの経歴だって知らないのだから、いちいち詮索はしない。心深が何のためにお金を稼いでいるかなんて、本当はどうでもいい。

でも、山の上の方、深い霧の中にそびえる古城で、塔の小窓の中に心深が立っていたら、凄く綺麗だと思う。

おそらく僕より少し年上の彼女は、いつかどこかで会った女の人たちの誰とも似ていない。敢えて言うなら、外見はヤッターマン二号のアイちゃんに通ずるものがある。……三十路手前（たぶん）なのに。

綺麗だし可愛いし、ちょっとキツそうな感じがまたいい。煙草なんか吸わなければ最高なのに。

「大丈夫なの？ チカくん」

「んな、なにが」

変なことを考えていた真っ最中だったから、僕は慌てる。狭められた眉の間の皺が、心配というより僕の邪な妄想を咎めているように感じて戸惑う。大丈夫とは、何だろう。裕也くんのことだろうか。二度と足を踏み入れない区域だから、大丈夫だとは思う。

何と答えようかと考えあぐねていると、佐々木さんが器用にも三つのプレートを同時に運んで来た。キャベツがたくさん入ったカツサンドだ。佐々木さんは料理が上手で、大抵のものは作れる。秋になると市場から雌の鮭を手に入れてきて、全部自分で捌いて鮭といくらの親子丼を作ってくれたりもする。

「どうしたんだよ、お前ら。変な顔して」

「司令塔が、電波の襲撃を受けたのよ」

と心深が言うので僕はああ、と頷く。そっちね。

「はあ？」佐々木さんが、パグが欠伸をしたあとみたいな口をして、首を傾げた。

僕の中の謎の記憶のことだ。

最初は特に気にしていなかった。前に見た映画のストーリーをなぞっているだけのような気がしていた。だけど、次第に記憶の中の『僕』の顔が僕のものになり始めたのだ。

ストーリーの中の父親の顔は、本当の父親を知らないから比べようはなかった。というより僕以外の登場人物の顔は、当然母親も含めて、ぼんやりとしていて曖昧だった。目や鼻や口はそれぞれに思い出せるけれど、全体となると纏まりのない、特徴のない顔となって浮かんできた。

父親の死が間近だと知り、鼻歌でも奏で出しそうになりながら病院の廊下を早足で歩く僕は、確かに本気で喜んでいて。そのときのことを思い出すと、多少の後ろめたさも感じつつ、それでも、ちょっと指を伸ばした先にある解放を待ち焦がれ過ぎて焦る、微かな皮膚のざわめきまでもが蘇った。まったくあいつは……記憶の中の父親は、非道(ひど)い男だったのだ。

問題は、自分でも知っているし、心深も指摘したように、僕の父親は僕がまだ赤ん坊の頃に他界していること、そして中学を卒業した後、僕は働いてなどおらず、高校まで進学して、きちんと卒業していることだ。それに僕の肋骨は一度も折れたことなどなく綺麗に真っ直ぐがっているし、高校三年生の夏休みに病気で他界した母の額には、傷なんてなかった。

だから、僕が体験したと信じている父親の死に関する情報は、実は僕のものではない。

心深が言っていたけど、頭の中で作り出したことでもないと思う。父親の暴力に悩まされていた『僕』は最初から僕の姿というわけではなかった。何度か思い返すうち、徐々にその姿を変えて行ったのだ。自分の身に現実起こった出来事だと錯覚したいのなら、編集過程を覚えているのはおかしい気がするのだけれど、どうだろう。ただ、元の話自体が、僕の頭の中に突然に発生したのは確かだから、きっとこれは妄想や作りごとなどではなく、僕ではない誰か他の人の経験譚なのだ。

それこそ、過去に見た映画なのかもしれないし、人に聞いた話があまりに強烈だったために、映像化して残ってしまったのかもしれない。

何だかあんまりじっくりこないけど、このくらいの理由しか思い付かない。

ただ、僕が父の死の物語を思い出したのは三ヶ月くらい前のことなのだ。こんな短期間で、見たはずの映画や、誰が体験した話だったのかがわからなくなるなどあるだろうか。暴力的な父親の話が、いくら僕にとって印象的な内容だったとしても、たった三ヶ月で、過去の自分の記憶の上から上書きされてしまうことなど、有り得ない。

いや、上書きなどされていないのだ。記憶は僕の中に入り込み、元々存在していた経験を少しずつ喰い荒して、そこに新たな記録として刻み込もうとしている。しかもそれは成功しつつあるのだ。

非道な父親からの暴力は、身体はまったく覚えていないけれど、心に、感覚に刻まれている。怖かったし厭だったし痛かったし、母はとても可哀想だった。『僕』はいつでも震えていて、『僕』に向かって伸ばされる手のすべてに怯えていて、でも母親がいるから、どうにか耐えていた。母親を助けるために頑張っていた。僕はそういう『僕』を知っている。

でもやっぱり、身体のどこにも痛みが記憶が残っていないから、熱くどろどろとした心中とのギャップに時折呆然としてしまう。結局そこで、事実起こったこととただの激しい感情移入との区別が揺らいで曖昧になる。なのに、しばらく経つとまた、あのときは酷かったな、などと鬱々とする。その繰り返しだ。

こんなもの、僕ではない他人の記憶だ、とはっきり言い切れないのは、僕が人の死にあまり敏感な方ではなく、どちらかという生きてる人を大事にする性格だという理由もある。自分は、人を人とも思わないような態度を取る憎い相手が、とうとう明日死んでしまうことを知って、喜ぶ部分の確かに持っている

からだ。記憶の中の『僕』と僕は、根本的に似ている。だから違和感はあるけど、どうにか受け入れてしまえるのだ。

「疲れてんじゃねえのか」

カツサンドを咀嚼しながら佐々木さんが言う。それはもうあたしが言ったわ、と心深が自分の鼻先を指差した。

「三ヶ月前か……」佐々木さんは天井を見上げた。

「その頃、なにか変わったことはなかったの？」

そう訊きながら心深が立ち上がり、冷蔵庫から緑の瓶のジンジャーエールを取って戻って来た。彼女は蓋も素手で開ける。

僕は考える。

まだ寒い、二月の始め頃だ。ひとつ事件をでっち上げて終わらせたばかりで、珍しくすることもなく、ぼんやりとした日々を過ごしていたあたりか。今日と同じく皆でお金を分けて、佐々木さんの作ってくれた美味しいご飯を食べて、そして――。

「あ」

僕は呆けた声を出した。クリームソーダに差さっていたストローがぐるりと向きを変えた。

「どうした」佐々木さんが顔を近づけてくる。

「変わったこと、あった」

ほんの些細なことではあるけれど、それまでの日常とは少しだけ変化をした部分があった。正確にはちょうど三ヶ月前というわけでもなく、二ヶ半月くらい前だけだ。

この寒い中、と呆れたのだ。

沈んでいくアイスの欠片を見つめながら、僕は答える。

「石持(いしもち)由幸(よしゆき)が、釣りを始めた」

二人の視線が、一斉にお金が入った封筒に注がれた。

食事の後、僕と佐々木さんは順番にシャワーを浴びた。服を着替えてから、テーブルの上の封筒を手に取り、行ってくるけど、とどちらともへなく声をかける。

「あたしも行く」

自室のドアを開けっ放しにしたままで爪の手入れをしていた心深が、指先をひらひらと振った。

「佐々木さんは？」

「皆でぞろぞろ行ってもしょうがねえだろ。俺は片付けやらないと」

その代わりに、とランチパックを渡される。石持兄弟に差し入れのようだ。

車のキーを捜しているとき、心深が電車で行こうと提案してきた。朝早くからのミッションだったから、まだ三時をようやく回ったばかりの時刻で、日暮れまでは間がある。春の花を眺めながらのデートも悪くない。

封筒をポケットにしまい、留守番の佐々木さんに声をかける。

「行ってきます」

「おう」

階段で一階まで降り、歩道を二人で並んで歩く。

日差しはふんわりと温かく、風は少し冷たかった。視界が常に煌めいていて、光の粒子がときどき吹き付ける冷風に翻弄されているようにも見えた。

石持兄弟の兄、石持由幸が川で釣りを始めた話は、心深と佐々木さんに見事なまでに軽くあしらわれた。由幸の垂らす釣り針が誰かの思い出を引っかけて僕の頭に落とされたのか、と笑われた。そんなふうを考えていたわけではなかったけど、なかなか面白い発想だと思った。そう言ったら今度は呆れられた。それこそ夢物語だ。

だけど変化といえばそのくらいしか思い付かない。あのときは、由幸と釣りという関係が僕にはかなり奇妙に映ったのだ。たとえば、河童が川を流されるだとか、猿が木から落下するだとかいった、まさかきみがそんなことになるなんて、みみたいな意外性があったのだ。何かを始めることと失敗例を同列に挙げるのはおかしいけれど、そもそも由幸が自発的に行動するということが自体稀なのだ。だからこれは、彼が川べりで転倒した際落ちていた釣竿を掴み、それがたまたま魚を釣ったというアクシデントがあって、それを僕が偶然目撃しただけかもしれないとも勘繰ったわけだ。

だから僕は我慢しきれず、由幸に訊いたことがある。

どうして川釣りなんか始めたの？ と。

僕はそのとき、たとえば夕飯のおかず、だとか部活をやめたから暇潰しに、といったわかりやすい回答を求めていたのだ。だから彼の返事を聞いたとき、あまりに予想外だったために何のリアクションも取れずに固まってしまった。

人はきっと、どんな場面に於いても頭の中でいくつかの対処法を無意識に考えていて、その想定していた回答へのリアクションとしていちばん近いものを選び抜いて返すのだ。

実際僕はそのとき、へえそれは珍しいね、という感じの答えを用意していた。それが当て嵌まらない場合は、黙るしかない。

「俺にしかできないみたいなんで」

由幸は、玄関に立てかけてある父親の残していった釣竿を眺めて、世の中を斜めに切り裂く冷めた目を眩しそうに細め、そんなふうにはぼそりと呟いたのだった。

同じセリフを口にしながらあるいは心深だったとしたら、あれほどまでに対処に困らなかったはずだ。相手が、無口で真面目で冗談など言いそうにもない、若干十三歳の中学生だったから、戸惑ってしまった。「由幸、そんな冗談言う子だったっけ」

僕が何とか揶揄(からか)い気味にそう返すと、由幸は難問にぶち当たった学者みたいな顔で沈黙した。どう答えていいのかわからなかったようだ。

わからないこと、曖昧な感情には口を閉ざすのが石持由幸なのだ。

以来ずっと、由幸は学校が終わると毎日同じ川で釣りをしている。釣れる釣れないに関わらず、だいたい同じ場所で、空が暗くなるまで糸を垂らしていた。

僕らの住むマンションから石持家までは地下鉄で五駅だ。駅前の銀行で封筒のお金を入金してから、電車に乗った。車内は、平日のせいもあって、空いていて静かだった。電車を降りて地上に出て、そのまま真っ直ぐ道形に歩くと、由幸が釣りをしている川が見えてくる。橋から見える土手のあたりに人影はない。中学校はまだ終わっていない時間だ。

彼は今日もここに来るのだろうか。緩やかに流れる川の流をぼんやりと眺めていると、心深が背中を叩いて僕を呼んだ。

「ここが、由幸が記憶を釣った場所ね」

くすくすと笑いながら、そんなことを言う。僕は口を尖らせて軽く睨み付ける。

「そろそろ、陸(りく)が帰って来る頃だね」

道の向こうを元気よく走って行く小学生の集団を指差して、僕は話題を変えた。

「そうね」

心深が微笑んで答える。もう揶揄(からか)うような笑みをしてはいなかった。

石持陸は由幸の弟だ。小学一年生で、それにしてもまだ幼稚園生のままみたいに小柄で、やたらと元気な子だった。いつも走り回っていて、その落ち着きのない姿からは仔犬か仔狸を連想させる。

兄弟の住むマンションが近付いてくると、その手前の公園から仔狸もとい陸が転がり出てくるのが見えた。どうやら、僕らが来るのが見えたらしい。頭の上で両手を振って、それを原動力として飛び立ちそうな勢いで、跳ねるように駆けて来る。

「尚親！ 心深！」

熱烈な出迎えだった。面白い虫でも見つけたのだろうか。

「危ないよ、陸」

口の横に手を当てて忠告するも陸の短い足は空回って宙を蹴り、つんのめった。咄嗟に僕の爪先が前に出る。脛で倒れ込む陸の胸を掬い上げて、体勢を立て直してやる。「ほい」

「あっぶなー」

前には倒れずに、ふらふらとよろけて尻餅をついた陸の目が、まん丸になった。

「大丈夫？」心深が小首を傾げる。

だいじょうぶだいじょうぶ、と元気に答えて起き上がった陸は、満面の笑みを浮かべながら心深の腰のあたりに抱き付いた。

嬉しさを処理しきれない小さな心が跳ねて跳ねてしょうがないらしく、力いっぱいしがみ付いている。心深のスカートがどンドンずり下がる。

「ちょっと、陸」

「どうしたの。なにかいいことあった？」

僕が訊くと陸はぶあ、と顔を上げ、真っ赤なほっぺを輝かせつつ、言った。

「兄ちゃんが、姉ちゃん釣ってきた！」

嘘お。

誘拐の誘拐は奪還率百パーセントとはいえ、一度もミスがなかったわけではない。子供は百パーセント回収できている。けどそこに至るまでのやり方が拙くて、後味の悪い思いをしたことが、一度だけあった。

僕らは、石持兄弟の母親を見殺しにしたのだ。

一年くらい前、まだ由幸が小学生で陸が幼稚園生だった頃だ。それほど寒くはなかったけど、季節は冬だったと記憶している。僕らの住む街から車で一時間くらい走った埠頭でのミッションだった。佐々木さんはいつも通り犯人役のチンピラの中に紛れ込み、上手いこと子供を連れて逃げた。僕も心深も、抜かりなくやや理不尽ともとれる暴力を振るった。つまりは、いつも通りだった。いつもと違ったのは、犯人役のひとりがやたらとしぶとかったことだ。

僕が車を出して、心深が助手席、佐々木さんは子供を抱えて後ろに乗った。発進させようとアクセルを踏んだとき、先程きっちり伸ばしたはずの男がひとり、目の前に立ちはだかった。

僕の足はもうペダルを踏み込んでいた。今から急ブレーキをかけたとしても止まれるだけの距離がない。どうにもならなくて僕はハンドルを切った。車が凄いい勢いでスピンした。堤防はなく、海との境目に縁石程度のブロックの塊が置いてあるだけだったから、とにかく怖かった。フロントガラスが、夜明け間近だというのに深夜みたいに真っ黒な海を映した。

視界の隅に、何故か縁石の上を女の人が歩いているのが確認できた。どうしてそんなところに、と驚いたがどうにもならない。回転の止まりかけた車の先で、女の人が海へと転落してしまったのが見えた。

その女性が石持兄弟の母親だったのだ。

逃走を邪魔してきた男は乃田(のだ)剛士(つよし)といい、そいつは車のスピードが意外に出ていたことに驚き、避けた拍子に勝手に引っ繰り返って気を失っていた。ついでに佐々木さんと子供も車内で目を回していた。

僕と心深は車を降り、女性が落ちたあたりを見に行った。そのときにはまだ彼女が誰なのか知らなかった。

僕は散々滅茶苦茶やってきたけど、さすがに人を殺したことはなかったから、少々取り乱していた。どうにか女性を助けようとして、海に飛び込むべくジャケットを脱いだ。深く息を吸う僕を心深が止めた。彼女は、どこに落ちていたのか、さっきの女性のものと思しき黒いバッグを持っていた。転落の際に落としたのかと思ったけどそうではなく、縁石に凭せかけるようにして置かれていたらしい。

バッグの下には白い封筒があり、心深はそれをひらひらさせて飛び込まなくても大丈夫かも、と酷く冷静に言った。彼女は人を殺したこともあるんじゃないかな、とこのとき僕はぼんやりと思った。

心深の差し出す封筒を手袋を填めた指でそっと開封して、二人で中を読んだ。何となく予感していた通り、それは遺書だった。夫に先立たれた寂しさと、二人の子供のことが書かれていた。石持由香里(ゆかり)という書名もあり、子供の名前と自宅マンションの場所も記されていた。

彼女は、喪失感に耐え切れず、まだ幼い子供二人を残して夫の後を追うところだったのだ。僕らが、それを少しだけ急かしてしまった。

僕と心深は少しだけその場で立ち尽くした。そのうち心優しき料理人が目を覚ましてきて遺書を覗き、助けるべきだと主張した。心深は、車にはぶつかってはいないはずだから放っておこうと首を振った。

海は静かで、本当に女の人が転落して沈んでいるなんて信じられないほどだった。

放っておこう。で、そこで伸びている乃田を倉庫に戻しに行こう、と心深が強く促した。

そうこうしているうちに車内にひとりで残してきた子供が目を覚まして、心細さの余り泣き出してしまっ

たため、僕も加勢して佐々木さんを宥めて、その場を離れた。もちろん、バッグと遺書は元あった場所に戻しておいた。

あとで知ったことだけれど、石持由香里はコートのポケットなどにたくさん煉瓦を詰め込んでいたらしい。必ず死のうと覚悟をしていたわけだ。

更に、彼女に外傷はなく、僕らの車がぶつかる寸前に身を投げていた。心深の推量は当たっていたのだ。だからといって、僕と佐々木さんの心が晴れることはなかったけれど。

それから数日後、僕は石持家を訪ねた。

これを読んでくださった方、どうか二人の息子をお願い致します、という石持由香里の最期の言葉がずっと気になっていたからだ。

知らなければ済んでいくのに、知ってしまったからには顛末を自分で見届けないと気持ちが悪かった。

かといって、自分自身で兄弟の面倒を見るつもりは更々なかった。ただ、両親を亡くした二人がどのように暮らしているのかが気になった。心配とは多少異なる。結末を確認したいだけの単なる興味とは、似ているけれどまたちょっと違う。だったら何だ、と言われると困ってしまう。

たとえばお腹が一杯な僕がお握りを持っていて、誰かにお腹が空いたのですがお金がないのです。それを頂けませんか、とお願いされたとする。僕はお握りをあげる。だけどその場を立ち去らない。果たして、それがちゃんとその人物に食べられるのか、可愛い愛犬にでもあげるのか、それとももっと違った使い方をされるのかを知りたくなる。どのような形であろうと、きちんとどこかに納まるのを見届けたいのだ。見届けた後へえ、と思いたい。意外性などはそこまで求めてはいない。お握りが神輿に乗せられ屈強な男たちに担ぎ上げられるところを確認しようものなら、まあ、面白いけど、だいたい誰かに食べられるはずだ。わかりきった結末がそこにはあるはずなのだ。

わかっていても知りたい。物事の行く先を見て、ああそうなのかと納得したい。僕にはそういう、やや不謹慎な好奇心がある。

兄弟は親戚にでも引き取られていくのだろう、と思い、それなら遺書に誰でもいいから助けてあげて欲しいような書き方はしないだろうな、とすぐに考え直した。自然に僕の足は早まった。心配、したのかもしれない。

石持家は、夫が事故死する前にマンションを購入していた。まさかこんなことになるとは微塵も予想していなかったのだろう。外から見上げたバルコニーにはたくさんの花が植えられ、四人掛けのテーブルセットも置かれていた。幸せな家族が暮らしているのだろうと想像させられる、温かな色に満ちた庭だった。

だけど、天気の良い土曜日の昼間だというのに洗濯物は干されておらず、カーテンも閉ざされ、人の気配がまるで窺えなかった。開園前の遊園地みたく、色はたくさんあるのにすべてがどこことなく褪せて見えて、物寂し気で、ひんやりとしていた。

エレベーターで六階まで上がり右手の通路を行くと、突当たりのドアのところに男の子が二人しゃがんでいるのが見えた。石持兄弟だった。

弟の方は今と同じであっちこっちころころと転がって、小動物のようだった。

一方兄は、彼もある意味今と印象はかわらない。無口で無愛想で、口の中に苦い飴玉でも含んでいるようだった。

あの頃由幸は今よりもずっと警戒心の強い目をしていた。わけもわからず母親が死んで、見知らぬ大人たちがどっと押し寄せたあとだったのだ。理不尽で自分の力ではどうすることもできない目にたくさん遭って、傷付いていた。僕を見上げる眼差しにはっきりと、お前は何を奪って行くんだ、という反抗と諦観が混じり合った色が籠っていた。

「ここは、石持由香里さんの家だね？」

僕は石持由香里の友人、仕事仲間、警察とどのようにも取れる口調で訊いた。虫を追いかけていた弟が顔を上げ、好奇心と疎ましさの混じった目で僕を眺めた。彼も、色々なことにうんざりしていたはずだ。

「今日までは」

兄が、すべてを諦めた人の声を出した。鋭い視線は僕にずっと注がれている。左手がそっと弟を引き寄せた。何もかもを取られても弟だけは連れて行かせないぞ、といった強さが窺えて、僕は、不本意にも手負いの狼みたいになってしまった彼に、ふと好感を覚えた。

「今日まで？」僕は訊く。

「明日になったら、売りに出されるんです」

「え」僕は仰け反る。「じゃあ、きみたちはどうするの」

石持兄の目尻が、ほんの僅かに和らいだ。僕がこれまでに来た、ただ奪うだけの人間とは違うらしいことに気付いたのだ。

「ミンナノヘヤに行くんだよ」弟の手のひらには団子虫が何匹か転がっていた。

僕が反応できずにいると、兄から補足があった。「施設です」

「ああ、施設か」

「行きたくないよー」弟が団子虫を放り投げて兄にしがみ付いた。「シセツ、やだー」

「いつ行くの」

「午後。迎えに来るんで」

「家の中で待てばいいのに」

正確な時間はわからないが、正午までまだ二時間以上もあった。

石持由幸は唇を固く結んで一層きつく眉根を寄せた。泣くのかな、と思ったけどどうにか堪えて、感情を飲み下すみたいにぐっと顎を引いた。

「部屋のもの、もう触るなって。全部売るから」低く、早口でそう答えた。

胸のあたりが真っ白に凍り付いた。それは徐々にお腹の方へと下がって行き、足元まで到達して僕を動けなくした。頭だけが熱くなった。温度差はちっとも埋まらず、首から上だけが焦げてしまいそうだと思った。

世界は冷たい。僕の下半身は凍りそうだ。仕方のないことなのかもしれないけれど。

「不動産屋、どこ」気付くと僕はそう訊いていた。

「通りに出て、右の角……たぶん」弟の肩越しに兄が答えた。

僕は腕時計を見る。迎えとやらが来るまでにまだ時間はある。「待ってて」

言われなくても、という冷めた兄の声が、背中に触れた。

僕は先に銀行へ行き、すべての一万円札を預金から引き出した。個室に案内されて支店長まで出て来たけれど、椅子にも座らなかつたしお茶も飲まなかつた。ひたすら急ぐんです、と繰り返した。ああ、子供を誘拐された親はこんな気持ちに近いものを抱えているのかな、と一瞬思った。とにかく一刻も早くお金が欲しいのだ。

大丈夫ですか？ と支店長に何度も訊かれた。身代金だとでも勘繰ったのだろうか。僕がマンションを買うんです、と答えるときよとんとしてそれはそれは、と呟いた。

お金を下ろすと石持兄に聞いた不動産屋へ飛び込み、眼鏡が冗談みたいに大きなご主人に石持家の住所を告げた。

「六〇八号室、明日出すんでしょ。いくらで売るつもり」

ご主人は眼鏡の奥の円らな瞳をぱちくりさせ、台帳を捲り始めた。気迫に上手いこと流されてくれて助かった。一応ジャケットは着ていたけれど、僕にはおよそ貴禄というものが欠けている。やがて店主は掠

れた声で言った。

「千九百万円、ですねえ」

僕は、札束をどうにか封筒に詰め込もうと画策する姿を見兼ねて銀行の支店長がくれた簡易バッグを、机の上にでん、と置いた。

「買うよ。数えて」

「え……でも……」

「二千万ある。全部あげるから、売ってくれ」

店の奥から何事かと奥さんが出て来た。バッグを覗いて二人でごくりと喉を鳴らすと、無言で札束を数え出した。

暇を持て余した僕は、何気なく広げっぱなしの台帳に目をやった。石持家のマンションの売り主のところに『(社) ミンナノヘヤ 大溝 (おおみぞ) 昭 (あきら)』とあった。こんちくしょう。いったいどんな手を使って石持家を奪ったというんだ。僕は人差し指を怒らせて大溝の名前を叩く。

「百万はあんたたちにあげる。我儘代だよ。こいつには絶対渡さないでくれ」

「え……なんですって？」

「うまいことやってよ」

「はあ……」

冗談みたいな眼鏡が、ずり落ちそうになっていた。

こうして僕は、成り行きで石持兄弟にお家をプレゼントした。

※

マンションを購入してから、僕はまだ兄弟のところへは戻らずにタクシーに乗った。運転手に行き先を告げ、すぐに携帯で佐々木さんの番号にかける。

『夕飯、ロールキャベツにするけど、食うよな？』

開口一番、そんなことを言われた。

佐々木さんのロールキャベツはコンソメとホワイトソースで煮込んであって、凄く美味しい。もちろん食べる、と僕は答える。

「多めに作っといてくれるかな」

『あ？ 誰か来るのか』

「持ってくところができたんだ。あ、あとね、お金貸して」

佐々木さんも心深も、僕がいつか名古屋の中心街のマンションのペントハウスを購入するために貯金をしているのを知っている。収入は山分けだから三人とも同じで、そこから毎月の食費と雑費を同じだけ引いているから、お金の動きはわかりやすくなっている。つまり、僕がお金を貸して欲しいというのは一大事なのだ。

『いくらだ』

さすが年長者だ。話が早い。

「二百……やっぱ三百。用意して、緑区のミンナノヘヤっていう施設まで持ってきてくれないかな」

『わかった』

「あ、心深には内緒だよ」

頭の柔らかいおじさんのことだ。たぶんそのひと言で僕が何をしようとしているのかを理解したはず

だった。もちろん、心深に告げ口するような真似もしないだろう。

だが――。

僕の考えは甘かった。佐々木さんの口の堅さは信用していたし、お金のことも問題なかった。けれど、心深の勘の鋭さを嘗めていた。

佐々木さんがおかしい行動をするはずはない。おじさんの演技力は折り紙付きだ。この場合、心深の観察眼が異常に発達していたのだろう。要するに、バレた。

先にミンナノヘヤの駐車場に辿り着いて佐々木さんの到着を待っていた僕の前に、タクシーではなくて、僕と心深が共同で使っている黒のマジェスタが停車した。嫌な予感がした。おじさんは運転ができないのだ。

車から、まず、花壇を荒らしているところを捕まった犬のような顔をした佐々木さんが降りてきて、両手を合わせて頭を下げた。次に運転席のドアが開いて、黒いレギンスに包まれた長い脚が出てきた。僕は溜め息を吐いた。

心深は僕を睨んで、「なにやってんのよ、あんたは」と言った。

「佐々木さん、ありがとう」

僕は心深を無視して、佐々木さんから三百万円の入った封筒を受け取る。「次の仕事で返すから」

「ガキなんかほっときなさいって」心深が一層眦をつり上げた。

「もう遅いよ」僕が言う。

「遅くないわ。帰ろう」

「遅い。マンション買い戻した」

「はあ？」

心深の目と口が、限りなく円に近い形になる。正門に向かって歩きながら、首だけ振り返ってもう一度言う。

「石持兄弟に、マンション、買ったの」

呆れたのか怒ったのか、何も言わなくなった心深とここへ来て以来ひと言も口を利いていない佐々木さんを残し、僕は走った。後ろから、「なんでそこまでするのよ！」という心深の悲鳴が聞こえた。

「知っちゃったから、しょうがないんだ」僕は叫ぶ。

行く末を見届げるだけのつもりが、いつのまにか僕自身が道を作ることに努めていた。

石持兄弟の最終を僕はまだ見ていない。僕の力でどうにかできるところまで、つまりはあの二人の最終地点まで付き合いたかった。お握りよりもお握りを渡した人に興味移ったのだ。

受付窓口で園長の大溝昭に面会をお願いした。窓口の背後には仕切りもなくそのままオフィスになっていて、受付の女の子がちょっと困ってそちらの方をきょろきょろ眺め出した。何人かいるスタッフは、皆忙しそうに書類に向かって手を動かしている。やがて奥のデスクに座っていた、痩せていて背の低い、人相のよろしくない男が僕に気付いた。

「どうした」

あれが大溝だろうと見当を付け、僕は大声を出す。「石持兄弟のことで」

男の顔付きが怪訝になりかけて、すぐに気を取り直したように薄い笑みを貼り付けて納まった。しかし戸惑いは隠せないようで、すでに綺麗に揃った書類の角を机の上で何度も揃え直し、石持家のデータを頭の中で検索している雰囲気伝わってきた。

かなりの間があって、無理な姿勢で背後を見ていた受付の女の子の首がいい加減限界に近付いてきた頃、男はようやく立ち上がった。そちらのドアからどうぞ、と示された手の先を見ると、受付の隣に事務局と書かれたプレートが貼り付いたドアがあった。受付の女の子が、慌ただしく鍵を開けてくれた。

僕は大溝を、子供の気持より会社の利益、会社の利益より自らの懐の膨らみが重要な人物だろうと一方的に断定していた。石持兄弟を施設に入れたいためには、お金しかない。

事務所の隅に設けられた、パーテーションで区切られた応接セットの、やたらとお尻が沈むソファに腰を下ろすなり僕は先手を打つ。

「マンション売れましたよ、大溝さん」

男は大溝と呼ばれることを否定しなかった。

大溝は、座ろうとして屈んだままテーブルの一点に視線を落として、動きを止めた。一拍ののちそうですか、と低く答えて、スーツの襟を正して着席した。

「売りに出すのは、明日のはずだが」

下から睨み上げてくる尖った視線を真っ向から受け止める。こっちは若さに助けを借りてできるだけ無邪気に微笑んで、肩を竦めた。「買っちゃいました」

「石持家とは、どんな関係だい」

大溝は冷静さを保ちつつも、内心僕の得体の知れなさに戸惑っている。語尾が定まっていない。

「親戚の親戚の親戚です」

馬鹿にされたことに気付いたのか、大溝は口を歪めた。

「用件はなんだ」

「石持兄弟を引き取ります」

僕はすぐに言った。言ったあとで冷や汗がどっと出た。僕自身も予想外のセリフだったらしい。引き取るの？ と頭の中から驚きの声が聞こえた。

考えてみたら、そうするしかないのだ。僕が引き取らずに施設にも入らないのなら、あの子たちは生きていけない。

僕は、石持由幸と陸を引き取るつもりなんだ、ということにそこで初めて思い至った。

大溝が背凭れに背中を付けて、大きく息を吐いた。鼻から下が完全に弛緩していて、さてこの馬鹿をどうしよう、とでも考えているのが窺えた。僕は必要以上ににこにこしてみせた。そういえば、お茶も出てこない。

「もちろん、タダじゃないですよ」

佐々木さんから借りた三百万のうち、二百万だけをテーブルに置いた。もちろんこれで方が付くとは思っていない。渋ったらもう百万円を出そうと考えていた。最初から三百万円を出すより、あとから百万円を追加された方が、人は得をした気分になる。

案の定大溝は、ティッシュペーパーでも差し出されたみたいにつまらない顔をして、懐をごそごとと探り出した。煙草に火を点けてテーブルの下から灰皿を引っ張り出した。

これは、佐々木さんにあと二三百万くらい用意してもらわないといけないかな、と僕は心の中で溜め息を吐いた。取り敢えず残りのお金を積み上げようと手を動かしかけたとき、大溝が口を開いた。

「どうしてそこまでする？」

僕は咄嗟に返事ができずに、ただ彼の口から吐き出される煙の行方を見ていた。天井に排気口がある。煙はそこから外に追い出されていく。

どうしてここまでしたのかなんて、わからない。

別に、石持由香里の死にももの凄く責任を感じていたわけでもない。確かにちょっと飛び込むのを急かしはしたし、兄弟が状況を知れば僕たちを恨むのだろうけど、彼女は覚悟をしてあそこにいた。僕らが居合わせなかったとしても、間違いなく身を投げていた。責任があるとすれば、警察に連絡をしなかったところだ。

僕の中で石持由香里の自殺は、それ一個の物語としてとうに完結している。死にたい人が死んで何が悪

い、というのは暴言だけど、死によってでしか救われないのだと思い込んでいる人にとってはたぶん、それ以外の解決なんてそう易々とは訪れない。死は重いけど、だからこそ思考が死に至るまでの道程も十分に重かったのだ。きっかけや状況を僕は知らないし、知っていたからといってそれをどのように受け止めるのかは自殺をしたい当人次第で、僕がとやかくいうことでもない。

記憶の中で、母があんなにも生きていて欲しいと願っていた父の死を喜んだ僕のように、あるひとつの重大な想いに対する蹴りの付け方は千差万別なのだ。

彼女は死を選んだ。それだけだ。そして僕は、死を前にした石持由香里に同情できたとしても、おそらく同調まではできなかつたはずだ。何でもいいから生きろなどというのは、あなたの悩みはそれほどたいしたことではないですよ、と言うようなもののような気もしてしまう。こういう思考の持ち主である僕のような人間には、命を救うどころか、彼女の寂しさを埋めてやることすらできなかつただろう。

それならば何故、僕は石持兄弟に関わろうとしたのだろう。責任じゃないとすれば、何故だ。

「だって、親戚の親戚だし」

応接室のソファの上で僕はそう答えている。大溝が噴き出す。

「『親戚』がひとつ足りない」

「え、そうでした？」

「これでいい」

骨張った手が札束の両側を掴んだ。クレーンゲームの要領で、二百万円が大溝の前に落ちる。

「いいんですか」

「いい。マンションも、売れたんだろう？」

大溝が、片頬を引き上げた。一層凶悪な表情になったけど、笑ったのだ。子育てには金がかかるんだ、と漏らした。

なんとなく肩透かしをくらった気分で、僕は石持兄弟の入園届けが破棄されるのを眺めた。

応接室を出る寸前、大溝が僕を呼び止めた。

「お前みたいな奴が、もうだめだってときに、神様に守ってもらえるんだろうな」

ふと見上げると、神棚の上にゴージャスな熊手が飾られてあった。年明けに神社で三万円もするやつが売られていることは知っていたが、実物は初めて見た。

大溝の、下から見上げる視線は何の感慨もなく平坦なままだった。だが、元々彫りの深い顔立ちということもあってか、濃い眉の下に影が落ちて、酷くやつれて見えた。言葉にも、もう死んでしまった人が生者を羨むものと似た絶望的な響きがあった。

ちょっと考えて、僕は言った。

「神様なんて、いないでしょ」

大溝は、どういうわけか悲しそうに目を閉じて息を吐いて、肩を丸めた。

ミンナノヘヤの駐車場には、佐々木さんも心深もいなかった。歩くのは面倒だった。仕方がないからタクシーを呼んで、石持兄弟の待つマンションへと戻った。

部屋の鍵を開けてやりながら兄弟に簡単な事情を話すと、陸は大喜びして、由幸は益々表情を強張らせた。廊下を転びながら走って行く陸を見つめどうして、と呟いた。

「俺たちにこんなことをしても、お兄さんの利益にならないじゃないですか」

僕は横目で由幸を見下ろした。彼は目を合わそうとはしない。じっと僕の首や口元に視線を彷徨わせ、つり上がった目尻を震わせていた。

由幸は、大人は利益のみによって動く生き物だと心に刻んでしまっていた。

人によっては利益ばかりを追求する人もいるし、そうでないつもりでも、ときとして打算が働く場面もある

る。常に自分の安全を頭の片隅で確保しつつ世を渡るのが大人というものかもしれない。間違っていない。けど、そんなカラクリは徐々に知ればいいことで、子供がたった数日のうちに悟ってしまうことではない。

由幸はあまりに深い傷を負ってしまった。そして陸も、少なからず哀しい思いをしたことだろう。

こんなのは、駄目だ。

僕は思わず由幸の肩を抱いた。誰も信用しない人になっては駄目だ。そんな生き方は疲れるし絶望しか生まない。由幸は永遠に傷付け続けられてしまう。自分から傷付きに行ってしまう。

「僕は、そういう人なんだ」

由幸の怪訝な表情はちっとも和らがない。僕は更に続ける。

「きみたちにとって、僕はそういう人。生活費の心配はしなくていいし、学校も好きなだけ進学すればいい。きみが社会人になるまで、頼っていいよ」

黙って僕を見上げていた由幸は、細い目を瞬かせて、言った。

「……お兄さん、区役所の人？」

「まあね」

僕は笑顔で、大人の必殺技である『お茶を濁す』を発動した。由幸はふん、と鼻を鳴らして、それ以上は何も聞いてはこなかった。

僕がミンナノヘヤを訪ねてから三日後、大溝が逮捕されて施設が家宅捜索を受けたというニュースを見た。すわ脱税か、と思ったけどそうではなく、どうやら職員による子供への虐待のようだった。大溝は直接関与はしていないらしかった。でも、見ない振りをしていた。はっきり咎めることもできず、ずるずると放置してきたのだ。

大溝は穢い手で幼い兄弟の家を奪ったけど、考えていたよりかは悪い人物ではなかった。大きな犯罪を企てることなどできない、気の弱い男だったのだ。部下の犯罪に心を痛めつつも、結局目を瞑っていたことも含めて。

神頼みなんかしてる場合かっての、と僕はテレビの中のパトカーの後部座席に乗った大溝を見ながら毒づいた。

神様はいない。だから取り敢えず、動かなきゃ。

ちなみに心深は、施設の駐車場で会って以来ずっと僕を無視していたのだけれど、このニュースを知ってからやっとまともに口を利いてくれるようになった。

以前、由幸に訊いてみたことがある。

お母さんは、どうして亡くなったの？ と。

マンションが兄弟の元に戻ってからしばらく経ったある夜、佐々木さんの作ったミネストローネを僕がキッチンを借りて温めていたときだ。

陸はリビングダイニングでテレビを見ていた。由幸は、お皿を出しながらちらりと鍋の中身を覗き込んで、ぽつりと答えた。

「事故らしいです。よく知らないけど」

彼らには、母親が自殺を企てていたことを伝えられてはいないようだった。ふうん、と僕は言った。知っていても知らなくてもよかった。でも、遺書は読んでいないといいな、とは思っていた。だから探りを入れたのだ。

心深は気付いてなかったみたいだけど、あの遺書の裏の下の方には、ひと言だけ短い言葉があった。

誰にも読まれることを望んでいないのかと思うほど雑な字で、でもどうしても文字として残さなければならぬ気持ちの塊を、やっとの思いで刻み付けたみたいに小さく。夫と子供への想いとは別の、おそらく彼女の本音だ。

『みんな死ねばいいのに』

この世のすべてに絶望した恨み、大切な人を奪った世界から一足先に去る者の精一杯の叫びだ。僕はこれを兄弟の目に触れさせたくなかった。母親が心の根底で何を思って命を落としたかなんて、永遠に知らなくていい。彼らは捨てられたのではなく、母親は最期まで自分たちの心配をしながら死んでいったのだと信じていればいい。

僕はそのときふと、大溝に尋ねられたことを思い出したのだ。

——どうしてそこまでする？

僕は、石持由香里の想いが叶わないようにしたかったのだろうか。

兄弟が道連れにされないように奔走したのかもしれない。

僕は石持由香里の誰へともなく宛てた手紙が、どこかの暇な神様に届いてしまう前に兄弟を連れ去ったのだ。この二人には僕がついているから大丈夫ですよ、と。神様なんか、信じていないくせに。

だってこういった類の願いは叶えられてはいけないはずで、そのためにはならば信じてもない神様の存在も肯定するのだ。頼むから現れてくれるなよ、と一瞬だけ。

※

僕と心深に両手をがれて、ときどきぶら下がったりしながら歩く（というより運ばれる）陸は、たどたどしい説明を始める。

「ユキちゃん、ユキ兄ちゃん、学校休んで今日、朝から川、行ってたんだ」

陸は弾むのも喋るのも一生懸命同時にやろうとしていたけど、結局どっちも上手くできてはいなかった。落ち着きなよ、と言いたいのを僕は我慢する。根気よく陸の話しに耳を傾ける。

最近気付いたけど、陸は由幸のことをたまに「ユキちゃん」とか「ユキ兄ちゃん」と呼ぶ。二人きりの兄弟なのだから、これは少し僕という『兄』の存在を意識しているのか、と僅かばかり心をときめかせるけれど、真相は不明だ。僕は一度も、石持兄弟どちらからも「チカ兄」などとは呼ばれたことがないからだ。

「んで、学校、来て……ユキ兄が僕を迎えに来て、一緒に家帰ったらー、姉ちゃんが、いたんだー」

えへー、と陸は嬉しそうに笑う。心深が僕を見た。その目がその子は由幸のガールフレンドなんじゃないの、と訊いている。

学校をさぼって朝っぱらからガールフレンドと会っている由幸の姿が浮かばなくて、僕は首を捻る。陸をわざわざ迎えに行ったことも解せない。弟に彼女を紹介したかったとも思えない。結婚でもするというのか。

「ねえ、なんで陸、由幸が姉ちゃん釣ってきたって思ったの？ その子、由幸の友だちじゃないの？」

陸は僕の質問がお気に召さなかったようで、ほっぺを丸く膨らませた。「ちがうー」

「なんで」

僕は佐々木さんや心深に対するのと同じトーンで陸に尋ねる。他のところの子は別にして、石持兄弟にだけは僕はできるだけ対等に接することにしている。二人は大事な友だちであって家族だし、もう大人の穢さを嫌というほど知っていて、子供騙しのご機嫌取りは通用しないからだ。

隠し事はたくさんしている。たとえば、僕らがお金を得る手段とか。こういったことはこれからも打ち明けるつもりはない。言えないこと以外で、正面から向き合っていこうとしているのだ。

「ユキ兄、普通の人間とは違うって言ってた。魚じゃないなら、宇宙人もって。それに、おうち帰らないって、言ってた」

「普通と違うって、見たらわかるの？」と心深が訊く。

「わかるよー」

「どういうふうに違うの」

「見たらわかるよー」

陸はまたえへー、と笑う。こいつめ、知ってはいるけど教えない、という顔だ。

陸は案外口が堅い。こうなるともう、絶対教えてはくれないだろう。

「帰らないって、どうして？」

僕は質問を変えてみた。知らないお嬢さんが男の子二人暮らしの家に住み付くのは、たとえ宇宙人だとしてもちょっと問題ではないのかと思った。

魚だったら……まあ、いいか。

陸は黙る。考え事に夢中になって歩くのも忘れ、僕と心深に引き摺られながら、難しい顔を地面に向けている。こうしていると由幸と似ているな、と感じた。普段は表情も行動も正反対だけど、黙った顔は結構似ている。

そのうちアスファルトを蹴る音が聞こえてきて、陸はようやく沈黙世界から生還した。

「えっとね、やること、あるんだって。で、ユキちゃんの釣り針が近くに来るの、ずっと待ってたって言ってた」

僕は、由幸が釣りを始めたばかりの頃、彼が自分でもよくわかっていない使命感に燃えていたことを思い出す。

由幸は宇宙人か魚の化身の女の子のために、毎日土手から釣り糸を垂らしていたというのか。

自分の釣り上げたものが女の子だと知ったとき、由幸はどう感じただろう。驚いただろうか。表現力に乏しい瞳を見開き、声のひとつも上げたのだろうか。それとも、いつも通りに愛想のない顔付きで、たとえどれほど非常識な出来事であっても起こってしまったのだから仕方がない、と泣きそうで泣かない、無言で少し顎を引くあの仕草をして淡々と受け止めたのだろうか。

その場面を見たかったな、と悔しくなる。由幸の気持ちの変化を、僕は知りたい。

マンションのエントランスを潜ると、陸は手を振り解いて駆け出して、エレベーターのボタンを力強く

押した。はやく一、と両手を振る。

「やだ、陸、靴ボロボロ」

心深が陸の足下を指差す。いつでも走り回っている彼の青いスニーカーは相当草臥れていて、靴紐の先も毛羽立っていた。

「新しいの、買いに行こうよ」

心深が言うと陸はやだ一、と口を尖らせ、しゃがんで小さな手で靴を隠した。「これがいい」

「でも、もうすぐ穴空くよきっと」

「やーだ」

陸は譲らない。この子にはそういうところがある。

兄がこちらの与える物をたとえ仕方なしにでも受け取るのに対して、弟は自分が気に入った物しか貰わないし、一旦懐に入れるとなかなか手放そうとしない。靴も服も文具も、どれだけ汚れてしまっても多少壊れても大切に使い続けた。物持ちがいいというより、彼の場合もっと必死な想いによってそれらは所有されていた。大袈裟に言えば、一度手に入った物が別の新しい物に取り替えられることを恐れている。陸は、喪失感がどういうものなのかを知っている。

「じゃあ……じゃあ、穴があいたら、壊れたら、おんなじの買うよ」

まったく同じデザインのサイズ違いの靴をいくつか買っておかないとな、と僕は頭の片隅で考える。そして、石持家を買戻してよかったな、と改めて思う。陸はきっともう、新しい部屋で眠ることができない。ペンキと繊維とビニールのおいのする部屋では、落ち着いて生活することは難しい。もし陸が住処を無くして新しい場所に身を置いていたとしたら、自分や由幸のにおいがベッドやカーテンや壁紙に染み込むまでの長い間、あちこちの汚れの少ないものたちの様子を窺いながら、飼われたばかりの子犬みたいにそわそわびくびくと不安定に過ごしただろう。そうならなくてよかった。

マンションを買戻したとき、家具類も一緒に売却を免れていた。不動産屋さんのご主人がうまいこと手回しをしてくれたのだ。僕はそのことを随分あとになってから知った。

珍しく裏道ではなく大通りを歩いて石持家に向かっていたときだった。信号待ちをしているところを呼び止められたのだ。ご主人は僕のことを石持くんのお兄ちゃん、と呼びながら横断歩道を向こうから小走りに渡って来た。一瞬、巨大な眼鏡が道路を横切って突進して来るのだと錯覚して身構えた。当たり前だけど、ご主人は眼鏡の重さで勢い付いて止まらずにぶつかって来ることもなく、僕との間にほどほどの距離を残して立ち止まった。

「元気そうだねえ」ご主人はにこにこしながら僕を見上げた。

「あのときは、強引にやっちゃって、すみませんでした」

僕は少し引き気味に頭を下げた。どうも眼鏡との距離感が掴めない。

聞くところによると、ご主人も大溝が半ば強引に石持家を手に入れたことは、知らなかったらしかった。区役所が間に入って穏便に纏めたのだと思っていたが、親の自決で身寄りをなくした兄弟のことを偶然知った大溝が、区役所に話をもちかけたのだそうだ。二人の面倒を見る代わりに一切の財産を譲り受けたい、とも言ったのだろうか。どうにも胡散臭い話だけど、区も兄弟を施設に預けるつもりだったから、それほど綿密な打ち合わせもなく、上手い具合に大溝の企み通りに納まりつつあったのだ。

「そこに、あんたが現れたんだ」ご主人は紙芝居を読む人の口調で、快活にそう言った。

「あんた、いいことしなさったなあ」

ご主人はテレビでミンナノヘヤが家宅捜索の末解体されたことを知ったらしい。虐待をするようなところに子供たちを入れなくてよかった、とひとりでしきりに頷いていた。

「あんたのことは、神様がきっと見てるよ」

また神様だ。僕は信じていないってのに。

「もし、神様がいたとして——」僕は言う。「見ていられたら、困るんですけどね」

冗談みたいな眼鏡は僕の冗談にきょとんとしていやあ、と唸った。どう解釈をしたのか、「あんた、えらいねえ」と感心をした。

このときには既に、僕は神様から逃げているのだということを明確に感じていた。とにかく動いて、どうやったら神様から兄弟を守れるのかを常に念頭に置いていた。

僕が唯一信じた神は、石持由香里の遺書の裏に書かれたあのお願いの行き先と一緒に一緒だ。

僕や心深や佐々木さんのしていること、思想、奪ったものと奪え切れなかったもの、そして石持兄弟や彼らの母親のこと、僕を取り巻くあらゆる環境が、万能の神に見つかっては困るのだ。

陸が開けてくれた玄関先で僕らを迎えた由幸の唇は、今日もむっつりと閉じていた。ただいつもと違ったのは、表情の乏しい彼にしては珍しく、頬や瞳に微かな困惑が見え隠れしているところだった。遅いじゃないか、とやんちゃな弟を咎める声にもいつもほどの余裕が窺えない。

「尚親たちと会ったよ」

得意気に陸が胸を張ると、由幸は、中一にして既に刻み慣れた感のある眉間の皺を一層深めた。

「呼びに行ったんだろ」

「えー？」

陸はぼかんと口を開けて背中を仰け反らせて頭を逆さまにして、僕たちを振り返った。そうだった一、と気な声を出し、気道が潰れて苦しかったようで咳をひとつした。

好奇心が髪の毛の先まで行き渡り、動くものになら何だって興味を覚える子供だ。特に春真っ盛りの今は、陸の好きな昆虫もたくさん蠢いている。兄に僕らを迎えに行くように頼まれて、マンションを出て五歩で、鼻先を掠めて飛んで行く蝶々に心奪われても仕方がない。僕らが石持家を訪ねることにしたからよかったけど、あのまま放っておいたら陸は、日が暮れるまで穴を掘り、蟻の行列の邪魔をして、花や木の葉の裏側を捲り続けたことだろう。

「忘れてたんだな」由幸の目が光る。

「でも、思い出したよ」

陸が鼻の下の部分だけに空気を含ませ、どこことなくアザラシに似た顔を作ってむくれた。僕たちの姿を見てから当初の目的を思い出したのだ。まあ、結果オーライだ。

「話は聞いたよ」僕が言う。「お姉ちゃん、釣ってきたんだって？」

「あ、妹です。たぶん」

「お姉ちゃんだよー」

このやりとりで、僕と心深には少女の大体の年齢の想像がつく。

「上がっていい？」

「はい、どうぞ」

由幸が身体を斜めにして通してくれた。陸が靴を放り脱いで走って行った。

リビングダイニングを開けると、お味噌汁のいいにおいがした。佐々木さんから託されたカツサンドの存在を思い出す。

「由幸、これ」

「あ、ありがとうございます。いただきます」

礼儀正しい由幸越しに、由香里のお気に入りだったというベンチシートのダイニングテーブルに座る少女を発見した。手にはお茶碗が握られている。赤い箸が食卓の皿に伸び、白菜の漬物を摘まんで、長く艶やかな黒髪で隠れた口の中へと運ばれていく。規則正しい咀嚼の音が、心地よく響いた。

「シロちゃん」

陸が、シロちゃんと呼ぶ少女の横に勢いよく座った。

「普通の人間じゃないの」心深が呟く。

「この子？」

僕が訊くと、由幸が無言で頷く。

聞き慣れない声に、シロちゃんの動きが止まった。

ゆっくりと、声を頼りに姿を見つけるみたいに、白い顔がこちらを向いた。

「あ」

僕と心深が同時にちょっとだけ仰け反った。

なるほど『魚じゃないなら宇宙人かも』しれない。僕はつい無遠慮に見つめてしまう。

年頃はやはり由幸より少し幼く、陸よりも多少お姉さんっぽく見える。純白のワンピースと透き通る肌が可憐さを漂わせていて、ぱっと見凄く育ちのいいお嬢様にも思える。だけど――。

「宇宙人でなけりゃ、カワアカメかしらね」

心深が少し放心したふうに呟いた。僕はもっと放心していたから、彼女の冗談にまったく突っ込めなかった。とにかく、二人して見惚れた。

少女の瞳は、綺麗なルビー色をしていたのだ。

「あんた、この子を釣りに毎日川に行ってたわけ？」

心深の質問に、由幸は沈黙で答えた。僅かに首を傾けているから、わからないのだろう。

「ねえ、きみ、目赤くない？」

僕は強引に陸の隣に腰かけた。シロちゃんの正面の椅子には洗濯物だの玩具だのが混在していて、退かすのが面倒だったのだ。

「あかいよー」陸が楽し気に答えた。

「ちょっと、お茶碗差し出してるわよ。由幸、お代わりじゃないの？」

「あ、はい」由幸がお茶碗を受け取る。

「僕の気のせいじゃないよね。目赤いよね」

「赤いってばー」

「あ、お茶。ねえ、お茶もないみたいよ」

「はい」

「ねえ、どうして目赤いの？」

「知らないってばー」

「もう、陸に訊いてるんじゃないって」

「がーん」

僕の顔の横をお茶碗が通り過ぎた。少女の、やけに白い手が受け取り、お味噌汁と玉子焼きで食事が再開された。

お茶を取りにキッチンへ行った由幸以外全員で、その光景を息を潜めて見守っていた。

祭壇に捧げられた供物を神様が降りてきて食べているのを想像させる、一種の神聖さがあった。瞬きが二度され、玉子焼きをむ小さな前歯が、僕に雪兎を連想させた。

あまり見つめられてはさすがに食べ難いのか、居住まいを正すように微かに肩が上下した。その拍子に箸の先から玉子焼きが滑り落ちた。

「……あ」

「わ、喋った」

「ああ～、ユキちゃんのタマゴ……」

六つの黒い目と二つの赤い目が見守る中、玉子焼はシロちゃんの膝でバウンドして床に落下した。

「……………由幸一、雑巾」

心深が言うが早いか、既に入口のところに急須と雑巾を持った由幸が立っていた。

「はい」

由幸は、急須と雑巾を同時に前に突き出した。

まったく、よくできた中学一年生だ。

※

食事が終わるのを待って皆でソファに移動をした。少女と陸が並んで座り、僕ら三人はテーブルを挟んで床に腰を下ろしている。僕の前に、ほんのりと桜色をした膝が丁寧に並べられていた。

さらりとした素材のワンピースの裾には、先程玉子焼きを落としてタオルで拭いた跡が濡れて残ってい

た。前髪を真ん中で分けている。きちんと切り揃えられた爪といい、素足の落ち着きようといい、どこから見ても清楚で自然な可愛らしい女の子だった。両方の瞳だけが赤いのだ。瞳孔の部分が多少黒みがかっていて、僕らの世界がどのように見えているのか想像もつかない。白目との境い目がバイオレットに淡く滲んでいる。僕は宝石でできた王子様の像を思い浮かべた。ツバメに運ばれたのはルビーではなくダイヤモンドだったか。

「わたしの容姿、おかしいですか？」

シロちゃんはそう言って自分の胸に視線をやった。そのあとで、おかしい、と声には出さずに口だけを動かした。

僕と心深は一瞬だけ顔を見合わせた。

不思議な声色だった。頭の中にとろりと流し込まれたようでもあり、机の上に置きっぱなしにした小説の表紙に描かれた女の子が喋り出したようでもあった。何だか妙に惹き付けられる声なのだ。

「おかしくないよー。シロちゃんはかわいいよ」

陸の膝が騒々しく上下した。どうやら面と向かって『お姉ちゃん』とは呼ばないらしい。

「ねえ、シロちゃんっていうのは、名前？」心深が訊く。

「だって、お魚語わかんない」

僕には陸の言ってることがわかんない。

「それは」シロちゃんがこちらを向く。「わたしの言語が、みなさんには聞き取り難いのでしょうか」

外国人かな、と僕は思った。そういえば話し方にもどこか丁寧に日本語を話そうという努力が見られる。けれど違うのだ。魚か宇宙人だって陸から聞いたばかりだった。魚か宇宙人だって、慣れない言葉の扱いには困るはずだ。

ひとりで納得して頷いていると、案の定シロちゃんからわたしは人間ではありません、との告白がある。誰も驚かない。

由幸と陸はもう散々驚いたあとだったろうし、心深はこれしきのことと驚く女じゃない。一方僕はといえば、何故か納まりのいい感覚を味わっていた。

僕の中のおかしな記憶然り、この世に生きていると、案外いろんなことに巻き込まれる。シロちゃんもそれをわかっているのか、それとも単に価値観が違うだけなのか、僕たちが驚かないことに驚いたりはない。色付きのいい唇を窄め、一度軽く顎を引いただけだった。

「今、聞き取れるよ」

誰も何も言わないので、もしかしたらシロちゃんが言葉が通じていないのかも、と考えているといけな  
いと思い、僕はフォローした。

「ちょっと硬いけど、きみの日本語は完璧だよ」

ありがとうございます、とシロちゃんが微笑む。すぐにその目が大きくなり、ありがとうございます、と区切って喋った。

シロちゃんはもしかすると日本語の意味を理解して喋っているんじゃないのかもしれない。彼女の中には祖国（星？）の翻訳機能があって、彼女の言いたいことが自然に僕らの言語に変えられて発声されているのではないだろうか。シロちゃんが普段操る言葉と僕らの言葉の発音は、とてもかけ離れているに違いない。先程から見せる確認する仕種と、言葉自体を珍しそうに味わう表情から僕はそう感じた。

さすがは宇宙人だ。

「わたしの名前は、本当は×××××といます」

「……もう一回、いい？」

僕が人差し指を立てると、シロちゃんは唇の位置を確かめるみたいにそっとそこに指を添えて、自分の名

前を名乗った。

僕は目を閉じて聞いていた。まったく覚えられない。聞いた傍からするりと抜けていってしまう。それは由幸たちも同じようだ。皆一様に複雑な表情をして目を瞑っている。心深だけは、どうにか聞いたままに口の中で転がそうとしていたが、なかなか難しい様子だった。

それから三回聞いてようやくなんとなーくだけ『シロ』らしく聞こえる部分もあるな、と思えた。

「なるほど、シロちゃんね」

「はい。それで」シロちゃんが爽やかに諦めてくれた。

「シロちゃんは、魚なの？ 宇宙人なの？」心深が核心に失礼な触れ方をした。

「サカナ、ウチュウジン」

シロちゃんが呟く。

言葉を発するときと同じく、僕らの喋ったことも自分の言語に置き代えているのだ。

「どちらでもありません。でも、サカナは近いです。サカナでいいです」

いやよくないよ、と僕は突っ込む。どこをどう見たって人魚にすら見えない。

「由幸」心深が呼ぶ。

「はい」

「この子、最初からこの姿だったの？」

由幸少年は何故か身を固くして、ちょっとだけ顔を赤くした。裸で、とぼそぼそ言う。

「人の姿で、裸で、そのあと服が」

「わたしの変化のタイミングが、少々遅かったようで……」

そう、と心深が呆れたような、でも興味はあるのよ、と言いたげな微妙なトーンで相槌を打った。

「魚も宇宙人も、服は着てないしねえ」

宇宙人については無責任なことは言えないんじゃないの、と僕ははらはらした。だけどテレビや雑誌で紹介されている彼らは、確かにつるんとした金属的な裸体を曝している。それともあれは裸なわけじゃなくて、全身を覆うスーツなのだろうか。

「着ている者もあります。わたしは服を着ない者です」

そう、とまた心深が、今度は物凄く興味がありますといった反応を示した。

「ねえ」僕は、この遣り取りが飽きたのか、シロちゃんの肩に眠そうに凭れかかっている陸を気にしながら訊いた。

「シロちゃんはどうして、由幸にその……釣られたの？」

我ながらあんまりな尋ね方だと、己の女の子に対する不慣れさにがっかりした。幸いシロちゃんはまったく気にせずに答えてくれる。

「さがしているものが、あったのです」

「へえ」

目を輝かせて指を揃えて口元を覆う心深は、『宇宙人の探し物』に完全に心を奪われてしまったようだった。

心深は『さん』付けで呼ばれることを嫌う。ただでさえ長い名前が更に長ったらしくなるのが許せないのだそうだ。確かに、女性で四文字の名前は少し珍しいかもしれない。僕も四文字だけど、男にはよくあるから違和感はない。彼女はしかも苗字も長い。祖父母とは最初から交流がないから知らないらしいが、両親は現在もどこかで普通の飲食店を営んでいて、寺や神社とは無関係にも関わらず、晏流院などという仰々しいものが付いている。名前と続けると十一文字で、やっぱり長い。苗字名前共に呼びにくいので、友だちには「ココでいいか？」とあっさり略されてしまうらしく、それはそれで寂しいようだった。心深はずっとココ、あるいはココミで通ってきたのだ。姓で呼ぶ人は皆無だ。

ドイツ時代はよかったわ、と心深は度々懐かしそうに目を細めた。ドイツ人には長い名前が多いからだろうか。ブリュンヒルトとかリーゼロッテとか。

僕も出会ったばかりの頃『さん』を除去するか、ココもしくはココミにするかの選択を迫られた。できればココミはやめて欲しいというようなことも言っていたが、お願いされるまでもなく、僕はココロミというキューブ型の飴を口の中で引っ繰り返すみたいな舌触りと、漢字の並びの美しさが好きだったから、さほど迷いもせずじゃあ心深で、と返事をした。以降必ずその呼び方を貫くことを約束させられた。『さん』付けすると返事をしてもらえないのだ。

しかし、石持由幸だけは何故か『心深さん』と呼ぶことを許されている。最初こそ少し嫌そうな顔をしていたが、心深は訂正をさせなかった。

あれはどうしてなのか、僕は未だに訊けずにいる。彼女が由幸のことを特別視しているならまだしも、面倒だから放置しているだけなのだとしたら、悲しい気持ちになりそうだったからだ。

そういうわけで、今日も由幸は『心深さん』と呼ぶ。

「心深さん、カルピスとアイスティ、どっちがいいですか」

「なによ、そのチョイスは」心深が笑う。「じゃ、アイスティで」

「尚親さんは、カルピスですよ？」

僕は、甘い飲み物をこよなく愛している。「うん」

「えっと……きみは、どっちがいい？」

由幸はどうやら『シロちゃん』とは呼べないらしい。

「カルピスがどういうものか、わかりません」

「甘いよー」

突然元気になって佐々木さんのサンドイッチを頬張っていた陸が言った。

「甘い？ おいしい？」

「甘くておいしいの」

「では、それを」

こくと頷いて由幸はキッチンに消えた。僕ら年長者二人は立ち上がりもしない。由幸が、この家にある物にあまり触れて欲しくなさそうだからだ。

由幸にとって、僕らはまだ友人というよりも大人に近いポジションに位置付けられている。口には出さないけど母の思い出に触るな、と瞳が訴えている。僕たちに許されているのは佐々木さんの作った料理を温めるためにキッチンに立つことくらいで、鍋だって石持家ではなく、僕の家から持って来た物しか使わない。ここで一緒にご飯を食べることもあるけど、食器は使わせてくれる。僕たちはお客さんではあるからだ。

よく知っている大人でお客さん。由幸の中での僕らの地位はこのあたりだ。

ドリンクのグラスが行き渡ったところで、シロちゃんが口を開いた。

「わたしのいるところの説明は、少し難しいです。どこにあるのかと言われれば、どこにでもあるし、どこにもないです。こちらとほぼ重なっていて、ほんの少しずれています。状況は、あなた方が成る前です。見方によっては、終わったあとでもあります」

「……ちょっと誰か一休さん呼んで来なさいよ」こめかみを揉みながら心深が唸った。

「佐々木さんでよければ、呼ぶけど」と僕が返す。

「あの人はどっちかっていうと桔梗屋でしょうが」

心深はバッグから煙草ケースを出したが、石持兄弟とシロちゃんの顔を見て、蓋は開けなかった。ただ、両手でしっかりとケースを包んで胸に当てた。

「あの」テーブルの上で指を組んでいた由幸が言う。「次元が違うってこと？」

素晴らしいことに由幸少年は、シロちゃんの禅問答の如き説明に付いていけているようだった。この時点で陸は本格的に脱落し、ソファではなく心深の膝枕と僕の脚置きで眠っている。

シロちゃんは細い眉を上下させそうですね、と答えつつ、それでも自分の中で由幸の発言を吟味しているようだった。

「次元……そうですね、空間自体がある場所のことですね」

「空間？」と心深が訊く。

「はい。空間とは、今わたしたちが存在している……ステージのことです」シロちゃんの両手がソファに触れた。

「ここと、わたしの住むステージは、ほんの少しずれて存在しています。次元、で大丈夫です」

「成る前とか終わったあとってというのは」

また由幸が質問する。もう僕たちはグラスを遊びながら、このラリーを見守る観客と化している。

「それは……」

シロちゃんは左手を耳の下に添えて考えるポーズを作った。さっきまでの話を追うと、彼女は今の姿に成ったのであって元々人の形をしていたわけではない可能性が高い。それなのに、なかなかどうして様になる仕種だった。

「あなたたち生物が、今の形に成る前と、形を失ったあとにいる場所という意味です」

「え……」

由幸と心深の口がぼかんと開いた。僕も同じような表情をしているに違いない。陸の脚が僕の膝から床に落下し、Tシャツの裾がぺろんと捲れてお腹が見える。誰も直そうとしない。動けないのだ。

「それって、死後の世界とか、あの世とか、そういうこと？」

僕の声がようやく解放されたと思ったら、驚くほど大きな音となってあたりに響いた。

死後の世界があってもなくても別にいいけど、シロちゃんの口振りからすると、生物が形を得る前に一定期間存在してからこちらのステージへ送られ、そしてまた戻って行く場所らしい。

「そういう曖昧なものとは違って、きちんとした流れがありますが、まあ、似た場所です」

死後とかあの世とは曖昧なものなのか、と一瞬感心するが、それよりも僕は『流れ』という言葉が引っかかる。魂がたくさんベルトコンベアに乗せられて、人ではない煙か幽霊みたいな朦朧とした者たちが並んで作業をしている場面を想像して、勝手におかしな気持ちになる。

「へえこいつ、イギリス人だったんだ」「あーこっちは生きてたとき相当悪かったね。次は真っ当に生きろよ」などと言われて漂白剤のような液体をバシャバシャと振りかけられる様を浮かべ、軽くショックを受ける。神秘も何もあったもんじゃない。

「そんなところから、なにを探しに来たの」

根が冷静な由幸は立ち直りも早く、淡々と質問を続ける。シロちゃんはちょっと首を傾げて眉を下げた。  
「ヒト……の姿をした、わたしたちのステージの者です」

「人の姿？」僕は軽く聞き咎める。

「そうです」

シロちゃんは肩幅を狭めたいかのように縮こまった。僅かに俯いた瞳から透明な赤が零れ落ちてしまうのではないかと危惧したけどそうはならず、代わりに溜め息がころんと落ちた。これから話さなくてはならないことへの気の重さが、そのまま転がり出たらしかった。場が、微かに緊張を孕む。

そんな中、陸の「やーだ、そんなの食べるの無理ー」という寝言が、一面に張り巡らされた緊張をき回した。本人は苦悶の表情を浮かべて手足をばたつかせている。必死だ。

起こしてやろうかとそっと肩に手をかけると、小さな唇がまたほわっと開いた。

「羽根むしってからにしてー」

いったい何の夢を見てるの？ と僕は少々不安になる。

この地上で生きている者の世界と、生きていない者の世界とは、遠く離れているようで実は凄く間近にあるようだ。

夕飯を食べながらお茶を取ろうとして湯呑みに伸ばした指が、魂のひとつを掠めていることもあるというわけだ。その、こちらと表裏一体というか紙一重というかの世界を何と呼ぶのかは、例によってシロちゃんに発音してもらったけどよくわからなかった。それでも名前を聞いたときよりは多少耳に馴染みやすく、僅かに『ダザイ』という単語が聞き取れた。

治？ と僕は思いかけるが、以前どこかで読んだ本にも、それらしき語感の単語が出てきたことを思い出す。しばらく口の中でダザイを転がすと、ドイツの哲学者ハイデガーのまさにドイツ人の哲学者らしい、気難しい紳士然とした広い額が浮かんだ。

そうだ、現存在(ダーザイン)だ。

大雑把に言って人間の存在そのもののことを示す意味だった気がする。哲学用語だ。しかもこの言葉は、ハイデガーが使用する以前に他の哲学者によって別の意味で使われているし、ハイデガー自身も結構広範囲な意味でこれを使用していたと記憶している。いちいち頭に、ヘーゲルの意味でのダーザインだのハイデガーの言うところの現存在だのとややこしい解釈を付けなければいけない、面倒な用語だったはずだ。言葉通り単純に、今僕は確かにここにいるよ、というだけの意味ではないのだ。

人によって意味付けがまちまちなこの単語を、何故別次元人のシロちゃんが喋るのが僕は不思議でならなかった。

ドイツ語といえば、もしかしたら心深ならシロちゃんの言うことがある程度は理解できているのだろうか。気になって訊いてみると、心深は無然とした顔付きで「単語が似ているところもあるけど、基本的に全然違う」と首を振った。ダーザインの正しい訳があるのかどうかを尋ねたところ「そこにあること」と返ってきて、更に不思議な顔をされた。どこかそういうふう聞こえた？ と言う。人によって聞こえ方も様々なのだろうか。

でも現存在というのがもしシロちゃんたちの世界のことを現した単語なのだとしたら、ハイデガー先生もさぞかし興味深いだろうな、と僕は見当違いな想いを馳せる。そう聞こえているのは僕だけのようだし、件の哲学の先生に言ったところで、鼻で笑われるのがオチだろう。それに、シロちゃんの話が事実なら、彼はとっくにそちらに行っているようだ。今更僕如きが発言することなど何もない。

シロちゃんの言うまだ生きていない、即ちまだ生まれていない者たち／既に生き切った、つまりこの地で生命活動を終えた者たちが混在する空間のことは、あの世と呼ぶには殺伐とし過ぎているし、彼岸では湿っぽい。ということで、話し合いの結果まったく語感の異なる『ネクストステージ』と呼ぶことにした。

ネクストステージでは魂の選別、梱包、配送準備などは行われていなくて、魂はただひとつの大きな流れになって漂うものらしい。想像を絶するほど巨大で、金色に輝く光のリング状になっているそれ自体が無数の魂で構成されていて、ぐるぐると攪拌されるうちに、生前の記憶や染み付いた性格などががれ落ちて行くのだ。魂には意思がなく自力で同じ方向に回ることができないため、流れを作る者が一緒に漂い、ぐるぐると廻(めぐ)っているようだった。

「そこに、わたしがいたのです」とシロちゃんがカルピスを飲んでから微笑む。美味しいですねこれ、と言う。

「魂を攪拌して、浄化というか、まっさらに、ええと、漂白するのがわたしの役割です」

魂というものは一応の形があるものらしく、普通は、上手に中身を消せばリサイクルができるらしい

のだ。

これはもちろん僕らの世界の常識ではない。荒唐無稽で、三流の宗教家が信者集めのために掲げそうな内容だ。話しているのが目が赤くて少しおかしな言葉遣いの小学生くらいの容姿をした女の子じゃなくて、こちらも、を吐かない少年と、不思議な力に耐性を持つ可愛い大人の女性が一緒になかったら、信じていなかったかもしれない。変な集団の中で聞く変な話は、どうやら変という個性を失くして普通にありそうな話になってしまうようだ。

僕は光でできた大きなドーナツを思い描いてみる。そして、本当の姿がどんなものかわからないから、今の人の姿をしたシロちゃんが、ほんわりと発光するたくさんの柔らかいものたちの間を泳いでいるところを想像する。神秘的で美しい魚だ。

「その、ネクストステージには、あなた以外の姿をした者が他にいたの？」

心深が煙草ケースを膝に乗せる。先程までそこで眠って妙な夢を見ていた陸は、寝室に運んでおいた。

「はい、いました」

シロちゃんは口元を綻ばせ、懐かしそうな、照れくさそうな表情を見せた。

陸がまだ起きていたとき、シロちゃんは着衣している者とそうでない者がいると言っていた。自分は着ていない方だとも。話は続く。

魂は光のサークルによって記憶を濾過され、再びこのステージへと戻される。一回転ですべてが離れるものもあれば、結構長い間廻り続けるものもある。そもそも、一回転が途方もなく長いらしいのだ。

魂の行く先は誰の采配でもない。もちろんそれ自体が選べるものでもない。ときが来れば輪からほろりと零れ落ちて、ふわふわと漂っていつてしまうらしい。

「服を着ている者たちは、こちらのステージに戻ろうとした魂が輪から外れたとき、次に生まれ出(いず)る際の基本的な情報を与えます。その者たちが、魂に行く先を誘導するのです」

基本的な情報とは、形だとか本能だとかいった、ベースとなる性質のことらしい。

「だいたい性格は、生まれる前に決まってるってこと？」僕は訊いた。

「性格は、物凄く——」

シロちゃんは言葉に詰まって、両腕を広げた。

「大雑把？」心深が助け船を出す。

「そうです。大雑把にですが、決まります。それより、形が重要です。形の情報さえ正しく与えれば、自ずと行動が伴います。制限されます」

「生き物の形は、魂が作ってるの？」

「ああ尚親さん、逆です。形はもちろん生まれるときに親から与えられた細胞で形成されます。魂に、次に入るモノの形を知らせるのです。次に入る生き物の性質と形を、先に魂に覚えさせ、一致させるのです」

たとえば、動き回る必要のない植物などは、細胞は細胞壁でがっちり守られ、煉瓦を積み重ねるようにして構成されている。性質(たましい)と形が一致しなければ、細胞壁は崩れ、細胞はアメーバーの如くくにかくにやと流れ出してしまう。

そうなる、植物が歩き出すようになってしまうのかということそうでもなく、その前に死んでしまうのだそうだ。これが脳のある生き物なら行動と思考が伴わず狂ってしまっ、やっぱり死んでしまうというのだから、怖い。

鶏の卵に宿る魂に白熊の情報をインプットはできない。してはいけない。間違えるとこちらのステージでは生きられない。彼ら『着衣した者』たちは正しく選別と誘導を行う。

そして、僕が興味深かったのは、ひとつの器に納まっている魂の形だ。

たとえば人間だと、心臓が止まって死んだ場合、心臓が活動を止め血液の流れが止まり、酸素が供給され

ないでいるとその身体は徐々に死んでいく。中心から順番に末端に至るまで段々と死に尽くす。魂というものは先に活動を止めた部分からがれていくのだ。

だから、だいたい魂は持ち主と同じ形をしている。ヒトはヒト型だし、ヒトデは星型かもしれない。ただし、綺麗な人型ではない。先のがれた部分に後の部分が付いて行く感じになるから、やたらと腕の長い人のシルエットだったりもする。そうやって、雲かお餅みたいに細く太く連なりながら順に身体から離れていくのだけれど、不安定なものだから途中で千切れて丸い玉となることもある。でもそれらひとつひとつの玉の部分には、ちゃんとそれぞれが共有する記憶が詰まっている。

光のサークルに入って廻っているうちに千切れるものもあれば、逆にくっついてしまったり、最初に死体から抜け出た長いままの状態でも輪から離脱するものもある。サークルを出た時点で連なっていようと、ぶつ切れになったひとかたまりしか残ってしまいと、どのような形であれ一個として数えられるから、小さな甲虫に、人の魂だった長いものがぞろぞろと入ることもある。漂白されて生前の意識が消されてしまえば、カタチなんかどうでもいい。

「入るの？」

「入りますよ」

シロちゃんは事もなげに言う。入ると器の形に合うのだそうだ。

「そして、着衣した者たちには、もうひとつ役割があります」

魂から流れ落ちた記憶の処理だ。

光のサークルから落ちてくる記憶たちを集めるのだ。

魂の中に入っている記憶には明確な形がない。光の塊みたいにきらきらと煌めきながらがれ落ちる。持ち運ぶのにもコツがいるのだそうだ。

記憶はほとんどが廃棄処分で、それについてのやり方はシロちゃんは知らないらしい。廃棄されるもの以外は処理をする者の独断で、一部は音楽や映画の代わりとして使用される。つまり娯楽だ。

人の思い出を覗き見るなんて悪趣味ではないかと思ったけど、よく考えたら本物の映画だって誰かの人生の記録ともとれるし、音楽なんてまさに心を映し出したものだ。それに、こうやってしまっただけは身も蓋もないが、死んでしまった本人に文句は言えない。

「結局、魂って記憶の入れ物なの？」

一般的には……というのも変だけど、特に宗教を持っていないなりに単なる知識として知っている僕らの概念では、魂というものは不動のパーソナリティのはずだ。それが移ろって、新たな身体に入ったとしても、だから中身は変わらない。忘れてはいるけど、現在の身体に入る前の記憶がずっと積み重なって刻まれているはずなのだ。それが輪廻転生というものだという認識を持っている。

「入れ物です。身体は魂の器。魂は記憶の器です。入れ物がないと、決まった形のない記憶は、零れてしまうのでしょうか？」

それはそうかも知れないけれど。

「たまーに、生まれる前の記憶とか持つてる子、いるじゃない。ドキュメンタリーとかでやってて。まあ、ヤラセかもしれないけど。あれは、本当は有り得ないことなの？」

心深い質問に、シロちゃんはまた少し考える素振りを見せた。

「有り得ます……ね。漂白不足というか、こちらのミスで、記憶が残ってしまうことがあります」

と、申し訳なさそうに、肩を竦めた。

こちらのミスとは、会社みたいだ。

「魂のことはだいたいわかった。で、服を着た者たちは、魂から零れた記憶をうまいこと集めるんだね？」

そうです、とシロちゃんは僕に頷きかけた。そのあとで、元々儂げだった笑顔が、更に一層曇る。

「それらの者は、こういう、クッションのようなものに腰かけて作業をします。それに座ったまま、ネクストステージ中を飛び回るんです。あれはとても楽しそうです。でも……」

シロちゃんは石持家のクッションにそっと触れた。優しく撫でながら、細く長い溜め息を吐いた。

「そこで、事故が起こったんです」

「事故」三人の声が重なる。シロちゃんは頷く。

「処理をする者が、廃棄する予定の記憶を集めていたとき、誤ってひとつ落としてしまったんです」

「落とすと、どうなるの？」

心深はだったら拾えばいいじゃない、とでも言いたげだった。

「いつもはどうにもなりません。拾って運べばいいだけですから。でも……そのときは、できなかつたんです」

「どうして」由幸が訊いた。

シロちゃんは由幸の方にちょっと身体を向け、一度きゅっと唇を結んだ。言葉を探しているというより、言うべきことは決まっているけどあまり口にはしたくない、という感じだった。だが、これを乗り越えない限り次には進めないと決心をしたのか、しばらくの間、肩を落として答えた。

「穴が、開いていたんです」

「穴？」

心深が背中を伸ばして自分の膝のあたりに視線を遣った。穴とは何ですか？ という質問を受けた人みたいに、穴そのものの概念を考える表情を見せた。

「穴、というか、亀裂です。ネクストステージに×××××にがる隙間があったんです」

シロちゃんはおそらく今僕らのいるステージの名称を口にした。やはり僕らの脳にとどまることもなく霧散したその言葉にも、『ダーザイン』と似た響きを辛うじて捉えることができた。つまりその部分が、『世界』か『空間』というような意味を持つのだろう。

「今太宰膝出す？」

心深がおかしなことを呟いた。意味はともかく、そう聞こえてしまったようだ。

ええそうです、このことです、とびっくりしたようにシロちゃんが頷く。違うだろう。

「どなたかの記憶の欠片は、その隙間に流れ落ちてしまいました。そして、記憶を取り落とした者も、それを追ってその穴からこちらに来てしまったんです」

シロちゃんが唇をんで俯いた。

「シロちゃんは、その人を捜しに来たのか……」

シロちゃんが僕の目を見た。「はい」

「落ちた記憶も、あなたが捜すの？」心深が訊く。

「そうですね……でも、わたしには感知する能力がありません。形はどうか見えますけど。それに、もし見つけたとしても、回収ができないのです。やはりあの者を捜す必要があります。もしかしたら記憶はもう回収できていて、ただ戻る穴が見つけれないだけかも知れません」

「戻る穴がない？ 元来た穴から帰ればいいのか」

「それは、すぐに閉じてしまいました」

「え、じゃああなたはどやってこっちに来たのよ」

「穴は元々、それほど少なくなっているんです。魂がそこを通りますから。色々なところに開いたり閉じたりもして、通じる場所もその都度違うんです。わたしたちはすぐに他の穴を覗いて、記憶を追って行った者の気配を辿りました。そうしたら、このあたりだったのです。でもその穴もすぐに閉じてしまって、今度は近くなかなか開かなくて、開いたとしても、上手くその者を見つけられるかどうか不安だったんで

す。……そんなとき、由幸さんを見つけたのです」

「え、俺」

由幸の声が微かに上擦った。シロちゃんが微笑む。

「はい。由幸さんが、わたしの捜している者と距離が近かったのです。それに、いちばんお話を聞いてくれそうでもありました。だから、皆でお願いをして、いつかわたしを釣り上げてもらおうと、待っていたんです」

あなたはお願いを聞いてくれたんです、とシロちゃんは嬉しそうに言った。

「距離が近いって、どういうこと」と由幸。

「由幸さんが、わたしの捜している者と接触する可能性が高い、という意味です」

由幸が釣りを始めた頃に聞いた、「俺にしかできないみたいなんで」という彼の言葉を思い出す。あれはシロちゃん……というかネクストステージからのお願いだったのだ。よくもまあ、二ヶ月半も続いたものだ。それほどまでにシロちゃんたちが仲間と記憶に戻って来て欲しい気持ちは強かったのか。

由幸の情も深かったはずだ。誰かが困っていて、それを助けられるのが自分しかいなかったら、何だかよくわからなくてもわからないなりに手を差し延べる子なのだ。いい子に育ったなあ、と僕はつい親のような気持ちになってしまう。

「時間はかかってしまいましたが、釣り上げてもらえそうな近くに通じる穴が、ようやく開いたんです」

「なんか……気の遠くなるような話ね」

とうとう我慢ができなくなった心深が、煙草を持って立ち上がった。窓際に行き、窓を開けて、棧のところに携帯灰皿を置いた。

「信じて、頂けますか？」

「まあ信じるわよ。だって、あんたの目は赤いし、釣り上げたって言ってるのが由幸だし」

突然名前を出された本人が、不思議そうに心深を見上げた。

「由幸は吐かないからなあ」

僕が言うと、心深が外方を向いて煙草を啜えた。「吐けるほど器用じゃないでしょ」

「はあ……」由幸は戸惑いがちに視線を外した。

「シロちゃんの目的はわかったよ」僕は両手を広げて見せた。「僕も、協力する」

「ありがとうございます」

「だけど……困ったな。きみの捜している人には、たぶん僕は会ったことがない。だから、落とした記憶も、まだ見つかってないはずだ」

僕がそう言うと、シロちゃんは瞬きすら停止させて固まった。真意を量りかねている。僕は両方のこめかみに人差指と中指を揃えて添えた。

「ここに、僕の知らない思い出がある。おそらく、廃棄処分予定だった、誰かの記憶が」

大きく見開かれた目の中で、二つの赤が小刻みに揺れた。

マンションを出ると、あたりが一面オレンジ色に染まっていた。

僕は昔から、夕焼けの中に佇んでいると何かに覆われている錯覚を覚えた。温かい膜が僕をふんわりと閉じ込めて、吐き出した呼気をまた吸い込み、鼓動が全身を震わすのがわかる。それはとても心地のいい空間だ。もう長いこと家族のいない僕は、民家から漂ってくる夕食のにおいや子供を呼ぶ母親の声ではなくて、夕暮れ時の自分のにおいのみ安心する。

陸もいつか大人になったら、僕のような考え方になるのだろうか。夕焼けのノスタルジーを、家に帰るのではなく自分自身の殻に籠る合図にしてしまうのか。別に悪いことじゃない。寂しいわけでもない。でも少し孤独かもしれない。ひとりだなあ、といちいち思うかもしれない。

そうになったら僕は陸を呼ぼうと思う。陸ご飯だよ、とお土産のビール片手にあの公園で待ち伏せをしよう。

「チカくんに紛れた記憶が、まさか死んだ人のだなんてね」

心深の発した声が僕を包む膜に当たって、跳ね返らずに浸透してきた。

「そうだね」と僕は小石を蹴る。

元は誰の持ち物だったのかはわからない、とシロちゃんは言った。

名前を書いておかないからだ。

と僕は誰かの記憶を落とした者を非難する。名前さえ書いてあれば、もし間違っただけで捨てられたのだとしても、届けてあげられるのに。

実は、あの病室での話には続きがある。心深には話していないけど、ほんの少しだけ場面が続くのだ。

「知ってるのか？ お前、まだ生まれてもいないんだぞ」

父親がそう言ったあと、僕ではない『僕』はただ声もなく立ち尽くした。当然だ。「まだ生まれてもいない」のなら、あんたはいったい誰に話しかけているというのだ、と思った。

枯れ木の父は、頬を引き攣らせて笑った。瞬間、その顔が真ん中から真っ二つに裂け、真夏の影くらい黒い人型のシルエットがぬるりと現れた。金色に光る目らしきものが嵌っているのがわかる。同時に、『僕』の身体はあんまんの餡みたいに、くるんと何か、温かく柔らかいものに包まれてしまった。

だから、父親の殻を破って突如現れた金色の目の悪魔のような姿は、見ているのではなく心で感じているといった方が正しい。悪魔の視線を背中に感じながら、『僕』は蹲っているのだ。

生まれてもいないんだ。先程まで父親の姿をしていた悪魔がまた言った。声は父よりもやや高く、『僕』の耳に妙なふうに響いた。『僕』のいる空間の壁が思いのほか厚くて、そのせいでくぐもって聞こえるのだ。

——動く、のか。

——動くなんて生意気だ。

——人間に、成りかけが。

声は入れ物自体を細かく震わせた。最初はただの振動でしかなかったものが、段々大きく揺れるようになり、そして、唐突に鋭い衝撃が襲った。『僕』の首がぽきんと折れる。『僕』は死ぬ。「生まれてもいない」けど死ぬ。

おそらくそれは、胎児の記憶なのだ。まだ母親のお腹にいた頃、きっと父親である男に蹴られるか殴られるかして殺されたのだろう。

どうやら僕の中には、二人分の記憶がくっついて入っているらしい。

どちらも楽しい思い出じゃない。特に後半は、とても誰かに話せるものではない。心深には途中まで話

を進めたけど、結局は断念した。

持ち主には返せない。だったら早いとこ廃棄してくれ、と願う。これは、僕が背負うには重すぎる。「すごいよね、あの子」心深がこちらをちらりと見る。

「ん？ ああ、そうだね。まさか他の次元から来たなんて……」

「違うわよ。そうじゃなくて」

右の肩口で結んだ髪がほわんと弾んだ。僕は首を傾げて無言で先を促す。

「あの子は、魂のプールをずっと回し続けてるんでしょ？ そういう役割じゃない。仕事かもしれないけど。ずーっとよ？ 終わらないのよ？」

心深はずーっと、というところを強調した。髪が揺れて、花に似た香りを僕の元へと運んできた。そっか、と呟いた言葉が風に押し戻されて、僕の中だけで木霊する。

シロちゃんは、僕らのステージに生き物がいる限り、永遠に廻り続けるのだ。地球上の生き物が絶えても、他の星に存在している生物の魂も、同じように光のプールで廻らせているかもしれず、そうなったらもう、永遠という言葉すら短く思える。

シロちゃんや彼女と同じ役割を担っている子たちは、辛いとか退屈だとかは感じないのだろうか。それともそんな気持ちすら、回遊している間にがれ落ちてしまうのか。

僕だったら退屈で嫌になりそうだ。仕事とは無関係な人に会って無駄話でもしたくなるはずだ。永遠に同じことを繰り返すなんて、想像しただけで呆然とする。それともこれは、僕が今こちらの世界で好き勝手なことをしてられるからこそ思うことなのだろうか。

「だからあの子、どこか楽しそうなのかしら」

心深が、独り言のように呟く。

「え、楽しそう？」

「うん、なんだかのびのびしてるっていうか、気っていうか、言葉にしても食べ物にしても、楽しもうとしてなかった？ ええと、こっちのステージを」

黙々と食事をして、単語をまるで味わうみたいに丁寧に繰り返していたシロちゃんを思い浮かべる。心深の言うとおり、その姿は新しい物に触れた新鮮さを心に刻み込む行為にも感じられた。

「見つかったほうがいいんだけど、見つからなくてもいいんじゃない。その、処理人は」

処理人とは、「記憶の処理をする者」から心深が勝手に付けた呼び名のようなのだ。

心深があまりにのんびりと言うものだから、僕は弱ってしまう。

「それじゃあ、僕が困るんだ……」

この記憶がそのうち僕自身のものになってしまうのが怖い。

こちらのステージを観光するのもいいけど、捜し人には見つかってもらわないといけない。二つの記憶をきちんと取り除いてもらいたい。

「どこにいるのかしらねえ、処理人は」

処理人、という呼び方が気に入ったらしい心深は、両腕を高く上げて胸を反らして伸びた。

先程、石持家ではまだシロちゃんの捜し人は処理人とは命名されていなくて、シロちゃん自身は「あの者」とか「その者」といったように『者』と呼んだ。もしかしたら『物』かもしれなくて、一旦そう考えてしまうとじゃあ衣服を付けた『物』とはなんだ、と僕はひとりで困却する破目に陥った。

その『者』か『物』かわからないモノはあちらでは非常に忙しくしているようで、ひとり（一個？）いなくなると膨大な量の仕事の皺寄せが他のモノにいつてしまうらしい。ネクストステージ側の特に着衣連中の間では、なるべく早く、遅くなってもいつかは必ず連れ戻してきて欲しい、とのことらしかった。

「どうやって見つければいいのか？」

と尋ねる僕にシロちゃんは困った顔をして答えた。

「そのまま、いつも通りにしてくださっていただければ近いうちに接触できる、と由幸さんの気配を探った者が言っていました。現に記憶は見つかりました」

わたしには、取り出せませんが、と非常に残念そうに呟いた。

こちらとしては、たとえ記憶の救出が困難だったとしても、多少の破損には目を瞑るから頭蓋を押し開けてでも持って帰ってもらいたいのが本音だ。だけどできないのなら仕方がない。やはり、処理人を捜すのが先決だ。

——という話を佐々木さんにしたら、ぼさぼさの眉毛を、笑っていいのか神妙にしていなければいけないのかわからず忙しく上下させた。二人して俺を騙すのか？ と夕飯のチキンのマスタード焼きの乗ったお皿が斜めになるくらい狼狽えた。

「全部本当だって」

僕はお皿を受け取ってテーブルに配置する。コーンかと思ったらカボチャだったポタージュが、白いポウルの中で湯気を立てている。

「あの由幸が言ってんのよ。嘘なワケがないわ」

心深が冷蔵庫からジンジャーエールを出してきた。彼女の飲むそれはジンジャーがきつめで甘みが少ないから、僕は好きではない。

「そりゃ、由幸ならな。でも、俺はお前らからしか聞いてない。赤い目の女の子も見てない」佐々木さんがキッチンから主張する。

「見たら信じるんだ？」

「見なくても信じなさいよ」

キッチンから唸り声と共に出て来た佐々木さんは、僕の前にカルーアミルクと自分には缶ビールを置いた。席に着き、鎖を引き千切ってまで逃げたのに、追い詰められてしまって仕方なく観念した犬と似た顔をした。

「心深まで一緒になって言ってんだしなあ」

僕の証言では信用できないかのような口振りである。だいたいこういうときはいつもそうで、由幸、心深、僕の順で証言の信憑性が判断される。

由幸は気真面目で真っ直ぐな性格だし、心深は本当に隠したいことは嘘だとすら気取られないようにするか、くだらない嘘は吐かない。

僕はどうやら調子のいい男だと評価されている節がある。陸に至っては、普段から訳のわからないことばかり言っているから当てにはならない。

佐々木さんは、由幸の証言を心深が支持しているのだから信じたいのはやまやまだが、内容が日常的で

ないし僕の顔に締めりはないしでイマイチ信用できずにいるというわけだ。それでも話を一笑に付して完全否定もしきれないのは、僕らが、たとえ空間的にでなくとも日常から少し軸をずらした生活をしているからだ。

心深の素手でボルトや螺子を外す能力だって、それができない人にとっては魔法でしかない。実際はほとんど魔法のようなものだけど、心深にとってはペットボトルや瓶の蓋を捻るのと何らかわりないただの動作だ。僕たちはそういうのに慣れているから、SF的な現象にも多少耐性がある。

ちなみにこの場合のSFとはサイエンス・フィクションの略ではなく、藤子・F・不二雄先生の少し(S)不思議(F)の方だ。

「そうよ。あたしが言うのよ」

信じなさい、と心深が笑いながら睨む。佐々木さんは薄く切ったバゲットの並んだトレイを手前に引きよせ、口をひん曲げて何も答えなくなった。

しばらく関係のない話題で食事をしていると、ふとした沈黙の折、佐々木さんが呟いた。

「あとで何か持って行くか」

石持家とシロちゃんに夕食を届けるのだ。

「その子、メシは食うんだろ」

「ああ、食べてたよ」

それからまた会話を止めて黙々と箸を動かしていた佐々木さんだったが、唐突に信じた、と告げた。どうやら最終的には物を食べるかどうかで判断したらしい。

「で、その子の捜す処理人とやらが、尚親の頭の中にある他人の記憶を、バッサリやってくれるわけか」

処理人から必殺仕事人でも連想したのか、佐々木さんは手刀で空を斬る真似をした。

「どんなふうの方を付けてくれるのかは知らないけど、取り去ってくれるはずだよ」

「早くしねえと、マズいんだろ？」

佐々木さんに指摘されて、僕はちょっと口籠る。

頭の中の本当はまったくの他人である『僕』は、顔つきも感情も含めてほとんど僕と変わらなくなっている。そのうち、父親の暴力の記憶が、身体からも痛みを思い起こさせたりもするようになるかもしれない。現に、胎児の記憶と重なって混乱したとき、一瞬自分が誰なのかを見失いそうにもなっている。

僕はこの一連の回想が、無意識に訪れることに怯える。時間軸も曖昧になり、過去と今がごっちゃになるときがくるのが怖い。

身体だとか精神だとかが悲しみと痛みには耐え切れなくなり、自分を見失って、最終的に藤原(ふじわら)尚親であるという意識がポッキリと折れてしまうことを恐れる。僕はいったい、どうなってしまおうのだろう。

「本当に待ってるだけでいいのか。こっちから捜さなくても」

佐々木さんの目は真剣だ。

さっきそれをシロちゃんに訊けばよかった。でも、僕の頭の中に落とした記憶があると言ったあと、彼女は酷く狼狽した。少し考えさせて欲しい、と言い、今後の方針を練り直す時間が必要なようだったから、この先の話はあまりできなかったのだ。

「でも、捜すたって、どうやって……」

「シロちゃんは、こっちに来てから今の姿に変化したのよね。でも目の色が人間と違うじゃない。だから処理人も、普通とはちょっとずれた容姿をしてるんじゃない？ 色彩感覚が違うとか」

それはありそうだ。僕が納得したところで、佐々木さんが言った。

「メシ食ったら訊きに行くぞ。それがいちばん早いだろ」

それがいい。少なくとも、このまま自分が失われる恐怖と闘いながら黙って手を拱いているよりはずっといい。

カルーアミルクを一気に喉に流し込むと、一気に身体が熱くなった。僕はまだ僕だ。

記憶の在処はわかったが、取り出すためにはやはり処理人がいなくてはならない。シロちゃんは、僕をネクストステージに連れて行こうかとも考えたらしいけど、それは即ち、僕が死ぬということと同義だ。生きた人間はあちらへはいけない。新しく処理人を派遣してもらおうにも、彼女には呼び出すことができないし、元々人手も足りていないのだから来てもらえないかもしれない。結局、こちらにいる奴に救助をお願いするしかないのだ。

僕ら自身がそいつを捜すと申し出たところ、シロちゃんはそうですねえ、と俯いた。このまま黙っていれば確実に接触はできるようなのだが、どれくらいの時間がかかるかが不明だ。僕はそれほどのんびりもしてられない。だからといってこちらから積極的に働きかけた場合、出会いにどのような影響を与えてしまうのかわからないことを心配しているようだった。

僕もそこが少し不安だった。求めれば与えられることもそれはあるけれど、実は大抵の獲物は追うと逃げるのだ。魚然り兎然り女の子然り、こっちが必死になればなるほど、対象は逃げ脚を早めるようにできている。

運命はなかなか意地の悪いもので、人間はただその大いなる女神に弄ばれて、必要な物は与えられず、塵屑ばかりを投げつけられて終わる場合も少なくない。こちらが忘れた頃に運命の方から様子を窺いに来るのを待って、ちらりと姿を覗かせたところを捕獲するのがいいのかもしれない。でもただ待つことは、今回の場合に措いてはできそうもない。だいたい僕の性に合わない。だったらせめてほんの僅かな好機も逃さないように、でき得る限りの情報を手に入れ、罾を張り巡らし、万全の体力を蓄えて確実に待ち伏せたかった。

シロちゃんは膝を揃えてソファに座り、口の中で何度かとくちょう、と繰り返した。返答に迷ってはいたけど、別に難しい質問というわけでもなかったらしく、単に語感を楽しんだだけの雰囲気があった。やっぱり気なんだな、と少しだけじれっなくなる。

「確かに、あの者の姿は元から人と似ています。見慣れていたからこそ、わたしも人への変化が容易だったので。ですがやはり色の区別ができません。××……ネクストステージは、強い光の満ちた場所と闇との差が激しく、それ以外はほとんど色が無いのです」

かといって色という概念がないわけでは当然ない。人の記憶を映画のように見たりもするし、穴から時折こちらの景色も見える。色彩を知ってはいるがほとんど目の当たりにすることがないため、感知の仕方が僕たちとは異なるのだそうだ。

「皆さんの言う瞳の色ですが、わたし、元々こういう色なんです」

「じゃあ、基本的には形しか変わってないんだね」僕が言う。

「そうです。身体の色もこのままです。髪は、着衣した者と同じくしましたし。瞳もこれでいいと思ったんです。鏡を見ましたが、少し私の方が薄いくらいで、皆さんとそれほど変わりなく見えます」

「処理人と比べたらどうなのよ」

「しよりにん？」シロちゃんが首を傾げた。

「記憶を仕分けして処理する人のことだよ。そう呼ぶのはマズいかな」

「いいえ。呼びやすいです」順応性の高い異次元人はにっこり笑った。

「処理人の瞳は、あなた方よりはわたしと同じように見えます」

「だったらそいつもやっぱり、その、あんたみたいに、目が？」

シロちゃんに会うなりおーっ、と言ってしばらく固まっていた佐々木さんが、由幸と一緒にミルクティ

を配りながら訊いた。

佐々木さんは石持家に到着したばかりのとき、お土産のシチュー鍋を胸の高さに持ち上げ、「天女だ」と放心した。信じた？ と訊くと即座に首肯のみが返ってきた。雰囲気にもまれてるだけじゃないか、と僕は呆れた。

「そうですね」天女が口を開く。「わたしと同じように、赤いと思います。やはり瞳の色を基準に見つけられると思います」

「もし普通の人間と変わらなかったら？ お手上げじゃないの」心深が目を大きくした。

「でも、ネクストステージ出身同士だったらわかるんじゃない？ そうでもないのかな」

「ええ。お互いわかります。特に向こうは様々な感知能力に長けていますので、ええと、出身同士なら、近くにいれば気付きます」

「あとは、言葉か」

由幸が低い声で訊く。陸は驚いたことにまだ寝ているらしい。このまま朝まで寝てくれればいいが、夜中に起きると面倒だな、と由幸が零していた。明日は土曜日だから変な時間に目覚めてもまあ、構わない。無理には起こさないようだ。

「そうですね、言葉は重要です」

「呼び合うことはできないの」由幸の声には基本抑揚がない。

「そこまでは……わたしには……」

シロちゃんが申し訳なさそうに肩を落とした。

「やっぱり、待つしかないのかな……」

どっちがいいんだろう。僕はまた迷い始めている。

「ひとつ訊いていいかしら」心深が小さく手を上げた。

「はい」

「記憶は、持って帰らないといけないの？ 消しちゃっては駄目？」

シロちゃんはちょっと考えた。

「消せる方法があったとして、それができてしまっても、そうですね、困ります」

曖昧な言い方だった。シロちゃんは元から白い顔を真っ青にして俯いた。指先が微かに震えていて、それを隠すように膝の上で指を組んだ。罰則か何かがあるのだろうか。処理の仕方を違えると、何か大変なことが起こるのかもしれない。

「すみません……」

シロちゃんが消え入りそうな声で謝った。ちゃんと話せないことに対してか、記憶を消すことが駄目だということに関してなのかはわからなかった。どちらにしても、これ以上突っ込んだことは話してもらえない。そんな雰囲気だった。

「いいのよ」

心深が残念そうに眉を寄せた。

それ以上特に意見も出ず、心と沈黙が舞い降りた。

しばらくの間、グラスの中で氷のぶつかる音のみが静寂に逆らっていた。

「変わった目の色、か……」

佐々木さんが僕の隣で唸りだした。少し前から腕組みをして微動だにできなかったため、寝ているのかと疑っていたのだ。どうやら、考え事をしていらしい。

「どうしたのよ」

心深は、やっぱりクロコダイルの煙草ケースを膝の上に乗せていて、隙あらば吸おうとしている。

「いや……俺、どっかでそんな奴見た気がしてな」

「え、ほんとに？」

僕はそれは驚いたけど、シロちゃんは更に上半身まで乗り出してきた。

「どちらですか！」

幼い天女に詰め寄られた佐々木さんは、両手を前に出して仰け反った。

「いやいや、ちょっと待ってくれよ」

佐々木さんは、シロちゃんに向かってパワーを注ぐみたいに手を前方に翳したまま目を閉じた。苦悶と焦りの表情を同時に浮かべ、額に汗してさっきより激しく唸りだした。これは、もしかしたらもの凄いイリュージョンが起こってしまうかもしれない、と誰もが身構えたとき、ほう、と脱力した佐々木さんが見たわけじゃねえんだ、と曖昧なことを呟いた。シロちゃんがかっかりとしてソファに背中を付けた。

「はっきりしなさいよ。もう。見たの？ 見てないの？」心深が小さく唇を尖らす。

「焦んなよ……なあ、尚親、覚えてねえか」

「なにを」

「この前の仕事るとき、ゴーグルみたいなサングラスをかけた奴がいただろ」

「仕事、仕事とはなんですか？」

シロちゃんが訊くが、僕らはそれとなく無視をして、考えた。

石灰の鼻に纏わりつくにおいを思い出す。

茶色の短髪で小柄な、少年と言っていいくらいの年格好の男が、必死の形相で粉の詰まった袋を投げつけてきた。心深が倒したのにサングラスが外れた音がしなかった。あれはゴーグルだったからか。

佐々木さんが言う。

「あいつ、強い光が苦手だとか言って、ずっとあれをつけてたんだ」

佐々木さんは、誘拐事件の間中犯人役と行動を共にする。必要があれば住処にも潜り込む。アジトをこちらが用意するのが常だけど、その必要がない場合もある。

「一回、あいつが顔を洗ってるときに、洗面所のドアを開けちまったんだよ」

仲間の一人が借りていたボロアパートだったと言う。光など差し込みもしない、窓のひとつもない北向きの洗面所で、佐々木さんの乱入に驚いた彼は、洗顔中でびしょ濡れにも関わらず慌ててゴーグルを装着したのだという。

「今考えると、別に裸を見たわけじゃねえんだ。たかだかサングラスをかけてないツラだぜ？ 恥ずかしいか？ そいつは慌てようが普通じゃなかったんだ。まあ、はっきりと目を見たわけじゃないが、変わった色をしていたような……」

「でも、なんで僕を見たとき気付かなかったんだ。記憶を持つてるのに」

「それは」シロちゃんが言う。「集中しないと感知ができないので、その、尚親さんと会ったときの精神状態にもよると思います」

確かに、僕と会ったときは極限状態だっただろう。可哀想に、今にも泣きそうだった。

「その人、会えますか？」

シロちゃんが勢い込んで訊く。

僕と心深と佐々木さんは、戸惑いつつ視線を交錯させた。

もう会えないんじゃないかな、とは、僕には言えない。

実は僕は、一度だけ心深と寝たことがある。出会って組んで半年くらい経ったあたりだった。

あの頃の僕は異常なまでに落ち込んでいて、毎日を鬱々と過ごしていた。お酒に逃げるほどアルコールに強くもなく、趣味という趣味もなかったから、よくない感情はちっとも発散されず募る一方だった。マンションへもあまり帰らなかったように記憶している。ひとりになりたくてもなれないのは共同生活のデメリットだよなあ、などとぼやき、ビジネスホテルに滞在していたのだ。別に、家にいたからといって佐々木さんや心深が干渉してくるわけでもないのに。

今になって考えると、僕は拗ねていたんだと思う。それほどたいしたことでもなかったのに、まるで世界中が敵に回った気がして、皆が僕を貶めようとしているように錯覚して、かなり遅めの反抗期の真っ只中にいたのだ。

ある日、久し振りにマンションに帰ると、キッチンに心深がいた。珍しく洗い物なんかをしていたから、ダイニングから何となく眺めていると、彼女は「今日佐々木さん友だちのどこ泊まるって」と訊いてもいないのに教えてくれた。僕は返事もせずテーブルの前で立ち尽くした。自分の部屋に行こうとしたのだけど、何故か足が動かなかった。

やがて洗い物を終えた心深が、タオルで丁寧に拭いて水気を落とした手を、テーブル越しに差し出してきた。僕は何も考えずにその手を取った。彼女はノースリーブを着ていたからきっと夏のことで、その手は冷たくて気持ちよかった。

僕は空いた手で自分の肩を掴んだ。そうしていないと泣くか怒るか、とにかく感情を溢れさせ、心深に酷い態度をとってしまうであろう予感があった。

「チカくん、おいで」

心深がそろりと歩き出した。僕の手を持ったままだったから、ダイニングテーブルを挟んで一緒に平行に移動した。心深は僕を誘導してテーブルを迂回させると、にっこり笑って自室のドアを開けた。

初めて入れてもらうそこは、黒と紫が基調の、大人っぽいというより、たとえばヴァンパイアとか人魚といった人あらずのモノの棲むのに適した、妖しさと美に満ちた部屋だった。

心深は大きなベッドに僕を座らせ、身体を寄せてきた。控えめな香水のかおりが、僕をそっと包んだ。

「心深、止めた方がいいよ」

僕は止めた。この行為が、同情を多く含んだものとわかったからだ。それに、彼女はこんなにも簡単に手に入ったらいけない存在だとも思っていた。僕にはこの状況を素直に喜べなかった。穢い手を使って宝石を盗んだみたいで、どこか後ろめたくもあった。

心深は目を細くして、微かに顎を上げた。馬鹿ね、と言った。

「セックスを軽んじるのはやめなさい」

「え」

僕は面食らった。何故怒られるのかがわからなかった。だって、と反論した僕の声は掠れていた。

「同情で身体を与えるのはよくないよ。心深が傷付く」僕はそう言った。

「そんなわけないでしょう？」心深は僕の頭を抱き寄せた。

「もっと自分を大事にした方がいい。カラダを安売りしない方がいい。そんなこと言う奴らは、女を軽く見てる。何人抱いたか、どれだけ美人と寝たかを競う馬鹿と変わりはないわ」

両手が優しく僕の頬を包んだ。少し気の強い瞳が近付き、鼻先が僕の前髪をき分け、そこに唇が触れた。

僕は胸が苦しくて堪らなくなる。ぱきん、と折れた音がしたのは、ずっと世間に向けて尖らせていた僕

の心の棘だろうか。

「誰かに教えてもらうまでもなく、あたしは自分を大事にしてるわ。チカくんだって知ってるでしょう？」

「それは、うん」

「癒しや赦しを必要としてる人に、必要なだけあげるのよ。そういう人にあたしはあたしを惜しまない。全部受け止めて、流してあげる。そうじゃなくって近付く奴はわかるから大丈夫よ」

「僕が、心深を利用しないって、言い切れるの？」

心深が頭の上で笑う。僕は、首の後ろがくすぐったくなる。

「チカくん、自分を甘く見たら可哀想よ。そういう考え方の子じゃなかったはずよ。あなたは誰にも利用されない。誰にも傷付けられない。あなたはあなたの、もっと強いところを見てあげなさいよ」

気付くと僕は服を全部脱いでいて、ベッドに仰向けに寝ていた。心深の手が、僕の胸をゆっくりと撫でていた。その感覚を確かめるように、僕は深呼吸をした。

ずっと続いていたせいですっかり慢性的になっていた頭痛が少しずつ軽くなり、視界を閉ざしていた霧が徐々に取り払われていった。僕は目を閉じる。心深の手は凄い。心の奥底で決して動こうとしなかった重くて黒い塊が、ほろほろと分解されていった。人の肌の温もりの心地よさとか、心深に信じてもらっていたことの嬉しさだけではなく、僕がまだ僕自身を必要としていることを、心深と抱き合うことで知ったのだ。

なんだ、と思った。

なんだ、僕はまだ、誰かに優しく触れることができるんじゃないか、と。

僕の中に螺子止めされていた不快でどす黒い感情が、固定を失ってゆっくりと流れて行くようだった。何にもなくなった僕の中は空洞にはならず、代わりに温かくて柔らかい、ころころとよく転がる楽しげなものが生まれ、そうっと心に寄り添った。

耳元で心深が囁いた。

「もう終わったことよ。大丈夫なの。よく頑張ったね、チカくん」

泣きはしなかった筈だ。だけど次の日目が覚めたとき、少し頭がぼんやりとして、でも心は晴れやかにすっきりとしていたことを覚えている。気まずさはなかった。心深の、癒しと赦しでできたセックスは恥ずかしさや照れくささとは無縁で、悩み事が解決したあとの爽快感だけをもたらしてくれた。

実は僕はあれだけ落ち込んでいたはずの原因となった出来事を忘れた。あの翌日にすこーんと飛んで行ったわけではなく、ちょっとずつ忘れて行った。今ではもう思い出せない。

五百円を落としたとか試験で悪い点数を取ったとかいう落ち込みではなく、大切なものを壊してしまったとか、可愛がっていた犬が僕の不注意で車に撥ねられてしまったといった類の、それなりに心に残る内容だったはずだ。それを僕は、傷を残すことなく綺麗に風化させて行った。心深のおかげで。

お互いあの日のことを口にすることはないけれど、僕はずっと感謝している。心深の、まさに名前の通りの懐の深さを尊敬もしている。もう一度抱きたいか、と訊かれたらそうでもないと答えるはずだ。単なる下心だけでは彼女に近付けないことを、身を以て知ったからだ。欲望の対象にするには高貴過ぎて、恋をするには何だろう、僕にまだ何か足りない気がする。

あとき僕は癒されて赦されたかった。もう悩まなくていいのだと、全身で実感したかった。それが達成できたから満足なのだ。

だけど僕は今、一年以上前の夜のことを懐かしい気持ちで回想している。

もう一度心深と寝たいわけではなく、僕が僕のままにいられるためには、僕をここ、藤原尚親の中に藤原尚親そのものとして留めておくには、心深の存在が必要不可欠なのではないか、という気はしている。

石持家の帰り、佐々木さんには先に帰ってもらって、僕らのマンションの近くにある神社のベンチで、僕はもうひとつの記憶の方も心深に話してしまう。生まれる前に死んでしまった子供が哀れでならないと思

いつつも、それがいつこの身に起こったことのように根付いてしまうのかを考えると恐ろしくて堪らない、と訴える。これまで培ってきた二十二年間の人生がどうなってしまうのか。精神に根を張り始めたばかりの二本の木が元からあった木に枝を絡ませ、一本の大きな樹木となったとき、僕が何者として存在しているのか。そしてそんな僕が心深や佐々木さんや石持兄弟のことをどう認識するのか。

少し先に実際に起こり得るであろう変化を想像すると、息もできないくらいの不安に駆られる。

「心深、これを僕から取り除けないかな」

言ってしまったあとで少し慌てる。

「あ、そういう意味じゃなくて……」

まさか身体が目当てだとは思われたくない。

「わかってるわ」心深は僕と目を合わせたまま、首を振った。

「あたしもそれを考えていたの。あたしにならできるかも知れない。でも、たぶん全部消し去っちゃう」

だからあのとき、心深はシロちゃんにあんな質問をしたのか。言われてみれば、過去の僕の悩みも、今や跡形もない。消し去ってしまっただけは回収ができない。

「じゃあ、駄目だな」

僕はシロちゃんの真っ青な顔を思い出した。きっとどうしても回収したいに違いない。あの態度は尋常じゃなかった。

「でも、チカくんが辛いなら……」

僕は心深の言葉を遮る。「やめた方がいい。あの子たちのためにも」

シロちゃんに課せられた任務と、先にこちらに来ている処理人のためにも、元の形で返さないといけない。

「だってどうせ廃棄するのよ」

そうだろうか。

ちょっと気そうで、観光を楽しんでいる外国人の旅行者にも見えるシロちゃんだけど、この記憶をどうにかして取り出し元の次元に戻ることこそが、彼女にとっての重大なミッションなのだ。二ヶ月半も待機して由幸の釣り針を頼りにこちらに来たことや、さきほどの、佐々木さんが処理人らしき人物のことを話したときの反応にしても、必ず成し遂げたい使命には違いないのだろう。廃棄するにしたって、ネクストステージ流の方法でないといけないのかもしれない。

「このままじゃ、チカくんが苦しいでしょう？」

「それはそうだけど、やっぱり駄目だ。これはだって、僕のものじゃないし」

心深が溜め息を吐いた。

「じゃあ、万が一処理が間に合わなくて、記憶がチカくんに根付いたときは、あたしが助ける。これは、最終手段よ」

「うん、そうしよう」

首を縦に動かそうとして俯いたとき、痙攣するように震えた。やっぱり怖い、のか。

心深の力を信用していないわけではない。でも、心深が癒しの能力で解けるのは、その人の心の傷に限定されるのではないだろうか。

僕自身が体験していない他人の記憶が、果たして癒されたと感じて僕から離れて行くだろうか。たかが記憶の断片などに、赦されたと感じる機能はない気がする。だとしたら、現時点での『彼ら』の宿主である僕自身が救われたと思わないといけないのだと思う。僕にはそれがうまくできる自信がない。他人の辛さを引き受ける度量なんか持っていない。訴えかけてくる想いじゃなく、死んだ人の記憶なのだ。こちらが宥めても慰めても通じないのだ。

それに、石持由香里の例もあるけど、僕には死んでしまった人の辛さを思い遣る心が欠けている。死んだら終わりだと思っているから、記憶たちは救われたといえどとっくに救われているし、救われていないのなら、これ以上はどうやったって無理だろう。

記憶の根付き方によっては、解決するかもしれない。僕が完全に喰われて、尚且つ二つの記憶がそれぞれ互いに干渉せずに僕の身体を己のものだと錯覚してれば、それぞれが自分をひとりの人間なのだと思い込んでいれば、心深の力の効果も少しは期待できるかもしれない。いや、それでも駄目か。単なる記憶には、救われた、と感じられる心がそもそもないのだ。解決策がなくなりそうな予感に、頭の中がぼんやりとする。

心深が突然僕の手をきつく握り、だけど笑顔は見せなかった。今までに見たことのない真剣な目をして、言った。

「なにがなんでも見つけるのよ。絶対」

僕は彼女の瞳の中に希望を見出す。身体の強張りが解け、指先に熱が籠るのを感じる。

小さく頷く僕の髪を、心深の頬が撫でた。

翌日、朝ご飯を食べたあと、僕ら三人は処理人について話し合った。この間の石灰爆弾男が処理人だという確証はないけれど、今のところそいつくらいしか該当する人物はいない。少しでも可能性があるのなら調べなくてはならない。

ただ、僕はシロちゃんが言っていたことが気になっていた。

ネクストステージの住人は、記憶を追ってこちらへ来た者の気配を辿って時期を探り、タイミングを計っていつか接触するであろう由幸に、シロちゃんを釣り上げさせたのだ。このまま普段通りに生活をしていれば、処理人には会えるのだと、そう言った。

もしあの少年ギャングが処理人だったとすると、矛盾が生じる。僕らはもう会っている。由幸と関係のある僕らが接触したのだから、広義の意味で由幸と処理人が出会ったと言えなくもないが、それにしてもおかしい。出会っただけでは駄目なのだ。処理人は、自分が探しているはずの落とし物を、見逃してしまったことになる。

ネクストステージの誰かが少し時間を読み間違えていて、もう少ししたらきちんとした邂逅があるということだろうか。それか、石灰爆弾ゴースト少年が処理人なのではないのかもしれない。

「もう一度会えるのかもしれないわ」心深が胸の前で指を立てた。

「これまで、そんなことあったっけ」

お金儲けのために利用した上に、最終的に手酷くぶちのめしたチンピラと再会したことはあるのか、と僕は佐々木さんに訊いた。

「ねぇよ」とは、予想通りの回答だった。

「あつたら、俺は無事でここにいると思うか？」

それは半々じゃないかな、と僕は思った。佐々木さんの演技力があれば、混乱に乗じて命からがら逃げたのだという話を作って……それでもさすがに半々はないか。運がよければ乗り切れることもあるだろう、といった程度か。

元々僕らは、誘拐の誘拐が終わったあとも平穩に過ごせるように、二度と会わないであろう人物を厳選しているのだ。もう一度会ってしまったら、佐々木さんの言うように無事では済まないはずだからだ。

石灰爆弾ゴースト少年との再会は、自然には訪れない。そう考えていい。

「じゃあ、やっぱりこっちから会いに行かないと」

捜そう、と言って僕は立ち上がる。

ふっとあたりが、電気を消したみたいに暗くなった。

目の端、視界には納まらず、はっきりと捉えることのできない際どいところに、誰かの気配を感じる。ミンナノヘヤの大溝昭だ。彼はソファに浅く腰を下ろして、顔の前で手を組んで俯いている。そんなところで神の奇跡を待っていたって、何も訪れない。精々マンションが売れ、半年そこそこ分の子供の食費が転がり込むだけだ。動かなきゃ。

大溝をほっぽって踵を返したところで、二つの赤い瞳の瞬きが僕を照らす。

「お願いをして、待っていたんです」

シロちゃんだ。お願いって何だ。誰にお願いをしているんだ。

僕の中心にあるものがぶるんと震えて、視界がブレる。どこを見ればいいのか、どちらに一步踏み出せばいいのか、がまったく定まらない。至るところに穴の空いたフロアを、熱に浮かされた身体で渡り歩いているみたいだ。足を向けるところを間違えれば真逆さまなのに、景色が遠くなったり近付いたり、穴も

大きくなったと思ったら突然収縮したりと落ち着かない。肝心の僕の身体も、前後左右に大きく回転していて、どうにも手に負えない。

穴から、ひとり掛けのソファに座ったままの大溝と、赤い目が光るシロちゃんと、白い長髪と顎髭の、おそらく僕の中の神様のイメージそのままの老人が順番に顔を出す。

待っていれば現れるのか、それとも逆に追わなければ遠ざかってしまうのかが判断できなくなって、僕の信念はもうぐにゃぐにゃだ。そこに冗談みたいな眼鏡をかけた男も加わる。

「神様が——」

「見てますよ」

穴から出入りする度に眼鏡が喋り、そのひと言ひと言のあとに、あまりに貧困なビジョンで何だか申し訳のない神様がにやりと嗤う。どこからか、赤ん坊の泣き声も聞こえてくる。床が動くものだから身体が仰け反って右足が上がってしまう。だけど、足を下ろせばどこかの穴に落ちてしまうかもしれない。神様の頭を踏み付けてしまうかも。

いよいよどうしようもなくなった僕は父親の声を聞く。忌まわしい、暴力と酒でできた人間の底辺の戯言を。

「知ってるか」

ああ違う。

これは、顔を見たこともない方の父親だ。僕が生まれる前に僕を殺して死んだ男だ。違う。僕を殺した男が死んだかどうかなんて知らない。僕は生まれる前に死んだことなんてない。僕は生まれて、まだ生きている。

あああ〜ん、と赤ん坊の声が大きくなる。神様が嗤っている。シロちゃんが祈っている。大溝が、大きな眼鏡が、石持由香里が、神様を呼んでいる。

「知ってる——」

「のか」

知っている？ 僕はなにかを知っている。僕が本当は誰なのかがわかっている。僕には名前がない。まだ生まれてもいないけど父親の死を喜んでスリッパの裏でリノリウムの床を蹴ってはしゃいでいる。医者と向かい合った母親が、大きなお腹を抱えて蹲る。悪魔の目をした父親の頬が、粉を吹いて歪む。僕は膝を抱えて背中を丸めて真っ直ぐ立って背中でその声を聞いている。まだ見たことのない、今から死んでいく父親の声を？ 僕を殺した父親の声を？

「お前まだ——」

そうか。

僕はまだ、生まれていないのか。

泣き声がぴたりと止み、足下に新たに僕を飲み込むための穴が開く。前のめりになった僕は膝を抱えて逆さまに落ちる。

何が起こるのかは当然わかっている。最低の父親に病室で仕返しをしてでも逆に追い詰められて何度も何度も首を折られて死ぬ準備をする。

一度目の衝撃が、もうじき、くる。

「ナオチカ！」

揺す振られて開いた口から漏れたのは、血液混じりの羊水などではなく、空気を震わすことのできる確かな呻き声だった。

「尚親、しっかりしろ」

ナオチカというのが自分のことだということを思い出すのに、少し時間がかかった。佐々木さんが僕のお

腹に馬乗りになっている。心深の心配そうな顔が逆さまに見える。

「……あれ？」

佐々木さんがゆっくりと降り、それに合わせて僕は上半身を起こした。どうやらダイニングの床に仰向けに倒れていたようだ。

「チカくん……」

心深の手が僕の肩に触れた。

「尚親、お前、大丈夫なのか？」

僕は合わせた歯の隙間からゆっくりと息を吐いた。震えているな、と思ったけど震えているのは心深の方で、彼女の触れたところから振動が伝わっているのだった。細くて白い指をしていた。この手が僕を殺すものではないとわかって、ほっとしてしまう。

「大丈夫って……」僕は呟く。

どうだろう。わからないな。

ぼんやりしていたって仕方がない。またさっきみたいなことが起こるかもしれないし、そうなったら僕は胎児になったまま目を覚まさなくなる事態に陥ることも、有り得るのだ。

自由に動ける時間がどのくらい残っているのかはわからない、と考えて僕は改めてぞっとした。

長いこと大病を患ってきたわけではないのだ。少し前まで元気に動いていたのが、突然に動きを止めるのだ。停止する自分自身に、まだちょっと実感が無い。でも、佐々木さんと心深は実際に動きを止めてしまった僕を見ているから、かなりの危機感を持ったようだった。

話を聞くと、倒れ方が奇妙だったらしい。

眩暈を起こしたりして失神するのは違って、表情といい、動作といい、この身体の持ち主である藤原尚親を徐々にやんわりと蔑ろにし、まるでもともとそこにそんな人物などいなかったのだとでもいうような変化を見せたようなのだ。

器から僕をそっと抱き上げ、そこに代わりに二つの意思が折り重なって入り込み、僕だけが外に、まるで納得ずくで放置されるかのような行為が自然に遂げられようとしていたのだ。

「チカくんが、身体だけを残して、いなくなるみたいだった」

指先を揃えて口を覆う心深の肩が震えた。

チカくんの中身が消えるのなら、それはもう、チカくんとは呼べないわ、と呟いた。

もしもあのまま、僕が少年と胎児の記憶に支配されていたら、この、僕の自我というか心というか、あるいは思考とかそういったものはどこへ行くのだろう。

身体を明け渡したからといっても死んだわけではないのだから、魂が抜け出て行くことはないはずだ。僕の意識はただ追い遣られ、封じ込められるのだろうか。そうならば僕には無意識しか残らなくなり、僕には僕の身体に対して一切が関与できなくなる。

そもそも誰が『考え』るといふのだ。僕を乗っ取った記憶たちは、ひたすらに回想するしか能がない。その時点で僕は追い遣られてしまって無意識だから、誰も『考え』ない。ただ繰り返すだけ。思い返すだけだ。記憶たちが『考え』るといふ状況がうまく想像できない。これは、自分が死んだあとか生まれる前の、すなわち僕が生きていない状態と変わりがないとも言えるわけで、そうなるともう、僕の理解が及ぶ範疇の話ではない。僕はそこにまだいるのに、いなくなってしまう。生きているのに、もう死んでもいて、まだ生まれ得てもいない中途半端な状態になる。

あるいは、多重人格者のひとつの人格のように、意識の奥底で眠っている状態になるのだろうか。だったら、何かの拍子で意識を取り戻して、この身体を取り返すことも有り得るのか。

でも少年も胎児も僕の生み出した人格などではない。まったくの他人で、その上単なるある一時期の記憶だ。前に出たり奥へ引っ込んだりと、三人仲良くやっていけるとは思えない。

僕の人格は、映画館の大きなスクリーンで映画を上映している真っ最中、スクリーンの後ろから僕はここだ、と意思表示をしている感じになるわけだ。上映はずっと、肉体の朽ちるまで続く。僕は何かの拍子に前に出られたとしても、またすぐに銀幕の波に吞まれてしまうだろう。

無意識か、出てこられない意識か。

どちらも地獄だ。

黙って僕が僕でなくなるのを待つのは厭だ。

死んで、僕の記憶が誰かの娯楽になって魂がリサイクルされて終わってしまった方がずっとマシだ。

石灰爆弾少年を捜そう。それがたとえ処理人ではなかったとしても、とにかく動いていないと気が狂い

そうになる。進展が欲しい。

待つのが正しいのだとしても、どうせそれは元々僕の性に合わないのだ。神様の頭を踏み付けても駆けずり回るのが僕なのだ。行こう。

立ち上がったところで、僕の携帯電話が鳴る。着信は石持由幸からで、彼の第一声が僕を激しく混乱させる。

由幸は低い声で言った。

『陸が、誘拐されました』

何でだよ。

石持家の無施錠の玄関を開けると、由幸が拳を振り上げて飛びかかってきた。置物のように大人しいあの由幸が、歯を食い縛って目元を真っ赤にして殴りかかってきたのだ。先頭にいた僕は咄嗟にこれは避けてはいけないな、と判断して身構えた。奥歯をみ締めると、左頬を容赦のない衝撃が襲った。後ろから佐々木さんの驚く声が聞こえた。

狭い玄関の壁に肩をぶつけた僕は、痛む左頬をそのままに由幸を見つめた。怒りが全然治まっていない彼の呼吸は震えていて、酷く辛そうに顔を歪めていた。僕より余程どこかが痛そうで、何だか可哀想になって、胃のあたりがきゅっと苦しくなってしまう。

「おい、なんだよ」

佐々木さんが玄関の中を覗き込んだ。心深が少し下がったところで静観している気配があった。

「乃田剛士って知ってますか」

僕は目を閉じる。もちろん、知らないわけではない。

「知ってるよ」

石持由香里が海へ転落したときに近くにいた、誘拐犯のひとりだ。

由幸は白い封筒を差し出してきた。封は切られている。中を覗くと、「馬鹿なことを考えるな」と書かれた紙切れと、陸のものらしき髪の毛が少量入っている。

僕はようやくすべてを悟る。乃田の執念深さに驚かされつつも、心のどこかでいつかこんな日が来るかもしれないことを予想していたことにも気付いた。乃田に限らず、誰かが僕たちに報復に来ることをだ。

乃田には、石持由香里が僕たちに突き落とされたように見えたのだ。いや。由幸と陸のところまで辿り着いたのなら、あれが自殺で、車のぶつかった痕跡などがなかったことも調べてあったはずだ。僕らへの仕返しとして陸を誘拐して、更に由幸には、僕らが母親を突き落としたのだと話したのだろう。

「あんた、誤解してるわよ」

「心深」僕は心深が何か言い出すのを手で制した。

結局僕らは石持由香里を見捨てて逃げたのだから、由幸の怒りは間違っていない。

「ここを買い戻したのも、俺らの面倒を見てくれてたのも、罪悪感があったからですか。罪滅ぼしのつもりですか」

「両方、あったと思う。きみたちのお母さんを死なせてしまったんだし。でも、それだけでもない」

僕は由幸の震える拳を見下ろす。自分の言葉にだから何だ、と思い急激に冷めた。

それだけでもない、から何なのだ。だから許せとでも言うつもりだったのか。

罪悪感もあったし罪滅ぼしのつもりも当然あった。それとは別に、同情も心配も、彼らの生活を見て、その先を予想してしまったから、どうにかしてあげたいという気持ちもあった。

だがそれらはすべて自己満足という言葉のみで片付けられてしまうものだ。石持由香里をどうしたって返してあげることはできないから代わりにしているだけのことで、それが僕に向けられる由幸の拳と対峙することは有り得ない。殴られるくらいされてもいい。乃田から聞いた内容によっては、殺されたって文句は言えない。

たとえ僕が、由幸と陸のことが単純に好きだから、母親を亡くした彼らのために力の及ぶ範囲でできる限りのことをしてあげたかったのだと思っていても、やはり根底の母親の死という出来事に僕が関与している事実から派生した気持ちだというのは否定できない。石持由香里の死以前に出会っていない限りは、彼らに届く寸前で、この単純に好きだという気持が形を変えてしまっても仕方がない。

いや、違う。届いていようがいまいが関係ない。由幸の想いは、どんな形であっても、誰に向かっているものであっても、必ず僕が受け止めなくてはならない。僕は由幸のことが大切だから、きちんと受け止めてあげたい。それが彼ら兄弟を引き受けた僕の覚悟だ。

「尚親さん」

由幸が呼ぶ。僕は顔を上げた。眉間の皺はいつもの不機嫌そうな感じではなく、最初に出会ったときみたく、今にも泣いてしまいそうなのを我慢しているようだった。激し過ぎる向かい風に目を細める人にも似て、何とも悲壮だった。

由幸の視線は僕の首元あたりを彷徨っている。僕の方が彼よりも背が高いから、真っ直ぐ前を向くとちょうどそのくらいの高さになるのだ。それ以上上を見られずにいる。僕と目を合わせたくないのだろう。ああ嫌われたんだな、と悲しい気持ちになる。

「三千万と言いたいところだけど二千万でいい、だそうです。明日の夜十一時に、港区の……母さんが落ちた、あの埠頭の倉庫に、三人で持って来いと」

「ああ……うん」僕は頷く。

「そこで、陸を返してくれるそうです」

「うん」

「尚親さん」

「ん？」

「陸は……陸だけは、取り返してください」

「わかった」

由幸の肩越しに、シロちゃんが今にも泣きそうな顔をして立っているのが見えた。

「金が目的だと思うか」

佐々木さんが言った。苛々しているらしくて、先程から貧乏揺すりを止めない。

僕は二千万円という、僕らのことを調べて知っているであろう彼らが考えたにしては現実的な金額のことを考え、ほぼお金目当ては間違いないだろうと答えた。最初の金額を減らして要求してくるところまでも僕たちのやり方を模倣していて、気分が悪くなる。

「袋叩きも覚悟した方がいいわよ」心深が、煙草を銜えたまま脚を組んだ。「あたしは全力で抵抗するけど」

おじさんは殴られるでしょうね、と鼻の中でくふんと笑う心深は、それでも陸を助けられるだろうという自信に溢れていた。

僕も、僕はともかく心深が誰かに屈するところが想像できないので、それほど不安はなかったが、殴られるのは覚悟をしておいた方がいいとは思った。

いちばんの目的は仕返しだ。これは雪辱戦なのだ。その次がお金でそれ以下はない。僕たちに『誘拐』という手段を使った時点で、意趣晴らしのための行動であると宣言しているのだ。だからこうしている間の陸の安全はおそらく大丈夫なのだけど、当日の現場での僕たちの態度次第では、陸は初めて危険に曝されるはずだ。僕たちの目の前で陸に危害を加えた方が、精神的ダメージが大きいのは明らかで、執念深く僕らを追って来た乃田がいかにも考えそうなことだ。これ以上の、たとえば陸の命が既に奪われているとか、そういったことは今はそれほど問題にしなくてもいい。

あとは向こうへ行ってからだ。そこでは仕返しを度外視した十倍返しの復讐が用意されていることだろう。命の心配はそこからだ。

「ちょっと待ってくれよ。やっぱり俺が殴られるのか？」

佐々木さんは太い指で側頭部に残った髪をきざった。

「佐々木さんだけじゃないって。僕らも一緒だよ。悪いけど、陸を取り返したら僕も抵抗するけどね」

「俺を助けてはくれないのか」

「余裕があればね」

ひでえなあ、と佐々木さんは頭頂部を庇うように丸まった。

「昔取った杵柄はどうしたのよ」心深が佐々木さんを見下ろした。

「あんなもん、とっくに折れて捨てちまったよ」

僕には何ことだかわからない。それよりも、問題にすべきことがある。

「問題は、お金だよね」

僕にはもちろんそんな大金はない。

「千五百はあたしが用意するわ。あとはふたりでなんとかできるでしょう？」

事も無げに言い、心深は細く煙を吐き出した。

「用意たって、大金だぞ。お前、そんな金……」

「あるのよ。それに、チカくんだってみすみす渡しやしないでしょ」

「うん」

頷きながらも、少しだけ心拍数が早まるのを感じた。ドイツにお城を買うという心深の夢を、乃田なんかに渡すわけにはいかない。かといって、新聞紙や紙の束で誤魔化すのも駄目だ。人間がどれほど注意をしたところで、本物のお金を持っているわけではないからという微かな粗略さがそこには生じる。ババ抜きでジョーカーばかり引いている僕なんかは騙せても、一瞬擦れ違っただけの女性の持ったブランドバツ

グの真偽を見抜くことのできる心深には、中身を見る前にぶちのめされる。心深曰く、偽物を持つ人間には隙か奢りがあり、敏感な人はそれに気付くものなのだそうだ。乃田の心眼がどれ程のものかはわからないが、こちらが油断して僅かにでも隙を見せてしまってはいけない。陸を無事に助け、更に今後の石持家と僕たちの身の安全を確保するまで、できる限りこちらの心証をよくしておく必要がある。

とはいえ、どうせ底辺からのスタートだ。こちらはもう嘘をついている。精々従順に見えるよう、殊勝な態度を崩さずに臨むのがいい。二千万円はあげるつもりで行くのだ。いや、絶対にあげないけど。

明日の夜十一時まで、僕らは可能な限りの対策を練ることにした。向こうはこちらのことをすべて知っているのだということが前提だ。もう隠し事はない。陸を奪還するのみだ。

まず僕と心深の動きが重要になる、というようなことを心深が言った。佐々木さんには戦う能力はない。本当なら受け渡し場所にも行かなくていいくらいだけど、乃田が三人で来いというのだから、不参加はまずい。

もし黙って殴らせろと言われたらどうしたらいいのか、と佐々木さんが心配をする。心深が、あまり痛くはないのにダメージを受けているように見える殴られ方を伝授する、と胸を叩いた。

「厭だ……けど、しょうがねえよな」佐々木さんの眉がハの字になった。

「でも、それだと殴られてるうちにお金を持って行かれるだろうね」僕が言う。

「だったらそれでいいのよ。また稼ぐから」

「それは駄目だろうが……」

「できれば渡したくはないね」

僕は天井を見上げた。一瞬、僕ら三人の頭上を、禍々しい悪魔が通り過ぎた気がした。きっと皆が同じことを考えたのだ。

いっそ乃田を殺すか、と。

「さすがにそれはなあ……」

「マズいかしらね」

佐々木さんと心深が、顔を見合わせた。

そんなことをしてしまったら、陸が助かったとしても僕らは、今よりもっと国家警察の動きを気にしなくてはならなくなってしまう。

「どうすりゃ上手くいくんだ」佐々木さんがまた頭を抱えた。

「最悪、引越すか」

そう提案したものの、由幸と陸の転校など、現実的な問題は多い。いざとなったらそれでもいいが、兄弟に逃げ隠れする生活を送らせたくはない。

「それは、奥の手だよなあ」

僕が頭の後ろに腕を回して指を組むと、心深が頬杖を付いた小指の先をみつつ呟いた。

「本当の奥の手は他にあるから、安心しなさい」

「え……」

思わず組んでいた指を解くと、心深の視線が真っ直ぐに僕を向いた。無言で二三回頷いて、ふいと目を逸らす。

「心を解くのか」

佐々木さんが息苦しそうな声で訊いた。

佐々木さんも知ってるのか、とちょっと驚くが、よく考えたらこの二人は僕と出会う前から一緒に行動していたのだ。知っていたところで、あるいは僕と同じように佐々木さんも心を救われていたとしても、不思議ではない。

「そうよ。あたしのアレは、辛いことだけじゃなくて、ささくれ立った心も鎮めるから」

乃田と身体を合わせるのか。

もの凄く厭な気分だけど、心深の能力は心深のものだし、彼女のやり方に文句を言える立場でもない。実際、もの凄く助かる申し出だ。

「ある意味いちばん手っ取り早いわ」

「そうだけど、相手が何人いるかわからんだろう。お前、気力は持つのかよ」

「駄目だよ。そんなことさせられない」

力強く言いつつ、体力も持つのか？ と僕はまた下世話なことを考えてしまい、すぐに自己嫌悪に陥る。最低だ。こんなことで頭がいっぱいな僕は、心深の言うところの『女性を軽んじる人種』と同類だ。だけど心深に身体を差し出させたくはない気持ちだけは本心なのだ。

「それは許せない。やめてよ」

「だって、他に手はないでしょう？」

「まあ……なあ。今回ばかりは、心深に頼るしかないだろうな」

と、佐々木さんも苦い表情で言う。信じられない。

「だけど……」

「大丈夫よ。たいしたことじゃないわ。だからチカくん、逃げられさえしなければ、相手は全員死にかけてても構わないわ。倉庫の隅にでも山積みにしましょう」

心深の目は真剣だった。僕がミンナノヘヤに乗り込んで行ったときは放っておけと怒っていたのに。今では陸たちのためになら身体を張ることも辞さないといった気構えだ。

そういえば心深は、僕が石持家へ出向くとき、差し迫った用事がない限りは同行するし、野生児のくせに物を大切にしすぎるから、いつでもぼろぼろの格好をしている陸のことも常に気にかけている。本当は心配しているのだ。

僕は背中を反らせて目を閉じた。瞼の裏に、元気に飛び跳ねる陸の姿が浮かぶ。

身体を起こして、僕は言う。

「……わかった。心深に任せるよ」

「ええ任せなさい」

心深が首を傾けて微笑んだ。僕はこんなにも頼もしい人を他に知らない。

夜の七時頃、あまり食欲のなかった僕らに佐々木さんがざるうどんを作ってくれた。食事中は皆無言だった。佐々木さんは心深から簡単に、あまり痛くはないのにダメージを受けているように見える殴られ方を教わって、転んで肩を痛めていた。器が持ち難そうだった。

虚ろな食事を終えると、見計らったかのようにインターホンが鳴った。部屋の中から僕が応じると、スピーカーから由幸の、冥界に帰る途中の幽霊のような暗い声が聞こえてきた。

慌ててドアを開けると、由幸の後ろにシロちゃんも立っている。彼女は俯いて長い髪で顔を隠すようにして、その姿は僕に、由幸を連れて行ってしまふ死神を連想させた。そのあたりの空間に裂け目が開いていて、そこからネクストステージに消え去ってしまいそうな不安定さを感じた。思わず手を伸ばしそうになる。実際伸ばしてしまい、少し躊躇したあとに意味もなくドアチェーンを摘んだ。

「どうしたの」

僕が訊いた。こちらから切り出さない限り、一生二人の声を聞けない予感があった。

「俺も行きます」

由幸少年はいつものように簡略に用件のみを言った。どこへ行くの、とは訊かない。自分も陸を助けに行く、ということだ。

「ええ……それは……」僕は驚いてしまって、たいした返答ができない。

「あと、話が」

「僕に？」

由幸は口を真一文字に結んで、いつもの泣く寸前の顔をした。何がそんなに苦しいのか、懊悩の表情で僅かに顎を引いて呟く。「尚親さんに」

僕はシロちゃんをダイニングに預け、由幸を連れて自室に入った。

僕の部屋はクローゼット付きの四畳半の洋間で、ベッドとパソコンを置いてあるテーブル以外は椅子すらない。ベッドが椅子の代わりに果たしている。

僕がベッドの、普段寝るとき足を向けている側に腰かけて、隣に座るように促したけれど、由幸はベッドを背凭れにして床に座った。そこでいいのかと訊くと、ここの方がいいのだと返事があった。

由幸は膝を抱えて、膝頭に口元を埋めるようにしていた。

弟が傍になくて寂しいのだろうか、と思った。

父を亡くし母も後を追って、由幸にはもう陸しかいないのだ。陸を守り、大切に育てることで自分も支えられていたはずだ。由幸に兄弟がいなかったら、あまりの孤独さにとっくに押し潰されていたことだろう。不器用な彼のことだ。もし施設に入っても馴染むことができずに孤立して、部屋に籠って今のように座ったまま、どうにもならないことばかりに煩悶していたかもしれない。

陸だけは奪われてはいけなかった。陸こそが、由幸が前を向いて生きていける、ただひとつの理由だったのだ。

ここまで関わるべきじゃなかったかな。

僕は、膝の上で組み合わせた指の隙間に溜め息を落とした。

心深の言った通り、放っておけばよかった。僕が何もしなければ、由幸たちはどこかの施設で、二人でゆっくりと傷を癒せたかもしれない。

「あの日——」

由幸が、くぐもった声を出した。膝に埋もれさせていた顎を上げ、僕だけに聞き取れる音量で続けた。

「あのタイミングで尚親さんが来たの、凄いと思って」

あの日とはいつのことだろう。僕は考え、すぐに思い至る。

あの日というのは、石持家が売りに出される前日、由幸と陸が施設に引き取られて行く予定だった日だ。

「凄い、かな」

僕の言葉に、由幸が頷く。

「尚親さんが来なかったら、俺たちはどうなったかわからない。施設の館長は逮捕されたし、今は施設自体なくなったみたいだし」

ニュースで知ったのか、由幸は大溝の名前を口にした。

「最初言った、区役所の人っての、実はあんまり信じてなかったです」

やっぱりね。

「だから、乃田が言ったことがしっくりきて。ああだから助けてくれたんだって」

「乃田は、僕らがきみたちに罪滅ぼしをしてるって言ったの？」

首を動かして違うんですか、と訊いたときだけ、由幸は僕の爪先らへんに視線を遣った。

「否定はしない。でも……それだけじゃない」

僕は迷って、結局今日の昼間と同じような返事しかできない。

由幸は少し間を置いてからそうですか、と呟き、正面のクローゼットの扉あたりに緩慢に視線を戻した。そして、微かな、僕が少しでも身動きしていたら聞こえなかったであろう小さな小さな声で、ごめんなさい、と言った。

「由幸は怒って当然だよ。謝ることなんかない」

「違うんです」

由幸は膝を崩して僕を見上げた。これ以上ないくらいの苦悶の色を湛えた瞳が揺れた。

僕は、凄く痛そうだと感じた。由幸はいつも痛みを堪えている。悲しみなんて彼には最初からなかった。彼は始めから、たくさんのものをもぎ取られたことへの痛みだけに支配されている。

僕には喪失を埋めることなんてできない。自分の一部を同じようにもぎ取って痛みを共有することはできるかもしれないけど、それで喜ぶ奴なんかいない。却って痛みが倍増するだけで、毛先ほどの安らぎも与えられない。僕には何もできない。だからそのとき由幸が最善だと思ったやり方で僕に接すればいいのだ。謝るのも受け入れてやればよかったのだ。僕にそこまでの度胸がなかったせいで、由幸に痛みを思い出させてしまった気がした。

痛みを歯を食い縛る由幸は、唇を震わせながら、辛そうに言葉を紡いだ。

「俺、母さんの遺書、読んでたんです」

僕は驚いて床に膝を落とす。気が付くと、由幸の肩を抱き締めている。

どこか放心した弱々しい声で、由幸は続ける。

「一度俺に、母さんがどうして死んだのか、訊きましたよね。でも、あれより前に、尚親さんと最初に会った日より前に、母さんが自殺したって、俺知ってたんです。遺書、警察が、持ってきて」

「由幸」

「裏も、見ました。尚親さんも、知って、ましたよね」

みんな死ねばいいのに。

僕の口から、溜め息のような呻き声のような音が漏れた。

二人の子供をこの世に残しながらも、恨み事を刻まなくてはならなかった石持由香里の精神状態は、僕にはわからない。たぶん凄く辛かったのだと思う。何ものにも代えがたい人を失って、寂しかったのだと思う。でも僕は彼女の想いを理解して肯定してやれない。

僕がたとえこの世を悲観して命を絶ったとしても、そんな言葉は残さない。死に切ってしまうまでの間に、絶対に後悔することは目に見えているからだ。

人は死ぬ寸前、ときとして一生分を感じられるほどの、長い夢を見ることがあるらしい。

心臓が止まり血液の循環がなくなり脳の機能が停止して、いよいよ死が訪れるその瞬間まで、それは本当はほんの短い時間だけど、とても長い期間を現実に生きているのだと錯覚してしまうほどの夢を、最期に見せられるのだ。

これまでの人生を追体験するだけのものかもしれないし、別の新たなストーリーが用意されているのかもしれない。どちらにしても結局は個々の脳が考えることだから、死ぬ前に仕入れた情報とそれほどの飛躍も齟齬もなく、忘れられない出来事はそのまま残り続けていくとも思う。だから、僕があのような遺書を残して死んだなら、最後の最後にあんなこと書かなきゃよかったな、などと悔いながら消えて行く気がする。

みんな死ねばいいのに。

由香里さん、それはないよ、と僕は思う。

あなたが今まで息子二人に与えてきた愛情を疑うわけじゃないけど、極限で我を失っていたとしても、それだけは残してはいけなかった。そんな、死んだもん勝ちみたいな捨て台詞は心にしまっ、誰の目にも触れさせてはいけなかったんだ。

「それから、車がぶつかった跡がなかったのも知ってるし、ポケットに入ってたのは、うちの花壇の煉瓦だったんです」

「由幸、もういいよ」

僕は由幸の頭を撫でた。

警察は何を考えているんだ。傷付いた子供を更に痛めつける真似をして、由幸の心がどれほどの悲鳴を上げるのかも知らずに。どうして遺書を見せた。いや、これは警察のせいじゃないのか。見せなければいけないことなのかも知れないし、由幸は知るべきだった気もする。でもこのやり方は僕の価値観とはそぐわないし、本当は糾弾したい相手はもう死んでいる上に、何だかんだ言っても石持兄弟をこの世に産んだ母親だから、あまり責めることもできない。それに、やっぱり彼女は辛かったんだろうなとも思う。だから結局警察のような、当事者たちの外側にいる人に怒りが向いてしまう。

やっぱり世界は冷たい。この子たちの回りだけ冷やされているんじゃないかという卑屈な心地になってしまうほど、残酷なまでに冷徹だ。

「俺も陸も、なんで生きてんだって言われてる気がして……」

由幸の爪が僕の腕や背中に食い込む。僕は今度こそそれを受け止める。

「自殺だって知ってたのに、助けてくれたのに、俺、尚親さん殴っちゃって……」

由幸がとうとう我慢できずに泣き出した。もう一度ごめんなさい、と言ったけど、由幸は少しも悪くない。

不器用でも吐けない少年が苦悩をひとりで抱えて、これまでどんな気持ちで過ごしてきたかを思うと、苦しくて堪らなくなる。謝るのは由幸じゃない。他の誰でもない。僕らにはその必要が少しあるから、殴ったことを後悔することなんてない。

僕は言う。

一瞬、あれは心深の言葉だから効果があったのであって、僕が言ったところでどうなのだ、という弱気が頭を掠めたけど、やっぱり言う。受け売りでごめんね、と心の中でそれだけは謝る。

「もう、いいんだ……今までよく我慢したね。頑張ったよ、由幸」

由幸は、峠を越えてようやく重たい荷物を下ろした人みたいに、とても長い溜め息を吐いた。

疲れたよね。でもあともう少しだよ。

心深に頼んで、部屋からダイニングにピンクのアタッシュケースを持ってきてもらった。テーブルの上で蓋を開けると、中には心深自慢のメリケンサックがいくつか収まっていた。

僕たちの非日常の部分だ。

「好きな物を選びなさい」

心深が、椅子の上で固まっている由幸の前に、ケースを差し出した。シロちゃんが後ろから怖々と覗きこんでいる。

由幸は一度喉を鳴らすと、重たい指輪を恐る恐る持ち上げ、親の仇でも見る凶悪な目つきで眺めたあと、そっと戻した。そうやっていくつかを矯めつ眇めつ手に取っていたが、やがて、ほうっと溜め息を吐くと、小さく頭を振った。

「俺はいいです」

「素手でいくってこと？」

「はい。それよりも、ケンカの仕方を教えてください」

由幸の目は真剣だ。心深は、しばらくそんな彼の無垢な目を覗き込み、言った。

「ケンカじゃないわ。あたしたちのしていることは、ただの暴力よ。災害に近い。由幸には、身の守り方を教える。行くわよ」

心深は指先で車の鍵の付いたキーホルダーをくるくると回した。由幸は、厳かに後について行く。

ダイニングを出る前、心深が言った。由幸は既に玄関に向かったあとだ。

「相手が何人いようと、あたしが全部解くから。形振り構わず全力で遠慮なく抵抗するのよ。その準備をチカくんたちもしておいて」

そして僕らの返事を待たずに颯爽と出て行った。しばらくしてから車のエンジン音が聞こえ、タイヤが砂を踏む音と共に遠ざかって、やがてそれも聞こえなくなった。

「心深がいちばん勇敢だ」

僕が言うと、佐々木さんとシロちゃんが笑った。

佐々木さんがお茶を淹れるために席を立つと、シロちゃんが赤い瞳を潤ませながら僕を見た。

「由幸さんに、尚親さんには言うなと言われていたんですけど」

何度聞いても不思議な響きを持つ声色だった。魚が泡を吐きながら水中で喋っているみたいだ。ぷあぷああと開く唇よりも遅れて声が届いてくる感じがする。

「うん？ なにを」

「待っていれば会えるというのは、このことだったのかもしれませんが。わたしのせいで、陸さんは……」

「うん」僕はシロちゃんに微笑んでみせる。

「誰のせいでもないよ。大丈夫。全部一気に解決しよう」

シロちゃんは、少し目を細めて頷いた。

陸が誘拐されたのはシロちゃんのせいじゃない。これが起こる予定の出来事に、シロちゃんが引っ張られたのだ。陸の誘拐なくして、記憶の回収も由幸の苦悩が解き放たれることもたぶんない。

ネクストステージの誰かが未来のシナリオを読んで、記憶の回収のためにその通りに僕らを配置していたとかいう話ではなく、由幸と僕たちと処理人の行動と関係から導き出された結果、陸の誘拐が起こることは有り得ないことじゃなく、ネクストステージの誰かの想定範囲内だったのだ。こうなることもあるだろうな、と思ったからシロちゃんを派遣した。ある意味、賭けだったのだ。

果たして、由幸と処理人の邂逅は叶えられそうではあるけれど、だからといって結果まではわからない。シロちゃんが参戦して、両ステージの事情がわかり、全体像が把握しやすくなったからといって、慎重にやらないと陸は戻らない。記憶の回収も、成功率は半分かもしれない。

こちらの世界には冷たくて残酷な面があって、おそらく僕らよりもその冷気に当たり続けている乃田は、冷たくて残酷な行為を許容しやすいように思える。僕は乃田の心が完全に凍ってしまわないようにうまく立ち回らなくてはならない。乃田に一線を越えさせないようにしてあげたいのではなくて、陸を助けたいからだ。

温かいカフェオレが運ばれ、一息ついた頃、シロちゃんが口を開いた。

「伺ってもいいですか」

彼女は僕と佐々木さん両方に訊いているようだった。うん、と答えた僕の声が佐々木さんのああ、と重なる。

「尚親さんの、その、お身体の様子は……」

「ああ……」

僕は横目で佐々木さんを見遣る。お前が答えろよ、とその目が言っていた。再びシロちゃんに顔を向けると、二つの赤が揺らめいた。火を点けた燭を思わせる、儚くて温かな光だった。

「ときどきちょっと眩暈がするけど、それほど酷くはないよ」

別次元の住人に果たして嘘が通用するのか、いささか不安になったけど、幸いシロちゃんはそうですか、とひとこと呟いたきりだった。どことなく安心したふうにも窺える。それ以上は何も訊いてはこなかった。

「シロちゃん、疲れてるんじゃない？」

話題を変えたかったわけでもなく、僕は言った。慣れない空間に普段と違う姿で居続けることは、想像するだけでしんどそうだ。

「そうですね、少し、疲れました」

シロちゃんはこめかみに指を添えて、目を細めた。

「僕の部屋、使ってよ」

躊躇う素振りも見せたけど、やはり疲れているのだろう。シロちゃんは素直に立ち上がり、僕の部屋のベッドに横たわった。黒髪がぱっと散って、それだけでここが僕の部屋だという意識が薄くなる。

「身体に、早く慣れたいのですが」とシロちゃんは言った。

そして目を閉じる前、「あの者も疲れているでしょう」と悲し気に呟いた。

ダイニングに戻ると、佐々木さんが番茶を淹れ直してくれていた。僕はこんなにもマメなおじさんを他に知らない。

「心深は、ホントにやるつもりなのかよ」

佐々木さんの声は尖っている。そんなことを僕に訊かれても、と面食らうが、確かに気にはなっていたのだ。僕はだよね、と曖昧に答えて反応を待った。

「とんでもねえ精神力を使うってのに」

そうだろうな、と同意する。余計なことかと躊躇いつつも続けた。

「身体だって使う」

「あ？　ありゃあ別に、腹を撫でるだけだろう。身体はそう大変でもねえよ」

え？　僕は思わず佐々木さんを凝視してしまう。撫でるだけ？

「腹だか胸だかを撫でて心を解くんだ。ああ、まああれだって大変か……」

湯呑を包み込んだ両手から、身体中がじんわりと熱くなる。耳まで真っ赤になっているだろうな、と内心慌てて、しかし動作は努めてゆっくりと、下を向く。

腹だか胸だかを撫でるだって？ だったら僕の受けたセラピーはいったいどういうことだったんだ。本来はあそこまでする必要はなかったのだろうか。それとも、僕とは身体を合わせなくてはならないほど、心が固く閉ざされていたのだろうか。わからない。

——セックスを軽んじるのはやめなさい。

心深はどういうつもりであんなことを言ったんだろう。

「でも、なんでドイツなんだろう」

静かなパニックを治めるため、僕は少しだけ話題を逸らした。佐々木さんは背凭れに腕を引っかけて、半分だけ僕の方に身体を向けていた。はあ？　と言ったときだけ太い眉が片方上がって、頭だか額だか判別の難しいところに皺が寄った。

「心深がさ。なんでドイツにお城を買うのかって。別にもうあっちには戻らないんだろ？　ていうか、そもそもどうしてドイツに行ったんだろう」

佐々木さんは徐々に半目になって口元を緩やかにへの字に曲げた。今更そんなことを訊くのか、とでも言いたげだった。俺に訊かれても困る、とも思っていそうだ。教えてはもらえないことなのかもしれない。それなら仕方がない。機会があれば心深に直接訊こうと諦めかけた矢先、佐々木さんが難儀そうに口を開いた。

「心深だって今更話し難いだろうしなあ」

そう呟いて、番茶を飲み干し、湯呑をテーブルの上で両手で包んだまま、背中を丸めた。

「まず、なんでドイツなんかに行ったかっていうとな」

「うん」

「あいつは、癒しの能力を買われて、ドイツの高級売春宿に連れて行かれたんだ」

「え！」

僕は驚く。椅子ががたがたと騒々しく鳴った。佐々木さんは僕の様子を横目で眺めながら、如何にもつまらなそうに話し始めた。

心深は既に十六歳のとき、月に一二度程度のペースで、繁華街の片隅に立っていたらしい。目的は身体を売ってお金を得るためだったが、ただの売春行為とは少々趣が違っていた。

その頃既に人の心を解く能力に開花していた彼女は、出会う人すべてと触れ合い、胸や背中を撫で、彼らの中に鬱々と堆積する昏いものを払っていたのだ。だから、厳密には身体を売っていたのではなくて、癒しを与え、対価として言い値で報酬を得ていたのだ。

心深が以前言っていた誰にでも救済があっという、という考え方はこの頃から持っていて、その信念に基づいて街角に立ち、精神の螺子が緩んだり閉まり過ぎたりした人々の調整をしていたというわけだ。

路上で商売をしだして八年くらい経ったある夜、心深の元にひとりの外国人の男性のお客が現れた。彼女はその頃、昼間は社会人として会社勤めをしていて、セラピーは副業というか、趣味で続けていた。男は低い声で聞き取り難い英語を喋った。心深は多少英語の嗜みもあったので、たどたどしいなりに二人の間では会話が成り立ったようだ。

男は、自分はドイツから旅行で来たと告げた。更に心深に、母国へ来て商売をして欲しいと続けた。

あとで知ったことらしいけど、男は観光などしに来たのではなく、最初から日本人の売春婦を探していたのだ。自国で著名人御用達の売春斡旋業をしているのだが、客から東洋人の要望が多くなってきたようで、優秀な人材を探していたところに、心を癒す不思議な力を持つ女がいることを聞きつけたのだ。

お偉いさん連中は常に疲れている。ストレスもマックスだ。普通の火遊びでは足りなくなっている。あなたのような人が必要だ。性交はしなくていい。ただ心を解してやって欲しい、というわけだ。

「ドイツで売春が合法化されてから、二年経った年だって言ってたかな。あいつも好奇心は売るほどあるような奴だから、取り敢えず現地行って女たちの待遇を見て決めるって、次の日にはもう会社辞めたんだ」

凄いや行動力だった。僕はこっそり勘定してみる。十六歳で路上に立った心深が八年後にドイツ人にスカ

ウトされたということは、だ。ドイツの売春が合法化されたのは二〇〇二年のはずで、その二年後だから二十四歳だ。今年が二〇一二年だから、彼女は今三十二歳か。

うーん。やっぱり滅茶苦茶可愛いな。

佐々木さんが続ける。

「元々そういうのに肯定的だったんだよ、あいつは。売春やなんかは表で堂々と誰かが管理すればいいんだって。なんでもかんでも駄目だ駄目だって言って取り締まるから、裏の仕事になって、結果想像以上に悪質になっていくんだって、よく言ってたな。だからどういふもんか見てみたかったんだろな。すぐに向こうで本格的に売春婦に混じってセラピー始たんだけど、著名人御用達だけあって、客のメンツが物凄かったんだと。で、そのうちあいつは、麻薬密売組織のボスの愛人になる」

「なにその急展開」僕は呆れる。

佐々木さんが太い眉を上下させてだろ？ と笑う。

社長、政治家、俳優など様々な人種を相手にした心深が辿り着いたのは、マレーシア人を妻に持つ、五十歳を過ぎた中堅麻薬密売組織のトップの愛人の座だった。

ただ猫っ可愛がりされるのが性に合わない心深は、そこで様々な武術を学び、何かあれば自らがボスのボディガードをするのだと周囲に告げていた。愛する人には自己犠牲的に尽くすタイプのような。やはり彼女は一般女性とやや感性がずれている。

ちなみに、心深の重要な能力である螺子開けだけど、これはここで身に付けたものではない。もっと前からいつの間にかできるようになっていたという。

ほどなくして心深の危惧していた大きな抗争が勃発したが、加勢は当然止められた。

愛するボスはそこで死に、組織は壊滅へと追い遣られた。やっぱり自分が前線に出ればよかったのだ、と心深はおかしな後悔で涙を流した。

寒い日だったという。心深の存在は敵に知られてはいなかったが、マレーシア人の妻は殺されない代わりに散々犯されて捨てられた。彼女には女の子がいた。その子だけは守り抜き、一緒に路頭に迷っていたところを、心深と、最初に心深をスカウトした売春斡旋業の男が助けた。

彼女たちはしばらく売春宿で暮らしていたが、中堅組織の壊滅の影響で店の経営も傾き始めた。組織とがっていた政治家たちの失脚も大きな痛手だったようだ。

心深とボスの本妻だった女への風当たりが徐々に強くなっていった。やがて子供にまで嫌がらせをされるようになった。心深が頼りにしてきた男も、さすがに会社は捨てられず、結局彼女たちは、幾らかのお金を貰って店を追い出された。

愛する人を失ったのは悲しかったけれど、元本妻の姿を見ていると、自分の悲しみが些末なもののように心深には思えた。そのくらい、マレーシア人の女は裏れ、生気がほとんどなくなって弱っていた。

「心深は、一緒に日本へ行かないか、と誘ったんだ」

「元本妻を？」

ああ、と佐々木さんが頷く。

「心深らしいなあ」

僕は溜め息を吐いた。

誰だって救われてもいいのだ。敵だって嫌いな人だって恋敵だって。それぞれにはそれぞれの癒しや赦しがあって、不幸な中にもどこかは必ず幸せであっていいはずなのだ。

自分の不幸と他人の幸せは連動しない。また逆も有り得ない。でも目の前に現れた人が、自分が何とかすることによって幸せに一歩近付けるなら、それがたとえ昨日自分を殴った人だとしても、晏流院心深という人は迷わず手を差し伸べる。そのときにどれ程自分が傷付いていようと。あの人はそういう人だ。

僕はもう気付いている。あの日、ミンナノヘヤで僕が石持兄弟を引き取ろうとしたことを止めたのは、僕が身の丈に合わない荷物を背負うことを恐れたのだ。僕は人としての器がたいして大きくない癖に、単純で調子のいい男だから、目に付いたものに見境なく手を出して、後々押し潰されてしまうことを危惧したのだ。聖母にも優先順位がある。あのときの僕は、間違いなく心深ヒエラルキーの上部にいたはずだ。

今はどうだろう。ピラミッドは崩れて、ただの石畳になってしまっているかもしれない。

さて、心深と一緒に日本へ行こうと誘った元本妻は、ドイツに残りたいと言った。夫の没したここで、子供と二人で生きて行きたい、と。

心深は承諾し、ほとんどのお金を彼女にあげた。アパートも借りてやり、出国の前日、狭いベッドの上で彼女を抱き締めて眠った。翌朝、子供は自分ではなく母親が癒すべきだ、今の私ができるのはここまでだ、と伝えた。そうして彼女は、日本へ帰って来たのだ。

「心深はな、元本妻の子供が不自由なく学校に通える金を送金してる。金を貯めてるのは、二人が住む家と、経営難の売春宿を再建するためだ。あれからどんどん客をとられて、今はいつ潰れてもおかしくない状態らしいからな」

「売春宿も？ そっちは放っというてよくない？ 追い出されたんだし」

「でもなあ、それが心深だしなあ」

佐々木さんはのんびりと言った。僕もそうだねそれが心深だね、と頷いた。

「そのあとで、佐々木さんは心深と出会ったの？」

「いやあ……」

佐々木さんは空っぽの湯呑を両手で持ち上げ、どこことなく気まずそうに口元を隠した。

「再会だな」

「再会？」

「俺は、あいつを何度か補導したことがある。警官だったんだ」

「え、佐々木さんが？」僕の座る椅子がまたがたがた鳴った。

「一時期結構話してたからな。困ったことがあったら連絡してこいって言ったのを、あいつは覚えてたんだ。ドイツから戻って来たとき、俺はもう警官辞めて料亭の板前やってたんだけどな。一緒に金を稼がないかって誘われて、乗った」

「ええ……なんか凄い……」

僕は少し前の佐々木さんと心深の会話を思い出す。昔取った杵柄の話だ。元警官なら多少の護身術は体得しているはずなのだ。ただ、今の佐々木さんはお世辞にもスマートとも俊敏とも言い難い。杵柄は折れて捨てた。なるほど。

僕は何だか脱力してしまい、テーブルに突っ伏した。頭の片隅で、佐々木さんは実は心深のお客だったんじゃないかと考えていたのだ。それがまさか、元警官だなんて。

驚き過ぎて疲れてしまって目を閉じると、急に眩暈に襲われた。ヤバい、と危険を察知した僕は佐々木さんの腕を掴む。引っ叩いてでも起こしてもらわないと、記憶の混濁がまた来る。

たすけて、と言う前に胸倉を持ち上げられて頬を張られて、僕の意識が浮上する。

「明日には解決する。もうちっとの辛抱だ」

佐々木さんが励ましてくれて、僕は少し安心する。

翌日の午前十時過ぎを過ぎた頃に、心深と由幸が帰って来た。

僕は昨日佐々木さんから聞いた話が気になっていて、心深の顔をまともに見られなかった。まさか何で僕と寝たの、などと無粋極まりないことを尋ねるわけにもいかない。単なる気紛れだと答えられても凹む。黙っていよう、と僕は思った。何であれ僕はあのとき救われたのだ。いい思い出として心にそっとしまっておこう、と。

由幸はあちこち汚れていて擦り傷だらけで、疲労がただでさえ明るくない表情を更に暗くしていた。心深はTシャツのお腹のところが裂け、腕には強く掴まれたような痕が付いていた。彼女はそれほど疲れているようでもなく、由幸を風呂場に押し込んだあと、ダイニングで立ったまま立続けに二本、煙草を吸った。

佐々木さんは仮眠をとったけど、結局僕は一睡もしなかった。シロちゃんが寝惚け眼で僕の部屋から出てきて、開口一番すみません、と謝った。自分ばかりが休んでいることを詫びたのだろう。慣れない身体なのだから疲れは蓄積されているはずだ。仕方がない。そう言って心深が微笑むと、シロちゃんは赤い目を眩し気に細めて、申し訳なさそうに頷いた。

「朝飯、食うだろ？」

佐々木さんがキッチンから顔を出した。

「食べる」

心深が答えた。煙草を消し、自室から椅子をひとつ持ってきた。ダイニングには椅子が四脚しかなかったからだ。

由幸が風呂から出てくると、揃って朝食を食べた。クロワッサンとクラムチャウダーとサラダだ。クロワッサンはパン屋さんで買ったものだったけれど、クラムチャウダーとサラダは当然佐々木さんのお手製だ。シロちゃんはやっぱりひと口ひと口をみ締めるように、真剣に食べていた。

「由幸、どうだった」

僕が訊く。由幸はクラムチャウダーを厳かに口へと運んでいた。

「完成よ」心深が先に答える。

「完成とは程遠いです」由幸が、お通夜の帰りのような顔を上げて訂正した。

「一晩であそこまでできたなら、充分なのよ」

心深はクロワッサンをカフェオレで流し込んで席を立った。シャワーを浴びに行ったのだろう。

「由幸、食べたら僕の部屋で少し休みなよ」

「ありがとうございます」

「お前も少し寝ろよ」佐々木さんが僕を見る。

「僕はいい」

眠るのが怖い。

僕は、クロワッサンを小さく千切りながら食べているシロちゃんへと顔を向けた。

「シロちゃん、もしよかったら、散歩に付き合ってくれないかな」

「え？」赤い目が素早く僕を捉える。「わたしですか？」

「頼むよ」

僕は両手を合わせた。シロちゃんは断らない。戸惑いつつもはい、と答えた。

マンションから出て駅とは逆方面に歩いて行ったところに、小さな神社がある。この間心深と少し話をした場所だ。大みそかから新年にかけては結構賑わうものの、普段は閑散としていて、人影なんてない場所だった。まだ蝉の鳴く時期でもない。曲がりくねった松の老木が冷たい影を作っていた。

僕とシロちゃんは社を迂回して裏手に回り、枯れた井戸の近くに木のベンチらしきものを見つけて、並んで腰を下ろした。

「あの、尚親さん、怒ってますか？」

木々の枝が高いところでざわめき、ひんやりとした風がふわっと落ちてきた。まだ日影は寒い。

「怒ってないよ」僕は言った。「なんでそう思ったの」

「陸さんが誘拐されたからです」

シロちゃんはすぐにそう答えた。心なしか、唇が色を失くして震えているように見える。薄手のワンピース一枚だけでは寒いのだろうか。どうにかしてやりたくても、僕には上着がない。

「それはきみのせいじゃないって。でも、他のこと、なにか隠してるでしょ」

細い肩が微かに跳ねた。俯いて露わになった首筋を僕は見つめる。

最初からどこかずれていると思っていた。別次元の住人だからという理由だけでは足りなく、彼女はどこか不自然だった。

由幸をお願いをしてこちらのステージに来たのはいい。慣れない身体(うつわ)に納まって、見知らぬ世界にたったひとりで、結構寂しい状況のはずだけど、それでもこの子は常に楽しんでいる気配があった。誰かを捜し、落とし物を持ち帰ろうとしているだけにしてはここに馴染もうとしている。それとは裏腹にどこか必死で、捜し物が見つからないことを心底恐れているようでもある。目的と行動がちぐはぐなのだ。

もしかしたらシロちゃんは、捜し人は見つけたいけれどネクストステージには戻りたくないのかもしれない。でも帰らないわけにもいかないから、悩んでいる。僕にはそう思えて仕方がなかった。

シロちゃんはしばらくの間固まっていた。やがてより一層頭を垂れると、自分のお腹のあたりに語りかけるみたいに腰を折り曲げたままで喋った。

「本当のことを全部話してはいません」

「そう」

「はい」

松の葉がぱさぱさとあたりに降る。このベンチの頭上だけは僅かに枝が途切れていて、弱々し光が揺らめきながら注いでいた。

ほとんど本当なのですけれど、とシロちゃんは前置きをした。

「落とし記憶を追ってこちらのステージに来た者は、戻れなくなったわけではありません。帰って来なくなったんです」

穴は、確かに長い時間同じ場所へ向けて開いているわけではない。でも本当に戻る気があるなら、落とし物を探して帰り道を見つけることは可能なのだ。何しろ処理人にはこちらとネクストステージを繋ぐ様々なものを感知する能力がある。シロちゃんだって、処理人と共にこれから帰るのだから、道が見つけられないわけがない。

「帰りたくないのでしょうか」

シロちゃんは悲し気にそう呟いた。

処理人は、ネクストステージでの暮らしに飽き、刺激的なこちらのステージで暮らすことに決めたのだ。気持ちはわからなくもない。それならそれでいいから、僕から記憶を取り除いてシロちゃんに托して帰し

てあげてから居付いて欲しい。僕がそう言うと、シロちゃんは真っ青な顔をしてこちらを見上げた。赤い瞳が潤む。

「以前にもいたんです。こちらに来た者が。その者は人に近い形をしていましたが、それでも完全な人の姿を維持するのは疲れます。今いる者の肉体も同じです。限界に近付いているはずですよ。早くこちらに戻らなければ——」

シロちゃんは唇をんで、肩を震わせた。

「崩壊してしまいます。身も心もバラバラになると、聞いています」

シロちゃんの身体は可哀想なくらいに震えて、益々小さくなって見えた。彼はそのことを知っているのかと問うと、知っているはずだと言う。それでも戻らないのだ、と。

怖くはないのだろうか。僕は身体は無事でも心が壊れるのだと知っても、震えあがる程怖いのに。

「記憶が、見つからないから戻らないのかな」

僕の声は低く掠れていた。

僕の中に記憶が入たのは不測の事態で、箱の中に入った物はたとえ処理人といえども簡単には可視できなくなってしまった。それでもまったく見つけれないかと言えばそうでもなく、やはり探す気さえあればここに記憶があるということがわかるようなのだ。

「そうかもしれません。もっと早い段階でなら見つけやすいんですけど、時間が経った今ではかなりの集中力が必要ですので、困難ではあると思います」

「もっと早い段階って、どういうこと？」

「記憶はどんどん同化していきます。完全にくっついてしまうと、もう区別がつかなくなるのです。そうなっては、取り出すことも儘なりません」

つまり、同化しかけている今の状態は、見つけるのも取り出すのもかなりぎりぎりということだ。

ごめんなさい、とシロちゃんはまた謝った。

「実は、どなたかの中に記憶が落ちてしまったのは、今回が初めてではないんです」

過去にも同じようなことが起こっているらしい。そのときの処理人が崩壊したのだ。シロちゃんは知らなかったが、他の処理人に聞いたのだそうだ。

「過去の処理人は、こちらに残りました。やはりここが楽しかったのでしょう。当然、自身が崩壊することも知りませんでした。落とした記憶を捜すのを止め、暮らし始めたのです。人に根付いた記憶は、その人物を……廃人にしました」

ああ、と僕の口から吐息が漏れた。予想はしていた。だけど過去に起こったことだと言われると、更に恐怖が増した。あまり時間がないこともわかっている。近いうち僕は廃人と化し、処理人は崩壊する。そうなったらシロちゃんは戻れないのか。また迎えが来るのだろうか。

こちらの世界は、もうすぐ死ぬとわかっているにも留まりたいくらい魅力的なのだろうか。僕にはそれほどの価値があるとは思えない。でも、彼女の住んでいた空間では、こちらでは当たり前の、たとえば物を食べるとかいった生きるための一切の行為がないに等しいのだとしたら、この世界はとても新鮮に映ったことだろう。崩壊を知っていたシロちゃんですら、ここでの生活を楽しみ、馴染もうとしてしまっていたのだ。

前に心深が言っていた。魂のプールをずっと泳ぎ続けることは、そういう役割は、他の生き方を知ったあとでも続けられるだろうか。彼女たちに死というものが訪れないのだとしたら、永久に同じことを繰り返すしかできないのだとしたら、短い期間でもこのステージにいることの方を選んでしまうかもしれない。

僕の思考が読めたのか、シロちゃんは何かを振り切るように首を左右に動かした。

「あそこが、わたしたちの居場所なんです。戻らなくてはなりません。わたしには、必ず果たさなければならぬ役割があるのです。必ず……」

悲しそうに、目を伏せた。

「役割って、なに」

僕は訊いた。

ネクストステージに戻って魂のプールを掻き回すのが果てのない役割だとしたら、果たさなければならぬ役割とは、何なのだ。

目を閉じていたシロちゃんが息を吸う音が、やけに大きく響いた。

「わたしはその者を一刻も早く連れ戻すか、あるいは抵抗するなら消す。そういう役割を担っているのです」

僕は天を仰いだ。風に揺らされた木々が、川のせせらぎに似た音を立てている。視界は白い。風が、すべてから色を奪って流れて行くようだ。遠近感もなく、ものの輪郭だけが無機質に蠢いている。

そうだったのか。

記憶の回収などは、彼らからしたらいちばん下位の指令だったのだ。

困いより逃げた者は、また元通り中へ戻すか、でなければ消滅を以て永久に追放するのだ。野放しなどは有り得ない。勝手に崩壊されてしまっても困る。元々は相容れない空間の住人だから、こちらのステージに、僕らが認識する『死』とは異なる形によって人体が滅ぶという現象を起こしてはいけないのだ。

人の姿をしている今だからこそ、そのまま、人の形のまま、人として始末するしかない。僕ひとりの精神が灰と化すことくらい、放っておかれて当然だ。むしろ、僕という最小の犠牲によって得られる終息の方が重要のはずだ。

「わたし、尚親さんを助けたいです」

見ると、シロちゃんは泣いていた。ぼろぼろと透明な涙を零し、次々とスカートに染みを作っていた。

「でも、あの者が戻ると言わなければ、わたしは消滅させるしかないのです」

彼女は記憶を扱えないから、僕から取り出してもらったところであちらへ持って帰れない。かといって、捨てておいたらまた誰かに入り込んでしまう恐れもあるため、結局然るべき処理を施さなければならない。持ち帰れないと言うなら、無理に取り出さず、そのまま放置するしかないのだ。

処理人を説得する余裕はあまりない。記憶の癒着は進んでいて、同化は目前だ。

先程身体の調子を訊かれたとき、まあ大丈夫なような答え方をしたが、それは間違いで実は差し迫った感じなのだと言った。僕は告白した。シロちゃんは一層泣いた。

「彼が故郷へ帰りたがってる可能性はないのかな」

「なんとも……言えません。わたしがここを気に入ってしまったので、それは絶望的かと早とちりしてしまいました……もしかしたら、単に決まりが悪くて戻るに戻れなくなっているだけかもしれないですよ」

シロちゃんは涙を拭って希望を口にしました。

「それを願うよ」

無力な人間の必殺技、神頼みだ。

シロちゃんの想いが、ちゃんと処理人に届いてくれればいいけど。僕は顎を上げた。欠伸が出た。早くベッドでぐっすり眠りたい。

いつもの誘拐の誘拐のときと同じ格好に身を包んだ僕と心深は、部屋を出てからひとことも口を利かずに車に乗り込んだ。今日も運転手は心深だ。僕が如何にも眠たげだったからだろう。

後部座席には左から、佐々木さんシロちゃん由幸の順で並んでいる。由幸は急遽家から持ってきた黒のジャケットと、心深のお下がりの黒いハーフパンツを身に付けていた。彼の表情は硬いが、いつもと変わらないと言えば変わらない。この世のすべてが理不尽に思えて仕方がないとでも言いたげな、年季の入った不機嫌面だった。その足下には二千万円の入った大きなバッグが置かれている。それをときどき踝で無意味に蹴っている。

誰も口を開く者はいなかった。夜の闇に浮かびあがる信号がシロちゃんの瞳と同じ色になって行く手を阻んだときだけ、どこからか緊張を紛らす吐息が零れた。

正直、準備が万端だとは言い難い。

相手が何人いるのかすらわからないのに、こちらの状況は筒抜けだ。由幸はあまり当てにはならないし、僕は寝不足だし、佐々木さんはただの料理人だしで何ひとつ問題なしと胸を張れる要素がない。心深だけが何時如何なるときも万全の態勢だった。

しかし、四個目の信号を過ぎたとき、換気もせずに煙草に火を点けようとして、向きが逆さまだと気付いて、窓を開けて何故かそれを投げ捨てた彼女を見て、僕は少々不安になる。まさか、僕らの大黒柱が緊張しているとでもいうのか。心から頼りにしている主軸なのだ。なんとか頑張っただけ。

成功させなければならないのだ。

最悪、僕の精神が処理人と共に崩壊してもいい。本当は、そんなことになるくらいならいっそそのこと死んだ方がマシだという気もしているけど、贅沢は言うまい。僕が廃人になろうとも、陸が由幸の元に戻りさえすればそれでいいのだ。

僕はちらりと後ろを見た。シロちゃんは俯いていて、表情が計り知れない。由幸はじっと自分の膝あたりを見つめている。切腹前の武士のようだ。佐々木さんの顔は僕の位置からは窺えないけど、不安な気配だけはびびりし伝わってくる。それは実は佐々木さんの不安というより皆の不安で、とっくに車内に満ち満ちていて、混じり合っただけで窓の隙間から漏れ出ている。車から不安が漏れて、夜の闇に溶けていっている。後続車がいたらスリップしても仕方がないくらい、重く湿った何かが垂れ流され続けている。それを薙ぎ払うように、心深が吠えた。両側に椰子の木が生えた、あの倉庫へと続く一本道に入った途端だった。

「ああああーなんなのよ辛気臭い！ やるのよ！ 陸奪還よ！ ついでにチカくんも助けるのよ！ あたしが全部丸く収めに行くって言ってんだから皆もっと気張れ！」

片手で天井をぼっこんぼっこんと殴って凹ませる。気迫に押されて僕らは一様に飛び上がった。

「わ、わかったから静かに。頑張るから」

ついでに助けてもらえる僕が、乱心した戦姫をどうにか宥める。こんな時間にここに入るのは、暗闇でイチャイチャしたいカップルか、闇取引を目的とする不逞の輩くらいのもので、こんなに騒がしい車はまず来ないだろう。倉庫からはまだ確認できないと思うけど、仲間がどこかで張り込んでいるかもしれないのだ。

「後ろ、どうなの。やる気あんの」心深がバッグミラー越しに睨み付ける。

「も、もちろんだ」

「はい。わたしも」

由幸も無言で頷く。

「それならいいのよ」

心深は再び前に向き直って、アクセルを強く踏んだ。

両側には、輸出でもするのか、やたらと綺麗に整列した乗用車や明かりの点いていないトラックなどがあるだけで、動く物の気配はない。しばらく進んで、マジスタはヘッドライトを落とし、フェンスの途切れ目を滑らかに左に折れて埠頭に入った。ライトを消したのは乃田に見つからないようにするためではなく、それこそカップルだとか関係のない人に目撃され難くするためのようだった。

暗過ぎて正面に広がる海と道路の境い目がわからない。転落しないためには、微かに闇に浮かぶ縁石だけが頼りだ。それにしたってちょっとスピードを出してぶつかれば軽く超えてしまう程度の大きさでしかない。マジスタはそこをライトも点けずにするすると進む。僕の両足は突っ張り、背中シートに減り込むくらい押し付けられている。佐々木さんがときどき変な声を上げた。怖いのだろう。僕だって怖い。

きらりと光る縁石が間近に見えたところで、心深が素早くステアリングを回す。右手の奥に、こちらに入口を向けた倉庫が四つ並んでいるのが見えてきた。その、ひとつ目と二つ目の間あたりの手前の海が、石持由香里が転落した場所だ。由幸はそこまで知っているのだろうか。

心深はひとつ目の倉庫の横にあったプレハブの小屋の脇に、正面を海に向けて車を止め、エンジンを切った。

真っ暗な中でそと後部座席を窺うと、由幸がじっと海の方を見つめていた。やはり知っているのだ。母親が落ちた場所を。

「あんたたちは、どうするの？」

心深がメリケンサックを装着しながら後ろを向いた。

「どうするって……乃田の野郎は三人で来いって言ったんだろ？ 俺も行かなきゃなんねえんじゃないか」

「来なくていいわよ。シロちゃんと一緒に残りなさいよ」心深が言った。

「そうじゃなくて、あたしが訊いてるのは、身を守る術はあるのかってことよ。こっちに仲間が乗り込んできたら大変じゃないの。トランクに物騒なものがあるから、今のうちに降ろしておいた方がいいんじゃない？」

「ええ？」佐々木さんが眉を下げた。

「待って待って心深」僕が手を上げる。「乃田は僕たち三人で来いって言ってたんだよ？ 佐々木さんが行かなかったら陸は返してもらえない。だから……」

僕は、由幸がシロちゃんと一緒に待機するものだと思っていた。もし僕らの隙を衝いて車の方に襲撃があったときの保険として、彼にお守りとしての武器を持たせようとしていたのだと。結局由幸は素手を選んだため、ここには何も無いが。

五十近いおじさんの代わりに未成年の少年が同行すれば、陸を取り返せないかもしれない。少なくとも心証は悪くなる。悪い奴は、自分が決めた約束事を破られるのを殊更嫌うものなのだ。

「なにを言ってるのよ」心深はサックの嵌った手を振って、うるさそうに遮った。

「三人でしょ？ あたしとチカくんと由幸。佐々木さんまで行ったらそれこそ怒られるわよ。定員オーバーじゃないの」

「定員オーバーってそんな、エレベーターじゃないんだから。由幸頭数に入れてたの？ 乃田の馬鹿が言ったのは、誘拐の誘拐に関わった僕ら三人で来いって意味だよ。由幸はおまけでいいんじゃないかな」

「いいわけないわよ。由幸がおまけだなんて、あんたこそホテルのバイキングじゃないのよ。中坊だからって嘗めてると怒るわよ。立派な戦闘員じゃないの。使える使えないで分けるんなら、この場合佐々木さんの方がおまけじゃないのよ」

いいかしら、と心深は僕らを見渡した。

「乃田の間抜けはただ三人で来いって言っただけなんでしょ？ それならチョイスはこっちの自由よ。佐々木さんの代わりに佐々木さんの母親連れて行こうが警察同伴だろうがそこらで拾ったカップルの片方を担いで行こうが、三人は三人よ。文句言われる筋合いはないわ」

無茶苦茶だ。

「まあ……確かにそうだよなあ」

非戦闘員の佐々木さんが唸る。彼の場合、連れて行かれる方が厭なのだ。殴られ方を教わって肩を痛めたが、その努力が無駄になるのは構わないようだった。むしろそれを理由にしてでも行きたくなかったのだろう。今更わざとらしくそういえば肩も痛いしなあなどとぼやいている。

「そうですよね。乃田のクズ野郎は三人でとだけ指定してきましたから、佐々木さんの代わりに俺が行ったってまったく問題ないですよ」

由幸がぴんと背筋を伸ばした。

こいつ……普段は必要な内容を話すときでも端折る癖に、こういうときだけは饒舌だな。

「だけど、人質がいるんだよ。こういうときは下手に出た方が……」

「下からぶちかましてやればいいんでしょう？ 虫けらの好きにはさせないわ。虫を弄ぶのは、陸のお仕事じゃないの」

どうやら心深は緊張を越えると豪胆な人格が出てくるらしい。さすがは愛する人を守るために抗争に参加したがつた女性である。それよりも、最終的に虫扱いになってしまった乃田が、今夜生きて倉庫を出られるのかどうかが心配になってきた。

「チカくん、あんまり優等生なことばっか言っていると、先にあんたの下の方から潰していくよ」

僕は顔から血の気が引いて行くのを感じた。下の方とは、また恐ろしい。

「ごめんなさい……僕、最初から由幸連れて行きたかったです……」

「よろしい」

「あ、あの……」

か細い声がひょいと飛び込んできた。シロちゃんだ。彼女は心深に視線を注がれ、何もしていないのにすみません、と謝った。

「いいのよ。なあに？」心深が優しく訊く。

「わたしが行かないと、処理人を確認できません」

「ああそうか……」

僕たちが見たゴーグル男が処理人かどうかはまだわからないのだ。判断するために捕まえてここまで連行してもいいけど、万が一似たような格好をした人間が他にもいたらマズい。僕は一度しか見ていないし、心深なんかは一瞬しか目に映していないはずだ。

「やっぱり、佐々木さんに来てもらった方がいいかな」

僕が車から降りて∞エアガンをホルスターにセットしながら言うと、佐々木さんは世にも情けない顔になって首を振った。

「厭……だよねえやっぱり」

一度は行かずに済む運びになったのだ。今更勇氣も気力も沸かないだろう。

「……あ、では……」

着々と準備を進める僕たちを眺めながら、シロちゃんは両手を合わせた。

「ある言葉を覚えて行ってくださいますか？ 彼の前でこれを言い、反応を見せれば、それはわたしたち、ネクストステージの住人です」

「OK」髪を肩口でひとつに括った心深が応じた。

全員、全神経を耳にのみ集中させてシロちゃんのを言葉を待った。何しろまったくといっていいほど覚えられない言語なのだ。ひとことも聞き逃すまいとした。携帯電話を使うという案も出たが、混乱の中、ゴーグル男を捕まえてそれを耳に押し当てての方が難しいと判断して却下した。

「いいですか？」

僕は黙って頷き、その言葉は伝えられた。その瞬間、皆透明人間に肩を叩かれたみたいに変な顔をした。

「え、本当に、今のが？」

心深が訊く。僕にはよく聞き取れなかったが、何となく彼女の疑問は理解できた。

「はい。あの、もう一度言いませんか？」

「いい。わかったから」

もう一度発音しようとしたシロちゃんを、心深が制した。彼女はもう覚えている。

「とにかく、それを言えばいいのね？」

倉庫の方を気にし出した。もう時間がない。

「はい。お願いします」

僕はシロちゃんと佐々木さんを残し、倉庫へと向かった。

武骨に並んだ四つの倉庫のうちどこに陸がいるのか、僕たちにはわからなかった。どれも同じようにシャッターが降りている。脇に小さなアルミのドアがあったが、いちばん手近なノブを回したところ、鍵がかかっていた。

「片っ端から開けて行ってもいいけど、どうする？」心深が言う。

「そうだなあ……」

僕は考える。

以前乃田から子供を取り返したときは、四番目の倉庫に乗り込んだ。身代金受け渡しの当日に佐々木さんから僕に連絡があって、偶然シャッターが開いていたから、急遽そこを使うことになったと言われたのだ。本当は、三つ目と四つ目の倉庫の間で取引が行われるはずだった。

だからといって今回も都合よく倉庫が解放されていたとは思えないし、乃田が何処かのドアの鍵を持っているとも考え難い。取り敢えず四つの倉庫の周りをぐるりと歩いてみることにした。

風はないが、春の夜の海はまだ冷える。早く身体を動かしたかった。

捻くれ者の僕たちは、まず倉庫の裏手に回った。入口を塞ぐように設置されていた錆びだらけのドラム缶を迂回する。建物とブロック塀の隙間が、人ひとり分程度しか開いていない。心深が先に歩き、二千万の入ったバッグを持った由幸が続いた。僕は右のエアガンだけを抜いて、背後に気を配ってそれに続いた。乃田たちはもう僕らの到着に気付いているはずだ。ふと車の方が気になった。あちらに奇襲をかけられでもしたら、一気に窮地に追い込まれてしまう。

僕は倉庫の角に立ち、車と心深たち両方を見守ることにした。僕がついて来ていないことに気付いて振り返った由幸に、先に行けと手で合図をした。

そのとき、三つ目の倉庫の屋根の上に、二つの黒い塊が見えた。中央より少し裏手の壁寄りについて、僕がそちらを見上げたためか、姿を隠そうとして屈んだ。

「心深、上！」

僕は小声で叫ぶ。同時に走り出して、錆びたドラム缶に足をかけて倉庫の屋根に上がった。いつの間にか壁の上に移動した心深と対峙するように、男二人の姿が確認できた。乃田ではない。見たことのない人物だが、これまでに僕たちがぶっ飛ばしてきた男の中の誰かかもしれなかった。下の方で音がしたため振り返ると、由幸が戻って来てドラム缶に上ったところだった。手を伸ばすと、先にバッグが渡された。由幸はどうか自力で上がってきた。

「陸はどこ」

心深の声は低い。

二人は、何も答えない。僕は目を凝らす。シルエットが震えているようにも見える。怯えているのだろうか。確かに、足場もないのに突如塀の上に現れる女は怖いかもしれない。

ひとりの男が悲鳴らしきものを上げながら、心深に向かって両手を伸ばした。

「銃だ」

僕はエアガンを構えるが、ほぼ同時に相手の手の中の拳銃の引き金も引かれてしまっている。心深の身体は、更にそれより早く宙を舞っていた。

「だから何だ！」

銃をも恐れぬ女、心深の踵が男の脳天を直撃した。僕はせっかく構えたガンでもうひとりの男を撃つ。左肩を弾いてこちらを向かせ、足腹胸と連打して失神させた。

車の方を振り返ると、佐々木さんがべったり窓に張り付いているのが見えた。暗くてよく見えないけど大丈夫か、と口が動いたようだった。僕は親指を立てる。再びバッグを抱えた由幸を促して、次の倉庫の屋根に飛び移る。

心深の傍まで行くと、彼女は屋根から身を乗り出して下を眺めていた。付近には、男が二人倒れているだけだった。

「誰がいるの？」僕が小声で訊く。

「この中にね」

心深は、男から奪った銃の先で屋根を叩いた。どうやら通風口を見ていたらしい。僕も覗いてみたが、開閉式の羽根が邪魔をしてあまり内部は窺えなかった。だが、ほんの僅かに光が漏れ出ている。

「ここから入ったみたい」

心深の示す先に視線を遣ると、裏手に付いた通風口の枠が斜めに嵌っているのがわかった。これを外して誰かが中に入って、鍵を開けたのだろう。

「一旦降りて、ドアから行くわよ」

屋根から降りると、心深は銃を持ったまま車へと戻った。窓を開けさせ、そこからそれを差し入れる。

「おい、これ」佐々木さんが驚く。

「護身用よ。これの使い方くらい覚えてるでしょ」

「ああ、まあなあ……」

シロちゃんが怖々と黒い拳銃を見つめていた。僕らはまた倉庫へ向かう。

※

「いい？」

二つ目の倉庫に差しかかったあたりで、心深が僕らを振り返った。

「銃は少なくともあと一丁ある。さっきの愚かな男はたいした扱いもできないのに持たされていたみたいだから、他の奴が撃って来たって、動き回ってりゃ当たらないわ。残りが一丁だけなら、たぶん乃田のポンクラが持ってる。だけどあいつだって腕前は似たり寄ったりのはず。素人の銃は怖がらなくていいのよ」

僕は心深の予想に頷いた。屋根の上のガンナーがあまりにへっぼこだったからだ。あれでは銃を持たせた意味がない。反動に慣れていなくてひっくり返りそうになっていたし、実際に撃ったのも今日が初めてではないだろうか。

「由幸、大丈夫？」心深が訊いた。

「はい。平気です」まったく普段通りのトーンで、由幸が答えた。

「チカくんは」

「問題なし」

おそらく相手は、積極的に僕らを殺してやろうとは考えていない。金と安全を手に入れて、あとはずたずたにされたプライドを補修したいだけだ。そのために脚や腕の一本はぎ取ってやろうとは計画しているはずだ。ただ、打ちどころが悪くてうっかり死んでしまっても構わないとは思っている。

これは怖い。

奴らは——少なくとも乃田は、軽々と人を殺すことができる精神状態にあるのだ。

なにしろ、素人中の素人、覚悟も余裕もないくせにただ引き金を引く指だけは持っている奴に拳銃を渡したのだ。己の指示にまったく責任を持っていない。状況が、自分に不利に動きさえしなければ、あとはど

うなっても構わないのだろう。

乃田は間違いなく撃ってくる。

恐れるべきなのはド素人の操る銃自体ではなく、陸を盾に捕られているということなのだ。宝の持ち腐れみたく言われてしまっている鉄の武器だが、間に人質を挟むと威力は段違いに上がり、性能も倍増する。こちらが勝手に動けなくなるし、陸の頭に押し当てられたらお終いだ。どういう状況に陥っても冷静に判断ができるように、がちがちにではなく適度な緊張感と余裕を胸に抱えて行かなければならない。由幸はその点は問題ないように思えた。非常に落ち着いている。冷静に情勢を見極めれば必ず上手くいくと信じているのだ。

三つ目の倉庫の前に立つと、ほんの僅かな隙間から漂ってくる空気に緊迫したものを感じた。尖った殺気がシャッターを貫いてきて、肌をちくちくと刺す。

心深の手が躊躇いがちに伸ばされ、ドアノブに触れる前にさっと引っ込められた。

「どうしたの」

僕が訊く。心深が振り返る。

「チカくん」

「うん」

綺麗に上を向いた睫毛で飾られた瞳が、僕を見上げた。

「あなたは、あたしが守るから」

「ん？ ……う、うん」

こういう場面では、それは僕のセリフなのではないだろうか、と思った。案の定、斜め後ろで由幸が、無表情ながらに腑に落ちないといった雰囲気醸し出して立っている。僕はちょっと恥ずかしくなる。

これが心深なりの愛情表現だということを、知ってしまったからだ。

僕は今までに何度も心深の気持ちをぶつけられてきていたのだ。

心深が守る、あるいは助けると言うなら、それが命懸けの場面であればある程、彼女は相手を大事にしているということだ。

僕は鈍くてなかなかそれに気付けなかった。

心深はあのとき、ぐちゃぐちゃ悩んでマンションに帰らなくなって、そのまま何処かへ行ってしまいそうだった僕を繋ぎ止めたくて、ちょっと踏み込んだ癒しを行ったのだ。早く心の重りを取り除かなくては、僕が自分の傍からいなくなってしまうと思って怖くなったのだ。あまりに鈍感な僕に対する、最終手段でもあったはずだ。

僕は馬鹿だ。

心深だって人間なのだ。好きな人がいなくなれば、それなりに慌てる。自分が動くことで阻止できることがあれば、なんでもする。彼女はそういう人だ。わかっていたはずじゃないか。

昭和の父親の風格漂う由幸には、僕のことあまりにも頼りなく映っているに違いない。

僕はもう、心深の告白に対してと由幸への威厳を失いつつあること両方が恥ずかしくて堪らない。けど今は頬を染めている場合ではない。照れるのも落ち込むのもあとでいい。

僕は少し斜に構えて、咳払いをした。由幸の視線が痛い。言うだけ言ったらさっさと倉庫の方を向いてしまった心深の旋毛を見遣り、心を落ち着けるべく深く呼吸をした。

「行くわよ」

心深の指先が、今度こそアルミのドアノブに触れた。

倉庫の中は思ったよりは明るかった。天井に蛍光灯が設置してあって、今は中央のひとつだけが点されていた。真っ暗闇か、燭程度の明かりを想定していた僕は多少ほっとした。

内部にはいくつかの段ボールと木箱があった。乃田を含む五人の男たちがバラバラに立っている。一応何か作戦があって、その通りに配置されたのだろうと想像した。

僕は注意して全員の顔を見た。

乃田の右後ろの方、わざと暗がりに身を置いている男がサングラスらしきものをかけていることが、辛うじて確認できた。でもそれがゴーグルなのかどうかまではわからなかった。あんな感じの奴に石灰をぶつけられた気もするが、はっきりとは覚えていない。シロちゃんより伝授された目覚めの呪文をいつ発動しようかを考える。今はまだ、黙っていた方がいいかもしれない。でも、早く言わないと僕はその言葉を忘れてしまいそうだ。既に細部が曖昧で、頭の中から溶け出して行ってしまいそうだった。

部屋のほぼ中央にいる乃田の前に木箱があり、その上に、両手足を縛られて口にガムテープを貼られた陸が座っていた。陸は僕らを見てん一、と唸った。丸い瞳に涙が溜まり、由幸を見つめながらそれを零した。由幸は思わず前のめりになった身体を、理性を総動員して固めている。すぐにでも駆け寄りたいの、止めている。奥歯の擦れ合う音が聞こえてきそうなくらい必死だった。自分が動くことによって、この場が不利に働くかもしれないことをちゃんと考えている。

僕らはシャッターの前に移動して、乃田と対峙した。

「あいつ、絶対ナルシストよ」ニヤニヤ笑って立っている乃田を顎で示し、心深が吐き捨てるように言う。

「気持ち悪い」

「おい、ちょっと待て」

気持ちの悪いナルシストがこちらに身を乗り出し、目を剥く。

「俺は三人で来いって言ったんだぞ」

「来てるじゃないの」心深が肩を竦める。

「ひとり別人じゃねえか！ おっさんはどうした」

僕は心深と顔を見合わせた。ほら怒られた。

「朝起きたら若返ってたのよ」心深が適当なことを言う。

「ふざけんな！」案の定乃田が真っ赤になって怒鳴る。「そいつはこのガキの兄貴だろうが！」

一瞬でバレた。当たり前だ。

心深が心底面倒臭そうな顔をして舌を打つ。

「いいじゃないの。おじさんは腰が痛くて二千万もの大金の入ったバッグを持てなかったのよ。だいたい人選の指定はなかったはずよ」

どんな理屈だ。バッグなんか僕たちが持てばいいことだし、わざわざ指定などしなくとも、この場合どの三人で来なければいけなかったかは明白だ。僕は陸を見る。可哀想なくらい震えている。その肩に乃田の汚い手がかからないかを見張る。一度はホルスターに収めたエアガンを指先でなぞる。

陸に触れたら撃ち落としてやろうと思っていた乃田の腕はしかし、大きな溜め息と共に胸の前で組まれた。「まあいい」と言う。

所詮は子供だと軽んじたのだろう。むしろ子供が来てよかったと思っている雰囲気だ。

「よくも俺たちを利用してくれたな」

「それは、悪かった」僕は、心深が何か恐ろしい暴言を吐く前に素直に謝った。

「言われたとおりにお金を用意したんだ。それで、陸を返してくれないか」

「持って来たんだな」乃田は少々粘着質な口調になって、口元を歪めた。

「ああ」由幸がバッグを掲げる。「陸を放せ」

乃田は由幸の訴えを無視して、入口近くに配置されていた男に目配せをした。男がそろりところらに近付き、手を伸ばす。こいつには見覚えがある。前回小出裕也くんを奪還したときにロッカーに押し込んだ奴だ。ここにいる男たちと屋根の上で伸びている奴らは、乃田一派と前回の誘拐犯たちとで構成されているようだ。まったく別の地域に生息している彼らがどこでどうがったのかはわからないが、ならず者の世間は思った以上に狭いということだろう。

由幸が僕を見上げる。このままバッグを渡していいのか、と訊いているのだ。

「中身を確認しろ」

乃田の指示が飛ぶ。

僕は由幸からバッグを受け取り、ファスナーを開けて中を見せる。男は手をいれてざっと掻き回した。

「あります。全部カネです」男が上擦った声で報告する。

「持って来い」

バッグを奪おうとした男の手首を僕は掴んだ。「陸が先だ」

乃田は厭な笑みを浮かべて、陸の足を纏めていたロープだけを解いてから箱から突き落とした。腰が抜けているのか、陸はまだ立ち上がることができない。

「陸！」

残りの男たちが一斉にこちらへと近付いてくる。グラサン男の顔はまだ確認できない。わざと姿を見られないようにしているようにも感じる。

「ガキは歩かせる。その間、ちょっとでも抵抗したら殺すからな」

懐から拳銃を取り出した乃田は、座り込んでしまっている陸に銃口を向けた。

「お前たち、武器を捨てろ」

他の奴は、ひとりがナイフのようなもの、もうひとりが鉄パイプのようなものを取り出したが、あとは素手だ。心深の予想通り銃はもう出てこない。僕は少し安心した。

「根性腐ってるわね」

心深が小さな声でぶつくさ言いながら、メリケンサックを外した。僕もエアガンを二丁纏めてコンクリートの上に置いた。

縛られっ放しだったために足が痺れているのか、陸は中々前に進まない。後ろ手に両手が拘束されたままで、バランスが取り難そうだった。

陸がこちらに到達するまで、ざっと五メートルはある。エアガンを拾って乃田の手の中の銃を撃ち落としたかったが、その前に引き金が引かれてしまうだろう。陸の歩は遅い。いくら下手な鉄砲でも一発で当たってしまう。

四人の男たちが僕らの前に立ちはだかった。後ろは壁だから、囲まれた状態だ。僕はサングラスの若い男を見る。やっぱりというべきか、それはサングラスではなくてゴーグルだ。瞳の色どころか、目の位置もわからないくらい濃いレンズをしている。向こうも僕を見ている。目が合っているのだろうか。心なしかそわそわして見えるのは気のせいだろうか。

シロちゃんが近くにいるからかもしれない。感知能力に長けた処理人は、同じ空間から来た仲間の気配があることに戸惑っている。僕の中に追いかけて来た記憶があるのもわかっただろうか。だとしたら、僕のことは誰の顔として彼の瞳に映っているだろう。

僕は摺り足で壁伝いに移動する。

僕と心深は殴られ方を知っている。武器がなくとも、そこそこ受け流すこともできる。だが、由幸にはそこまでの能力がないから、手を出させるわけにはいかない。由幸を背後に庇って移動するうち、左側の隅の方へと追いやられる形となってしまった。乃田が高い声を出して嗤う。

「馬鹿じゃねえのか。ガキからどんどん離れるぞ」

「黙って殴らせろよ」

僕がかつてロッカーへとしまい込んだ男が、興奮を隠しきれないといった感じで言った。

僕は歩くのをやめ、左手を後ろに回し、体温までも素っ気ない由幸の右腕をむ。心深の傍にいる男がナイフを持っている。僕は、そいつが自分の傍にいないでよかった、と思う。

誰かが小石を踏んだのかじゃり、という音がやけに大きく響いた。それを合図に、男たちが拳や武器を振り上げて飛びかかってくる。

僕と心深は同時に腰を落として、片足を半歩、踏み出す。

「せーのっ！」

心深のかけ声。

僕は彼女とタイミングを合わせて、後ろ手に掴んだ由幸の腕を引っ張って、前方へ思い切り押し出す。男たちの足の間を、由幸の細い身体が足の方からスライディングして行く。心深がナイフを持った男の腕を蹴り上げる。僕はど真ん中に身体ごと突っ込んで行って、由幸が捕まらないようにする。乃田が銃口を滑って行く少年に向けたのを確認する。動いていれば当たらない。その言葉を信じている由幸に怯んだ様子はない。本当は、弾は当たるときは当たるのだ。由幸の度胸に僕は感心する。

一発目の発砲が、どちらかという僕たちのいる方に近い木箱を弾き飛ばした。由幸は床に手をついて体勢を立て直しながら陸に近づき、震える腰をがばっと捕まえた。

「よし！」

心深がガッツポーズを見せる。

由幸の体格はまだ発展途上だけど、シロちゃんを釣り上げた強い腕を持っている。抱えられた陸の身体が、ふわっと浮き上がる。そのまま、倉庫内をぐるっと巡って段ボールや木箱の陰に身を隠した。銃弾が至るところで木や石を跳ね上げるが、ひとつとして人間には当たらない。と思ったら乃田の舎弟の足下を掠めて、そいつがか弱い女性のような悲鳴を上げる。

「の、乃田さん！」

「うるせェ！」

僕は尚も僕に向かってくる男をかわし、先程置いたエアガンを掴む。ひとつにしか手が届かなかったが、ラッキーなことに扱いやすい右手用だった。低い姿勢で乃田の手元を狙い撃つ。銃が吹っ飛んだ。これが年季の違いだ。

不覚にも誰かに体当たりを喰らわされて、僕はよろめいた。顔を上げるとゴーグルが間近にあって、驚く。

「なんなんだよ、お前！ 誰なんだ！」

ゴーグルが叫ぶ。かなり怯えている。腕を掴んで引き寄せ、背後を取る。耳元に口を寄せたが、何となくそれは僕の役割ではないような気がした。

「心深！」

僕はゴーグル男を抱えたまま右手用エアガンを口に銜え、もうひとつのエアガンを足を使って拾い上げた。心深が避けた隙に、気圧を変えた空気の塊を男たちにぶち込んで纏めて吹っ飛ばす。

ゴーグル男の胸倉を掴んで押し出すと、それを心深が背中の方から抱きとめた。

心深が、そっと息を吸う。

「次の世の発掘の跡。遍く巡る至る中央より排斥」

「な……！」

このステージにいる住人には意味のない呪文で、ゴーグル少年の身体が固まる。

心深の指が、驚く顔からゴーグルを奪う。

僕を見つめる彼の見開いた瞳は、シロちゃんとよく似た色をしていた。

屋根の上で伸びていた奴らも引き摺り降ろしてきて、全員を倉庫の中央に纏めた。

陸はガムテープを外した途端泣き出し、由幸にしがみ付いた。あちこちに擦り傷ができていたけれど、特に大きな怪我もなく、健康そうだった。心深が、泣ける元気があるなら大丈夫、と言って兄弟の頭を交互に撫でた。

「意味、通じた？」

僕は乃田の両手を陸を縛っていたロープで括りながら、ゴーグルを外した処理人に訊いた。彼は気まずそうにジャケットのポケットに両手を突っ込んで、小さく頷いた。横目で心深を見て、釣り気味の目を細めた。

「イントネーションは変だったけど、意味はわかった」

「何て言われたの」

「え」処理人は驚いた顔をした。「知らなかったのか」

「え、うん」

「目の前の彼を助けて。そうすれば、決してあなたを責めない」

入口の方から答えが返って来た。

「——そう言いました」

シロちゃんと佐々木さんだ。処理人が、やっぱり何度聞いても耳から擦り抜けてしまう彼女の名前を呼んだ。

目の前の彼、とは僕のことだろう。あのとき咄嗟に心深に托してよかったと思った。単に、以前シロちゃんのいる世界の名前が、偶然ではあったけど通じていたこともあって、心深が適任だと判断したのだけれど、結果としてよかったわけだ。僕が同じことを言ったら、そのとき目の前にいた僕以外の誰かが助けられてしまうところだったかもしれない。

シロちゃんはこのことを読んでいたのだろうか。いちばん聴力のよかった心深がそれを言うことを。「捜しました」

シロちゃんが、彼の名前らしきものを口にした。僕には「カイリ」という部分しか聞き取れなかった。

「カイリ！ お前、グルだったのかよ！」

乃田が声を上げた。彼はやはりカイリと呼ばれていたらしい。

「僕らはずっと彼を捜してたんだ」

僕が答えると、乃田は眉を顰めた。何が何だかわからないのだろう。黙ってなさいよ、と心深に殴られていた。

シロちゃんとカイリくんは、小さな声で僕らには理解できない言語の遣り取りをした。ときどき怒ったように声が鋭くなった。それを宥めるようにシロちゃんは根気よく落ち着いて話した。

戻るならお咎めなしの今しかないのだと、説得しているのだろうか。

やがて念を押すみたいに同じ言葉を繰り返して確認していたカイリくんが、シロちゃんから離れて僕の前に立った。由幸といい勝負の仏頂面だ。相変わらずポケットから手を出そうとせず、ぶっきらぼうに言う。

「それ、取り除くから。……悪かったな」

「帰る気になった？」

「ああ」カイリくんがシロちゃんを振り返った。「俺が戻らないと、あいつが消えるんだ」

「そうなの？」

カイリくんが頷く。彼の肩越しに見たシロちゃんは、申し訳なさそうに微笑んでいた。

「俺が帰らないんなら、自分も戻らないって、言い張るんだ」

カイリくんの眉が、しゅんと下がった。

「ああ……」

それは、後味が悪いだろうな、と思った。自分だけなら、もう割り切っているから、短い期間刺激的な人生を全うして朽ちてしまってもいい。でも、そのせいで他人が死んでしまうとなると、もう何にも楽しめない。カイリくんの人生は、カイリくんだけのものではなくなってしまう。

嘘だろう、どうせ俺が消滅したら帰るんだろう、と思っているけど、弱っていく彼女の姿を目にするのは耐えられないだろう。万が一自分より先に消滅してしまったら、その時点で何故そうまでしてここに留まっていたのかわからなくなるかもしれない。僕だったら、きっとそうなる。

シロちゃんは強い。というか、どこの世界も、女性という生き物は根性があるものようだ。

「おい、やるぞ」

僕は視線を戻して頷いた。

「うん。頼むよ」

やり方が、心深の癒しと似ていた。

といっても、胸やお腹を撫でたりはしない。こめかみのあたりを両手で覆い、髪を掻き上げられた。その動きや雰囲気、心深の手付きの丁寧さと似ていたのだ。

頭の中に光を当てられた感じがした。暗い隅の方までライトを向けて探すようだった。カイリくんの指が、碌でなしの親父を持つ息子と、こちらもやっぱり最低の父親を持ってしまった不幸な胎児の記憶を摘む。

ああそうか。僕は今更気付く。

二つの記憶は、同じような境遇だったからこそ癒着したのかもしれない。

そして僕もまた両親がいない。父親がどんなものなのかよく知らないけれど、だからこそ、父親像というものがいないからこそ、単純に共感して味方になってくれそうだと思う、ここに入り込んだのだ。

——それはないか。

僕は笑う。

たかが記憶の断片だ。

そこから何かを考え、発展させることなんて有り得ない。ましてや寂しがって身を寄せ合うなんてことはない。

ただの偶然だ。

だけど僕は偶然のもたらす符合が気に入ってしまう。悲しい記憶に塗れたこの魂が、このまま寄り添ったまま、カイリくんたちの手によって浄化されればいいと思う。そして、まっさらになって今頃金色のサークルを廻っているであろう魂たちに、今度こそ幸せが刻まれるように祈る。

なに笑ってんだよ、とカイリくんが気味悪そうに言う。僕は何も答えない。

「終わったぜ」

「え、どうなったの。消しちゃったの」

「いや、持ってる。こっちの空間では色が多過ぎて見えないだけだ」

「そうなんだ」

「アタマ、もういいか？」

「うん大丈夫。ありがとう」

お礼を言うと、カイリくんはちょっと泣きそうな顔をした。あ、泣くかな、と思ったけど涙は出ない。ど

こに行っても由幸みたいな意地っ張りはいるものなのだ。可笑しくて僕はまた嘔き出してしまう。カイリくんが変な顔をする。

「で、こいつらはあたしが始末すればいいのね」

心深が乃田の足を蹴る。

「なにすんだよ！」乃田が怒鳴った。「お前ら、犯罪者だぞ。悪いことやってんだろ！」

心深が、壁の落書きを眺める目つきで見下ろした。

「だから何よ」

乃田は目を見開き、何かを言い返そうとして、結局黙った。

「そっちも俺がやる」カイリくんが男たちに近付いた。

「記憶、抜いていく。だからちょっと出てろ」

「あんたが？」心深が睨む。

「わたしもついていますから」

シロちゃんが二人の間に入った。

「お、俺たちはどうなるんだ……」

乃田の情けない声にカイリくんが答える。

「ちょっと魂に瑕が付くだけだ」

僕らは、怯えた小動物のようにカイリくんを見上げる男たちと、異世界の住人を残して、倉庫を出た。

「あー、暴れ足りない」

車に凭れて、心深が背中を伸ばす。佐々木さんの手にはいつの間にか拳銃が二丁握られていた。

「僕とお揃いだ」

「馬鹿なこと言うなよ」

佐々木さんは厭そうな顔をしてしばらく二つの鉄の塊を眺めていたが、結局目の前の海に投げ捨てた。

「あーあ」

拳銃は、細かい泡を水面に残しながら沈んで行った。

「いらねえよあんなもん」

「はは。そうだね」僕は頷いた。

「チカ兄っ！」

ずっと由幸と手を繋いでいた陸が、走って来て僕の腰に抱きついた。

「え、今チカ兄って言った？」

僕は嬉しくなる。二千万の入ったバッグを肩に担いだ心深が、隣で複雑そうな顔をしていた。『ころみおねえちゃん』では長すぎるから、呼ばれたら厭だとでも思っている顔だ。

陸はジャケットに顔を埋め、もごもごとお礼らしきものを言いながらふえーんと泣いた。僕は陸を抱き上げて、ハンカチで涙と鼻を拭いてやる。もう一回チカ兄って言って、とお願いをすると恥ずかしそうに応じてくれた。可愛い奴め。

「俺、心深さんに弟子入りします」

ずっと黙って考え込んでいた由幸が、真顔で物騒なことを宣言した。

「俺たちの仲間になるってことか」佐々木さんが頭を光らせて驚く。

「はい」

「あたしは構わないわよ」心深が快諾した。

「おいおい……どうすんだ、尚親」

お金儲けをしたいという心深に、誘拐の誘拐を提案したのは僕だ。大所帯にする気はないけど、由幸の

度胸は捨てがたい。なにしろ本物の銃を前にしても冷静だったのだ。今後もしまた粗暴な奴らに立ち向かう出来事があったとしたら、必ず戦力になる。

というより僕はこの兄弟をすっかり気に入っている。彼らさえ許してくれるなら、僕の本当の兄弟にしてみたいくらいだ。つまり、どう悩んだところで断る理由がないのだ。彼らの望むとおりにしてあげたい。

僕は、真剣なんだか不貞腐れているんだか判別の難しい少年の顔を、正面から見据える。

「由幸、よろしく」

陸がきゃは一、と声を上げた。

由幸は、今日のおやつが気に入らない子供のように口をへの字に曲げて、小さな声でありがとうございます、と呟いた。

「こちらこそ、ありがとう」

赦してくれて、ありがとう。

陸奪還のミッションから二日経っていた。

倉庫の中にいた乃田とその仲間たちは、カイリくんによって僕らに関する記憶をすべて取り除かれたようだった。

——俺たち、なんでこんなところにいるんだ？

催眠術が解けたあとみたいにぼんやりとした顔で、乃田は言った。

カイリくんは木箱を爪先で軽く蹴ってから、積荷を盗むって言ってたじゃないか、と答えた。

だけど木箱や段ボールの中には工具やガラクタが詰まっているだけだった。誰もが腑に落ちないといった感じではあったけれど、盗む物もないから結局皆街へと戻って行ったそう。ただ、乃田だけは石持由香里が転落したあたりの縁石を眺め、しばらく立ち尽くしていたらしい。

僕らは、カイリくんとシロちゃんが戻るのを待ち、五人乗りのマジスタに明らかに定員オーバーして帰路についた。

皆で僕らのマンションに行き、佐々木さんの作ってくれた夜食のラーメンを食べて、そのまま泊まって行った。僕は翌々日の朝までたっぴり寝た。何度か起きて寝なおして、というのを繰り返し、いい加減脳味噌が溶け出すんじゃないかという頃、心深と陸が部屋に乗り込んできて叩き起こされた。

シロちゃんたちが帰るのだという。

「どうやって帰るの？」

お世話になりました、とこちらの挨拶がすっかり板に付いたシロちゃんに、僕は訊いた。

横に並んだカイリくんはやはり由幸と同じ種類の表情をしていて、そのせいもあるのか、陸がやたらと懐いていた。

きみを誘拐した犯人のひとりなんだぞ、と僕は呆れた。でも、怒りや恨みが持続しない陸の性格はなんだかいいな、とも思った。僕もまあ、陸と由幸が無事だったからいいか、と思っている。陸や由幸に何かあったら違った感情を持ったのだろうが、何ももしもの話で怒ることもない。僕もたぶんどこかで乃田と会ったら、挨拶くらいはできるだろう。……ああ、もう僕のことを覚えてはいないのか。ちょっとだけ残念だ。

「いちばん近い穴が、えっと……」

「仙台」カイリくんが答える。

「そう。仙台に開いているんです。そこから、帰ります」

「仙台とは、また遠いな」佐々木さんが頭を撫でた。

「これでも近いんだ」

カイリくんがこちらに来たばかりの頃は、いちばん近くても海を越えなくては帰れない位置に穴が開いていたこともあったらしい。

「カイリくんは、大丈夫なの？」

皆の手前もあって、僕の訊き方は非常に曖昧な感じになった。それでも意を汲んでくれたシロちゃんが頷く。

「記憶も戻りましたし、この者も一緒に帰ると言いました。少し怒られるかもしれませんが、大丈夫です」

カイリくんの表情が暗くなる。怒られるのが厭なのだろう。

「シロちゃんは、いいの？」

帰ってやっていける？ と言外に滲ませつつ僕は訊いた。少し意地が悪い質問だったかもしれない。

「はい」シロちゃんは笑顔で答えた。

「あちらが、わたしの居場所ですから」

爽やかな笑顔だった。諦めとか吹っ切れたとかいった影は微塵も窺えない。うまく隠しているだけかもしれないけれど、シロちゃんは、自分なりに自分の役割がわかって、納得もしているのだろう。カイリくんと一緒に帰れることが嬉しいようでもあった。

「皆さんには、大変な思いをさせてしまって、すみませんでした」

あなたもいけないんですよ、と言われたカイリくんが、ぎこちなく頭を下げる。

「皆無事だったし、僕らも乃田のことで助けてもらったから、チャラだよ」

「そうね。乃田にもう付き纏われないのはよかったわ。あんまり知らないけど、相当しつこそうな奴だったし」

煙草の煙を燻らせながら、心深は肩を上下させた。

「由幸さんも、陸さんも、ごめんなさい」

「いーよ。だいじょぶ！」陸は親指を立てた。

「まあ、陸無事戻ってきたし、いいですよ」由幸は、鼻の頭をきながら、ぶっきらぼうに言った。

駅まで送ろうか、という申し出を、二人は断った。

「おい、これ」シロちゃんの前に太い腕がにゅうと付き出された。「弁当だ」

「わあ、ありがとうございます」

シロちゃんの赤い瞳が、幸せそうに細められた。

「そうだ」僕はシロちゃんを見下ろす。「ひとつ、訊きたいんだけど」

「はい、なんでしょう」

「そっちに、シロちゃんたちのステージに、神様っているの？」

シロちゃんはちょっとだけカイリくんと見つめ合って、二三度瞬きをした。

「なんですか？ カミサマって」

僕は何故だかほっとした。

「なんでもない」

シロちゃんたちは不思議そうな表情をしていたけれど、それ以上は尋ねてこなかった。ただ、カイリくんは顎まで覆ったジャケットの襟に口元を隠すようにして笑いを堪えていた。カミサマが何なのかを、彼は知っているに違いない。きっとこちらに来て覚えた概念なのだろう。

行動あるのみかな、と僕が呟くと、カイリくんがこっそり頷いた。

「また会えるう？」

陸が、シロちゃんとカイリくんを見上げながら小首を傾げた。

「そう、ですね……」

シロちゃんが、眉を寄せて困ったように俯いた。

「ああ。またな」

カイリくんが遠くを見たままで答えた。陸が嬉しそうに飛び跳ねた。

僕はへえ、と言ってしまいカイリくんに睨まれる。

シロちゃんとカイリくんは陸と由幸と握手をして、それから二人並んで駅への道を歩いて行った。

由幸は相変わらず世の中すべてに納得がいけないみたいな顔をしていた。目の下に皺が寄りあ、泣くかな、と思ったけどやっぱり彼は泣かない。僕はまたそれに気付かない振りをする。溜めて溜めて、いつか爆発したとき、傍にいる誰かが思い切り甘やかしてやればいい。

小さくなっていく背中を眺めながら、僕はネクストステージに想いを馳せる。

そうか——。

いつかまた会えるんだな。

そう思った。

しばらく経ったある日の夜、僕は真っ暗な空間に浮かぶドーナツの夢を見る。

僕はたったひとりで大きな金色のドーナツの傍に浮かんでいる。でも全然浮いている感じはしなくて、見えないだけで足下にはちゃんと道があるみたいな感触だった。

僕は何もなしで足を動かし、しっかりと歩いてそのドーナツに近付いた。あまりに大きすぎて、真ん中に穴が開いていることまではきちんと把握できないそれは、よく見てみると、何だかふにゃふにゃしたえらくたくさんの塊で構成されていて、ひとつひとつがぼんやりと発光している。

その金色の光がときどき剥がれて、雲か煙のようにあたりに漂っていた。遥か下の方で何かざわざわと蠢く気配がある。剥がれた光がざわめきに誘われるように緩やかに落ちて行く。

遥か上の方に白いふにゃふにゃがひと塊、何とも頼りなげに群れから離れて行くのが見えた。

そこに、柔らかそうな座布団に座ったままの人らしき影が近付き、四本ある触手にも似た腕をそれぞれに伸ばして、浮遊する白い物体に触れた。やがて塊は人の手から離れ、尚もふらふらとしながら去って行った。

腕を四本持つ人は、それが闇に溶けて見えなくなるまで、ずっと見送っていた。

ふと影がこちらを向いた気配がした。顔は金色の光を受けて白っぽく発光して見え、ここからでは表情は窺えなかった。じっと僕を見下ろし、左の上の手をちょっと上げた。僕も一本しかない左手を上げた。影がふわっと膨らんだ気がした。笑ったのかもしれない、と僕は思った。少しの間手を振り合っていたが、そのうち何度か頷くと、影は闇の彼方へ飛び去って行った。

僕は再び、金色に顔を近付ける。

塊は、連なっている部分もあり、そうでないもの同士は柔らかくぶつかったり何となく跳ね返ったりときどき千切れたりしていた。それ自体は自由で不規則な動きをしているけど、全体として見ると、皆同じ方向へと流れて行く。

水槽に入っただけではない。手を伸ばせば触れられそうだ。

仕切りがあるわけでもないのに、それらは、発光している限りは決して群れから離れることはない。先程のように、剥きたてのゆで卵みたく真っ白くなった塊だけが離脱して、遠くへ浮遊していくのだ。

綺麗だな、と眺めていると、不意に目の前を白いによろりとしたものが通り過ぎた。漂うものたちとは違って、はっきりとした意思のある動きをしていた。

——魚、か。

身体はつるりとしていて、淡いピンク色の小さな鱗らしきものがある。

泥鰌に似ている。

白い泥鰌が、発光する塊と一緒に回遊しているのだ。

いや——泥鰌が、このふにゃふにゃしたものたちを一定方向に動かしているのだ。

僕は左右に揺れながら遠ざかる尾鰭を見つめた。

あとから、二匹目の泥鰌が泳いで来た。

それは、僕の前を通り過ぎるとき、赤い目をこちらに向けてゆっくりと一度瞬きをした。

——元気そうだね。

僕はその優美に泳ぐ白い姿に手を振り、見送った。

金色に輝く塊は、無数の星々のように煌めき、幾匹かの泥鰌と共に実にゆっくりと流れて行く。

僕は傍らに立ち、いつまでもそれに見惚れている。

了